西鶴の世界

暉峻康隆著

木水社刊

西鶴の世界

昭和二十三年五月十日印刷
昭和二十三年五月十五日發行
昭和二十四年二月十八日第二版

西鶴の世界

定價金八拾圓

著者　暉峻康隆

發行者　今村隆
東京都中央區
日本橋通三ノ八

印刷者　青山與三次郎
東京都港區
芝琴平町二ノ八五

配給元　日本出版配給株式會社
東京都千代田區
神田淡路町二ノ九

發行所
株式會社
木水社
東京都中央區日本橋通三ノ八
電話　日本橋（24）四三七三

目次

西鶴の人と生涯……（一）
西鶴の文藝理念と方法……（二九）
西鶴の風俗描寫……（四六）
西鶴の愛慾小說……（六一）
A　愛慾の起承……（六一）
B　愛慾の歸趨……（七八）
西鶴の無感傷性……（九九）
西鶴の唯美主義的傾向について……（一一六）
西鶴と推理小說……（一三七）
西鶴と白石……（一五七）
西鶴晩年の生活と藝術……（一六五）
あとがき……（二〇六）

西鶴の人と生涯

1

日本の歴史がはじまつていらい、貴族・武家・僧侶といふ特權階級の手中に歸してゐた文學を、みごと民衆の手にうばひとつたのみならず、わが國においてもつとも達成された現實主義的作家井原西鶴は、伊藤仁齋の次子伊藤梅宇の「見聞談叢」によれば、俗姓を平山藤五といひ、大阪の裕福な町人の家に人となつたが、早く家業を手代にゆづつて文學に生涯をかけた。思ふに作家として用ひた井原姓は母方の姓ででもあらうか。墓は大阪市東區上本町誓願寺にあり、碑の表に「仙皓西鶴」、左側面に「元祿六年癸酉八月十日」、右側面に「下山鶴平・北條國水建」とある。同じ大阪で元祿七年十月に五十一歳でで歿した芭蕉よりも一年早く、西鶴は五十二歳（置土產）で六年八月十日に歿したわけである。したがつて出生は寛永十九年といふことになる。

寛永末年といへば三代將軍家光の時代で、天主教と結びついた反幕府的な浪人群の活動を鎖國令

（寛永十三年）によつておさへる一方、國内に雌伏する封建領主に對しては參勤交替の制（寛永十二年）を設定して中央集權を確立し、幕府の威令はやうやく定まり、文化面における澎湃たる建設の氣運をむかへた時である。しかもこのさいとくに注目すべきことは、武士階級が中央集權を確立すると同時に現狀維持の保守的精神を擁せざるをえなくなつたのに對して、この期に入つて最下位ながら階級を形成した封建第四階級としての新興町人階級は、あらゆる制約を乘りこえて成長し前進せざるをえない立場に立たされたといふことである。十二世紀末、賴朝が鎌倉に武家政權を打ちたてていらい四世紀、いま十七世紀に入つてやうやくその政權が安定し、破綻をいとふ老成期をむかへた武士階級に對して、經濟をつかさどるべく新しく誕生した新興階級が、新しい近世文化の擔當者となつたのは當然といはねばならない。しかし新興階級としての彼等は、何の傳統も持ちあはさない。そのはじめ文化的に彼等は無垢であり、無智であつた。當然未來多き無垢なる彼等のために文化的な啓蒙運動が特權階級出身の知識人の手によつて開始された。寛永年間にはすでに松永貞德一派によつて、民衆詩としての俳諧の基礎がかためられつつあつたし、散文方面においても民衆の情操教育を目ざした平易な假名書きの物語「假名草子」が、しだいにその數をましつつあつた。

さうして出發した町人階級の教養が、眞に創造的な段階に達したのは、彼等の商業資本經濟がその態勢を完備した寛文年間のことであつた。中世末期、海外へ發展しはじめた彼等の意慾と財力は、

錢國令によつて國内に集約され、中央集權によつて解放された交通の自由、貨幣の統一等々の好條件にめぐまれて急激に資本經濟への道をたどりはじめた。さうして寛文期に入ると、河村瑞軒の手によつて海路百五十里の奥州から江戸への東廻航路と、下關海峽を迂廻して瀨戸内海より江戸に至る八百里の西廻航路の開拓に成功したかと思へば、大阪町奉行石丸石見守の手によつて、貨物運送をじんそくならしめるための問屋の制度が設けられ、金融の便をはかつて兩替商が設置され、金銀相場立の制定を見、さらに三都の商人合議の上、町飛脚問屋が設立され、大阪と江戸の飛脚商が協議して金銀遞送のいはゆる金飛脚が設けられるなど、大阪を根據地とする近世前期の商業資本主義の機構が確立されたのであつた。江戸においては菱川一派の手によつてもつとも民衆的な浮世繪が、大阪においては宗因・西鶴等のもつとも町人的な談林俳諧がそれぞれ寛文年間に發足したのは、資本主義的機構の確立にともなつて充足した彼等の文化的意慾の表現にほかならない。

しかしながらその無統制な商業資本經濟の膨脹は正貨の蓄積死藏を招來し、また一方的な海外貿易は正貨の國外流出をはばみえず、ために幕府の財政は破綻し、やがて西鶴の歿した翌々元祿八年には貨幣改鑄の秕政が强行されたのである。もちろん財政的に行きつまつたのは幕府だけではなく封建制度の下にあつてはどのみち生産とむすびつきえない商業資本主義も、いち早く飽和點に達したのである。大阪の町人出身の西鶴は、寛永から元祿はじめまで、經濟的にしたがつて文化的に上昇

の一途をたどつた町人階級とその運命をともにしたのみならず、もつともすぐれた彼等の代辯者として活躍したのである。

西鶴が俳諧を志したのは、彼自身の言葉（大矢數跋）によつて明暦二年十五歳のころのことであつたと知られるが、はじめから西山宗因に師事したのではなかつたらしい。明暦二年ごろの宗因といへば、大阪天滿宮の月並連歌の宗匠にすぎず、俳諧はまつたく連歌師の餘技で一幽と號し、貞門の古風にならつてゐたのであるから、とくに西鶴が結びつくべき必然性はみとめられないのである。多分西鶴が最初に師事したのは、その發句が鶴永の初號ではじめて入集した寛文六年刊の「遠近集」の撰者で可玖と號した貞門の西村長愛子あたりではなかつたかと思はれる。

寛文二年、二十一歳の年、西鶴は早くも俳諧の點者となり、同六年二十五歳の年、はじめてその作品が「鶴永」の號で前記の「遠近集」に入集してゐる。その句は、

こころ爰になきか鳴ぬか郭公

餝繩や内外二重御代の松

彦星やげにも今夜は七ひかり

といつたありさまで、いまだ貞門風に言語遊戯の域を脱してゐない。ところが三十歳、寛文十一年刊の高瀧以仙撰「落花集」に見える、

長持へ春ぞくれ行く更衣

といふ句になると、すでに談林風な人間主義傾向があらはれてゐる。俳諧師としての宗因の活躍が寛文中期以後めざましくなつてゐるといふ事實とにらみあはせて、この頃すでに西鶴は宗因門下に歸してゐたのではないかと思はれる。

こえて三十二歳延寶元年の六月に、彼は最初の撰著「生玉萬句」を刊行して、やうやく俳壇に頭角をあらはした。その自序にいふ。

或問何とて世の風俗(ならは)しを放れたる俳諧を好るゝや。答曰世こそつて濁れり、我ひとり清り、何としてかその汁を啜り其糟をなめんや。(中略)朝于夕聞うたは耳の底にかひはへて口に苦を生し、いつきくも老のくりこと益なし。故に遠き伊勢國みもすそ川の流を三盃くんで醉のあまり賤も狂句をはけは、世人阿蘭陀流なとさみしてかの萬句の數にものそかれぬ。されとも生玉の御神前にて一流の萬句催し、すきの輩出座その數をしらす。十二日にしてこと畢れり。

これによると西鶴らは當時すでに貞門の古風にあきたらず、新風を好んで保守派にひんしゅくされ、阿蘭陀流の名をもつてよばれ、諸派の俳人を網羅した萬句俳諧の興行にも除外されたので、憤激した西鶴は一黨をひきゐてみごとに一派の萬句俳諧を興行したのであつた。その西鶴の背後に宗因がゐたことは、萬句の最後に追加された一卷に出座してゐることによつて知られる。

おなじ年の十月、西鶴は「哥仙大坂俳諧師」を自筆自畫で編纂上梓してゐるが、貞門談林の俳人三十六人の肖像と發句を收めた中に、西鶴（當時鶴永）はみづから肖像を描き、さきに「落花集」に入集した更衣の句を配してゐる。西鶴は一見きはめて豪放で、こんな手のこんだ仕事は不向きな人柄のやうであるが、事實は本書をはじめとして延寶四年十月には「古今俳諧師手鑑」の大著を、延寶六年十一月には附合集「物種集」を、天和元年正月には肖像入りの役者評判記「難波の顏は伊勢の白粉」を、貞享元年十月にはおなじく肖像入りの「古今俳諧女歌仙」を、元祿二年正月には挿繪入りの道中記「一目玉鉾」をといふ風に、手のこんだ編纂物をいともたのしげに樂々とこなしてゐるのである。

しかしいづれにしても西鶴が自畫像と自句を加へて「哥仙大坂俳諧師」を出版したといふことは「生玉萬句」のくはだてとにらみあはせて、當時の西鶴がいかにアンビシヤスであつたかを物語るものであらう。

それから二年後、延寶三年三十四歲の夏のころ、それまで用ひてゐた鶴永の號を改めて西鶴と稱することになつた。同年四月、宗因の判で大阪談林の中堅俳人九人の百韻を收めて新風を誇示した「大坂獨吟集」ではまだ鶴永の號を用ひてゐるが、同年十一月刊、伊勢村重安撰の「糸屑集」には西鶴の號で入集してゐるから、改號は四月以後、夏秋の間のことであらう。さらに延寶六年（三十

七歳）刊の獨長庵石齋撰「俳諧珍重集」に收められた獨吟百韻の揚句に、

唯花は見えたとをりの捨坊主

三十七の春もわらんべ

とあり、延寶六年三十七歳の春には剃髪法體してゐたことがしられるが、百韻の成立時期から考へて野間光辰氏が指摘されてゐるやうに、延寶五年の冬に法體したものであるらしい。一たい普通に法體するといふ行爲は、消極的・隱遁的生活態度の表現と解されるのであるが、中世詩人の場合とちがつて自己のぞくする階級の繁榮の只中にゐた西鶴の場合は、宗教的な意味などはまつたくなく、かへつて積極的に一さいをすてて民衆詩俳諧の道に專念しようとする意志表示にほかならないものであつた。不朽なる彼の筆名となつた西鶴改號のことにつづくこの積極的な意志表示によつて、西鶴は名實ともに宗因門下の俊秀としてみとめられるに至つた。じつさいこの頃から大阪俳壇における彼の俳諧活動はめざましいものとなつてゐるのである。

それにしても修業時代ではあつたにちがひないが、十年にあまる鶴永時代の業績はあまりにもとぼしい。よくいはれる西鶴の旅行はこの期間のことではなかつたかと思はれる。「見聞談叢」にいふ、

名跡を手代にゆづりて僧にもならず、世間を自由にくらし、行脚同事にて頭陀をかけ、半年程諸方を巡りては宿へ歸り……。

旅に出て半年も大阪を留守にするやうな生活のできる時期は、ほとんど業績を殘してゐない鶴永時代をほかにしてはありえないのである。ところがそれほどの大旅行をしたはずの西鶴に紀行文らしいものが殘つてゐない。わづかに元祿二年刊の道中記「一目玉鉾」における風俗描寫に痕跡をとどめてゐる程度である。これは西鶴の旅に求めるところが、自然ではなく人間であつたからである。「西鶴諸國はなし」の序で「世間の廣き事國々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」といつてゐるやうに、自然美よりも限りなき人間の生態に心をひかれた彼の近世町人的な旅の體驗が、それにふさはしい形成、すなはち小說の中に生かされたのは當然であつた。

「一代男」における簡潔ではあるがリアルな諸國の風俗の描寫もそれであるし、「西鶴諸國はなし」や「懷硯」に盛られた諸國の說話も旅の收穫であらう。ことに「一代女」卷三の一節で、

美女美景なればとて不斷見るにはかならずあく事、身に覺て一年松嶋にゆきて、はじめの程は横手を打、見せばや爰哥人詩人にと思ひしに、明暮詠めて後は千鳩も磯くさく……。

とあるなどもまた、彼のはからずももらした旅の實感であらう。「一代男」以下の諸作品を豐饒ならしめてゐる地方の風俗描寫や豐富な說話は、まことに鶴永時代の旅のたまものにほかならない。

2

いつでも思ひ立つた時にふらりと旅に出て半年あまりも留守にするといふやうな生活は、まだ無名でろくに門人もない鶴永であつたからこそできたのであつて、「生玉萬句」や「哥仙大坂俳諧師」を出し、さらに西鶴と改號し、ついでに法體して俳道精進の意志表示をするころになると、西鶴の俳壇的地位も重きをくはへ、門人も多くなつていつた。延寶五年四月十一日附で豊後の門人中村西國に「俳諧之口傳」一冊をさづけてゐるのをみても、當時すでに西鶴の門人が地方にもおよんでゐたことがしられるのである。西鶴の身邊やうやく多事、もう鶴永時代のやうに無責任なへうへうたる生活はしてをられない。延寶五六年ごろからホームグランドにおける西鶴の俳諧活動は目にみえてはげしくなつていく。

この頃から小説の第一作「好色一代男」を書いた四十一歳、天和二年のころまでが俳諧師西鶴の全盛時代であるが、その西鶴の俳諧活動はいはゆる矢數俳諧を中心に展開してゐるのである。

延寶五年、三十六歳の五月二十五日、西鶴は大阪生玉本覺寺において一日一夜に獨吟千六百句を興行し、「西鶴俳諧大句數」と題して上梓した。これはいふまでもなく寛文二年と同九年の兩度にわたり、尾州藩士星野勘左衞門が京都方廣寺の三十三間堂で大矢數をもよほし、二度目の通し矢八千本をもつて天下一の譽をえたことにヒントをえた興行であるが、自序によるとそのころ諸方で量をほこる速吟が流行し始めたので、かねて輕口速吟をほこつてゐた西鶴は默することができず、大矢

數ならぬ大句數をこころみて天下一の名のりをあげたのであつた。アンビシャスな西鶴、つねに第一人者であらうとするはげしい西鶴の性根をここにも見るのであるが、しかし本來抒情詩形である俳諧（連句）において量をほこり速吟をほこるとは一體いかなることを意味するのであらうか。もちろん抒情詩形といつても戀の附句を百韻に四ヶ所まで要求する連句は、發句とちがつてよほど叙事詩的であるべきはずのものであるが、しかし連句は屈折と變化をたふとぶことによつて連句たりうるのである。それにもかかはらず一日一夜千六百句の速吟といふことになれば、屈折と變化をもちうるはずもなく、ただ宗因をはじめ談林の俳人たちが以前からうたひつつあつた新時代の風俗をパノラマ風に描寫していくよりほかはないのである。

浮世かなひとり娘を持あまし
思ひと苦とをつつる繪双紙
通ひ路は二條寺町夕詠
川原の床は小歌三味線
ひらに是へそれへ提重送られて
拙者が勝手にすみ公事の宿

盗人と思ひながらもそら寢入
親子の中へあしをさしこみ
胸の火やすこし心を置こたつ
揚屋なからもはしめての宿
なんと亭主替つた戀は御さらぬか
きのふもたはけが死んだと申

このやうに屈折と變化にとぼしい風俗詩となつてしまつたのは當然といはねばならない。歴史的社會的にいへば、消費的な文化面に局限された上昇期の上方町人の生命力が、西鶴といふ強力な個性を通じてフレッシュな自分たちの生活をうたひまくつてゐるのであるが、一歩しりぞいて連句の本質に思ひを至す時、それはまさしく詩の墮落である。花火のごとく生命の短い談林俳諧の崩壞の第一歩がここにはじまる。その資質がよくさういふ叙事詩的傾向とマッチして散文へ轉出することのできた西鶴の個人的成功をもつて、談林俳諧ぜんたいの運命をはかるべきではない。

人を制するに力をもつてすれば、かならず力の反擊があるべき道理である。星野勘左衞門の通し矢八千本のレコードも、貞享三年に紀州藩士の和佐大八に破られたやうに、西鶴の大句數興行より四ヶ月目、延寶五年九月二十四日、大和多武峯の俳僧月松軒紀子は、奈良元興寺極樂院において千八

百句獨吟に成功して西鶴のレコードを破つた。おつかけてまた翌々延寶七年三月五日六日の兩日、西鶴の俳友大淀三千風は、その故郷仙臺において矢數俳諧を興行し、三千句獨吟を成就してふたたび西鶴のレコードは破られた。かねて京都談林の雄菅野谷高政を背景として西鶴にいどんだ大和の紀子にこころよからず思つてゐた西鶴は、俳友三千風の獨吟三千句にはかへつて跋文をよせ歌仙一卷をおくつて激賞したのであつたが、二度にわたつて傷つけられたほこりは醫すべくもない。さうして西鶴は翌延寶八年の季節もおなじ五月の七日、所もおなじ大阪生玉寺内において再度の矢數俳諧を興行し、ふたたび追隨するものなき一日獨吟四千句を成就したのであつた。

惣て此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已來也。

翌天和元年四月に刊行されたこの「大矢數」の跋で、西鶴は右のやうにその抱負をのべてゐる。自由にもとづく俳諧とは、いふまでもなく中世的な傳統をすてきれないでゐる古風貞門の桎梏からの解放、すなはちゆたかな生命力にあふれた近世町人の生活を奔放自在にうたひ上げる新詩風を意味するものにほかならない。單に量的な誇示にとどまらず、質的にも十分な自信をもつて事に當つたことがしられるのである。しかしながら一日十二時間あまりに四千句といへば、そのことに沒頭したとしても一分間に四句あまりの速吟である。當然内心の美的感動を形象化する豫猶のあらうはずはなく、ただひたすら對象そのものの興味でおしていくより仕方がない。

をとこと合點で女郎花さく
心中をたてりと思へば笑しい迄
夜前も門で聞いてゐました
西へ行く顏こそ知らぬ郭公
雲晴れねども卽身成佛

なりふりのあの御所染はいらぬもの
髮はきつてもどこやらはまだ
厄病の業は殘らせ給ひけり
賴みすくなき四十二の年

此一騷ぎひや酒のうへ
皆かとゐ十人よふで何程ぞ
契りの寢卷枕さへない
小屏風のあとを叩て借に行

獨吟千六百句の時にはまだ一般的でなかつた散文的展開が、ここではもう普通のことになつてしまつてゐるのである。西鶴のいはゆる自由とは、やがて散文の自由に通ずるものであることをみとめざるをえない。翌々天和二年、四十一歳の十月に刊行された散文の第一作「好色一代男」が、すでに散文の世界へ逸脱した「大矢數」の延長線上に結實したことに何のふしぎもないのである。

西鶴としてはまつたく順調なすべりこみである。けれども彼を取りまく保守派貞門の俳人たちがこの西鶴のぼうじやくぶじんぶりを默殺しうるはずがなかつた。延寶七年には京都の中嶋隨流が「俳諧破邪顯正」をあらはし、宗因をオランダ流の張本とののしり、ことに西鶴に對しては、「邪道は弟子かならず師匠にまさる物也、其故に大坂西鶴は西翁より放埒拔群に勝れ」と非難してゐるのであるが、西鶴の狼藉にはつひに老師宗因でさへもおもてをそむけてゐるのである。すでに延寶五年の千六百句獨吟の際に、西鶴がその批點を乞うたところ、宗因は「かかる大なる事には」と辭退したのであつたが、(仙臺大矢數・西鶴跋)延寶末年、四千句獨吟のころになると、門下の放埒なる句風をなげき「なんにもはや楊梅の實むかし口」の一句に口をとぢてふたたび連歌に歸つたとつたへられてゐるのである。(梅翁宗因發句集)いふまでもなく武家出身の連歌師上りで、その本質において中世的であつた宗因のことであるから、たとへみづからリードした結果であるとはいへ、あまりにも町人的な風俗詩的傾向についていけるはずがなかつたのである。

いかに西鶴がアンビシャスであり、放膽であつたとはいへ、二十年あまりも師事してきた恩師であつてみれば、さうした宗因の態度にはすくなからず掣肘されるところがあつたであらう。ところが幸か不幸か天和二年三月二十八日、宗因が七十八歳で世を去るにおよんで、西鶴は事實上大阪談林の第一人者となり、自由にその藝術的意慾を發揮しうる狀態におかれたのであつた。同年十月刊の處女作「好色一代男」が、師宗因の死を契機として本來の風俗詩的傾向に急激なる展開をもたらした結果であると說かれてゐるのも故なきことではない。

3

さて西鶴と改號していらい、身邊とみに多事となり、旅に暮すといふやうなのんきな生活のできなくなつた大阪における西鶴の私生活は、延寶七年三月刊の大阪の地誌「難波雀」の俳諧點者付の條に、その住所が「鑓屋町」とみえてゐる以外に、なんら直接的な記錄は殘つてゐないが、それでも俳諧關係やリアルな彼の後年の創作などからある程度までうかがふことができる。いふまでもなく大阪における全盛期の俳人西鶴は、その資料が示してゐる通り、同門の俳人や門人らと一座したり、おとづれてくる各地の俳人をむかへて興行したり、相當多忙な日々をむかへてゐたことがしら

れるが、我々が知りたいのはもつと人間的な「一代男」や「二代男」を書いた西鶴の日常生活である。

延寶七年三月の「西鶴五百韻」の自序に、「夜更て歸は俳諧師ぞかし」といひ、また同年四月の「兩吟一日千句」に、

寢ぬに目覺すのら犬の數　　友雪
俳諧師ひとり淋しき戻りあし　　西鶴

などと夜を主とする俳諧師生活のわびしさを語つてゐるが、談林俳諧が新興の町人階級に地盤をおく以上、さうした生活は當然であつた。芭蕉に至つて俳諧は餘技的意識を拂拭する段階にまで達したが、それまでの貞門・談林の俳諧はしだいに經濟的な生活力を確保しつつあつた町人階級の生活の餘裕の上に花さく餘技的存在だつたのであるから、俳諧のためにさかれる時間は活動的な晝間をさけて安息の夜にもとめられたのであつた。しかも彼ら町人は、ありあまる財力と生活力のはけ口を遊里や劇場にもとめざるをえない狀態におかれてゐたのであるから、いきほひ武家出身の師宗因や芭蕉などとちがひ、彼ら町人と血肉をともにする西鶴の生活が、指導者としてのぞんだ俳諧の一座から遊里へ劇場へと發展していつたのは當然といはねばならない。

いぶまでもなく俳諧は中流以上の町人の社交的教養であり、大阪の上層町人の多くが西鶴を師と

してむかへてゐたのであるから、そこに西鶴幣間說も生れるわけであるが、しかし矢數俳諧のレコードを破られて憤激し、利害も打算も無視した超人的な一晝夜二萬三千五百句獨吟をやつてのけた西鶴であることを思へば、わづかなその日その日の生活のために自分を卑屈にしたとは考へられないのである。

ともかく生きるためにといふよりはその町人的性格のゆゑに、自分の指導する上層町人のまねきに應じて遊里に出入したであらうことは「一代男」や「二代男」などによつて推測するより仕方がないのであるが、おなじ享樂面でも演劇界との關係は比較的にはつきりしてゐる。天和元年正月、西鶴みづから筆をとつて肖像入りの大阪三芝居の野郎評判記「難波の顏は伊勢の白粉」を書いてゐるといふ事實が、何よりも交渉の密なることを物語つてゐるが、それも要するに俳諧を媒介とする接觸にほかならないものであつた。

延寶七年八月、大阪の座本であり立役であつた大和屋甚兵衞（俳名生重）や近松以前の上方作劇界の重鎭であつた歌舞伎脚本作者の富永平兵衞（俳名辰壽）をはじめ、當時賣り出しの道頓堀の役者たちと一座して歌仙六卷を興行し、「句箱」と題して刊行したり、また同年十一月の富永平兵衞撰の俳書「道頓堀花みち」に發句ならびに附句を與へてゐるかと思へば、貞享二年正月には宇治加賀掾のために淨瑠璃「曆」を書下したりしてゐるのである。「椀久二世の物語」や「男色大鑑」は、こ

のやうに演劇界と深い交渉をもつた西鶴の體驗のたまものにほかならないのである。もちろんさうした俳諧關係のほかに、役者を愛する上層町人も介入したであらうが、いづれにしてもその享樂機關をもふくめて大阪町人の大部分が西鶴のリードする談林俳諧の支持者であつてみれば、歡樂の夜を主とする生活をおくらざるをえなかつたわけである。

町人たちとともにさうした耽溺的な生活をおくつてゐながら、西鶴が酒を好まなかつたといふ事實は注目に價しよう。「西鶴名殘之友」卷四に、椎本才麿と明石の俳友をおとづれたさい、「南都諸白と書付たる一樽ばるばるおくられけれど、我下戸なればさのみ嬉しからず」とみづから語つてゐるし、門人北條團水編の追善集「こころ葉」(寶永二年刊)にも、「下戸なれば飲酒の苦をのがれ」といつてゐるが、遊里や劇場に同行した町人たちの醜態を、いつも冷靜な目と心でぢつと觀察してゐたわけで、それであつてこそ「一代男」や「二代男」の冷徹な描寫ができたのである。西鶴文學の無感傷性は、上昇期上方町人の圖太い性根とともにかかる西鶴の生理を無視して說くことはできないであらう。西鶴は歡樂のただ中にあつて、つねにひとりさめてゐたのである。

わざとふせておいたわけではないが、いひ出す折がないままに今までわたしは西鶴の家庭について語るところがなかつた。旅を行く西鶴、歡樂の日日をむかへる西鶴、とかく家をそとにしがちであつた西鶴の家庭には、どのやうな家族たちが彼の歸りを待ちわびてゐたのであらうか。

西鶴の祖父西譽道方が寛文五年五月十二日になくなつてゐることは、菩提寺の誓願寺日牌によつてしることができるが、時に西鶴は二十四歳、點者になつて間もない無名時代のことであるから、これは問題にならない。してみると何といつても「見聞談叢」の一節、

妻もはやく死し、一女あれども盲目、それも死せり。

とあるのが問題である。ほぼ信ずべきであると思ふが、ここに誓願寺の日牌には、元祿五年三月二十四日歿の「光含心照信女」の條に「西鶴妻」と朱筆で書きこんであり「妻もはやく死し」といふ「見聞談叢」の說と對立してゐるのである。

しかしながらその日牌が寛政十二年に同寺の相譽上人の編輯にかかはるもので、かならずしも信をおきがたいこと、「光含心照」といふ法名が盲目の人を暗示してゐるらしいこと、更に元祿元年中に執筆中絕した身邊雜記的性格の强い「世の人心」(遺稿「織留」後半四卷)に、乳呑兒を殘して妻に死なれた男の苦勞をるるとしてのべてゐることなどを綜合して、やはり「見聞談叢」のつたへるとほり、妻は早く死し、西鶴は男手一つで盲目の一女をそだててゐたが、それも西鶴の死に先立つこと一年の元祿五年三月二十四日に歿したと考へるべきであるといふ推定は、なほ「西鶴晩年の生活と藝術」の章について見られたい。

妻も早く死し、といふ「見聞談叢」の語感ならびに「世の人心」の十三になる盲目の娘のために

苦勞する男親の話などから想像して、延寶年中にはすでに西鶴はその妻を失ひ、盲目の一女をかかへて弱つてゐたはずである。誓願寺の日牌には祖母に關する記事が見えないから、祖母はずつと後まで存生したのかもしれない。しかしいづれにしても延寶以後の、大阪の上層町人たちと歡樂の日日をおくりむかへた西鶴の家庭は淋しいものであつた。

俳諧師ひとり淋しき戻りあし

といふ延寶七年の「兩吟一日千句」の西鶴の附句があらためてかへりみられるのである。

晩年の元祿期は愛人の壽貞やマサやオフウなどの娘たちにかこまれて、作品を通じてみた悲痛さとは打つてかはつてゆたかな家庭生活を持つた芭蕉にくらべて、一見放蕩無賴、不逞な西鶴が、盲目の一女を殘されながらあへて再婚もせず、わびしさにたへた後半生を持つたといふ事實を前にして、私は何か人生の皮肉を感ぜざるをえない。瘴氣の立上る人生の暗渠に身をひたしながら、いさぎよいさびしさに住することのできた西鶴がなつかしまれてならない。

4

老師宗因の死を契機として、不自由な連句形式によつて散文的な意慾をみたしつつあつた內心の

藝術的苦闘を一擧に解決したところに、四十一歳、天和二年十月刊の「好色一代男」が成立したのであつたが、何分にも好色本のことではあり、また當時の西鶴は當然宗因なきのちの大阪談林の指導者たらんとする野心を持つてゐたので、みづから序も跋も書かず、門人の水田西吟に書かせた跋にも「或時鶴翁の許に行て秋の夜の樂寢月にはきかしても餘所には漏さぬむかしの文枕とかいやり捨てられし中に轉合書のあるを取集て」と、自分にとつては餘技であり轉合書にすぎない、自分はあくまでも俳諧師であるといふ態度をしめしてゐるのである。しかし西鶴のさういふ配慮などは無視して、階級の壓迫がはじまつて以來はじめて彼ら新興町人のなさんとしてなしえなかつた若々しい生命の自讃をなしとげた「一代男」は、熱狂的な支持をうけ、その好評が西鶴をして翌々貞享元年四月に續篇「好色二代男」を書かしめたのであつた。しかも一方天和三年の三月二十七日、高津南見庵でいとなんだ西鶴主催の宗因一周忌追善俳諧（精進膾）に集つたものは西鶴の一門だけで、亡父宗因の職をおそうて天滿宮連歌所の宗匠職にあつた宗春はもとより、大阪談林における西鶴の先輩同輩たちは一人も參列してゐないのである。これは宗因のあとをついで大阪談林の指導者たらんとする西鶴の自負に對するもつとも手きびしい批判といふべきである。獨吟四千句「大矢數」の跋で、老師宗因をのけものにして、「惣て此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已來也」とばうじやくぶじんの大見得を切つた西鶴であつてみれば、かうし

た批判もまた當然であらう。

餘技とみせかける必要のあつた小說の方は好評を博し、かんじんの俳諧師としての野心はうちくだかれたわけである。その强いひたむきな性格からいつても、この奇妙な結果に安んじてゐることはできなかつたにちがひない。されば俳壇的地位に對する未練から、じつはやむにやまれぬ藝術的衝動であるにもかかはらず遠慮がちにふるまつてきた創作を第一義とし、半生をかけてきた俳諧に對する未練をたち切るか否かの岐路に立つた西鶴がやつたこととといへば、「二代男」を發表すると間もなく、おなじ貞享元年六月五日、大阪の住吉社前における一晝夜二萬三千五百句獨吟といふ破天荒な俳諧興行であつた。一晝夜二萬三千五百句といへば、ぶつとほしに續行したとしても平均一句を四秒ほどでよまねばならぬわけで、ちよつと人間業とは思はれないが、しかし當時の文獻はすべてこれが事實であつたことを證明してゐる。ことに當日來會して後見をつとめた其角が、その代表句集「五元集」に、「住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時に後見たのみけれは」といふ前書で、

　　牘の歩み二萬句の蠅あふきけり

といふ句を殘してゐるが、これなどもつとも確實な證明であらう。

西鶴はなぜかくの如き超人的な、人間の生理を無視したのみでなく、藝術の女神をないがしろにした文學的アクロバシイを敢行したのであらうか。もちろんその不屈な生來によるものであらうが、

すでに四千句獨吟によつて追隨者はそのあとをたつてゐるのであつてみれば、これは「一代男」と「二代男」によつてかちえた自信にもとづき、小說に傾倒しようとするに當つての俳壇への置土產と解すべきであらうか。いやいや置土產ではない。詩形式に散文精神を盛りこまうとする藝術的むじゆんを、みづから發火點にまでみちびいて一擧に淸算しようとした西鶴の自爆行爲であると解すべきである。

しかも我々にとつて幸福なことは、二萬句獨吟から七ケ月目の貞享二年正月、西鶴は宇治加賀掾のために淨瑠璃の處女作「暦」を書下して上演し、これに對抗して同時に上演せる近松門左衞門作、竹本義太夫演出の「賢女の手習並新暦」にやぶれさつてゐることである。この失敗で自信を失つたのであらう、「暦」は西鶴唯一の淨瑠璃となつてゐるのである。

散文の袋小路にまよひこんだ矢數俳諧はみづから手を下して息の根をとめた。淨瑠璃は一作で望みをたつた。今や西鶴にのこされた道は小說以外にはありえない。貞享二年いご西鶴はほとんど俳諧活動を停止し、「好色五人女」(貞享三年)と「好色一代女」(同年)をもつて「一代男」以來の愛慾小說にしめくくりをつけると同時に、「西鶴諸國はなし」(貞享二年)や「本朝二十不孝」(同三年)、「懷硯」(同四年)のごとき說話文學や、「男色大鑑」(貞享四年)にはじまる「武道傳來記」(同年)や、「武家義理物語」(元祿元年)のごとき武家物をぞくぞくと發表してゐるのである。

しかしながらこの期の作品はそうして生活の苦惱に徹した味ひにとぼしい。「二代女」や「二十不孝」など生活の深所にふれたすぐれぶん苛烈な相を描いてゐるにもかかはらずそれがないのは、態度として人生の消費的・享樂的な面において最揚された階級の生活意慾に卽してゐたからであり、文學的には說話的興味におぼれていつたからである。その結果は「本朝櫻陰比事」(元祿二年)のごとき推理小說にまで落ちていつた西鶴であつたが、さすがにその資質は傷つくことなく、底をつくとふたたびまた猛然とうかび上つてゐるのである。元祿元年刊の「日本永代藏」以下の町人物がそれである。

5

「日本永代藏」において西鶴は、それまでの非情な說話的興味を一てきし、息づまる思ひで自分の仲間たちが金錢のために狂奔するすさまじさを描き、さらに「永代藏」とともに三部作とする豫定で元祿元年中にとりかかつた「本朝町人鑑」と「世の人心」においては、苦しげに正しい町人の生き方について語り、視線を轉じて中流以下の町人の家庭生活の苦しさを語つてゐるのであるが、はからずも病をえて中絕の止むなきに至つた。歿後遺稿として刊行された「西鶴織留」はその未完

の二書をまとめたものである。

元祿二年の春のころくづれはじめた西鶴の健康は、同五年正月に「世間胸算用」を發表するまで、三年・四年ととかくすぐれず、その間に創作された小說らしい小說は、歿後四年目の元祿九年に刊行された書翰體短篇小說集「萬の文反古」と、さきごろ野間光辰氏の考證によつて西鶴作と認められることになつた「嵐無常物語」ぐらゐのものである。創作慾が減退したのではない、肉體が小說のごときエネルギッシュな仕事にたへられなかつたのである。當然體力のゆるす範圍內で藝術的意慾を滿足せしめようとした結果、發病の年、元祿二年十一月成立の「談林俳諧作法書」一卷にはじまり、ふたたびまた俳壇に復歸してゐるのである。けれどももちろんそれは量をほこるかつての矢數俳諧ではなかつた。

霞つつ生駒見ねとも夕べ哉

行く舟に霞に城に水車

本丸の古道うつむあせほ哉

里人は突臼かやす花野哉

といふ風に純粹に自然にむかつて抒情してゐるものもあるが、西鶴の詩人的資質はやはり人間的なるものにおいて發揮されてゐる。

蟬聞て夫婦いさかひはつる哉

枯野哉つばなの時の女櫛

暮て行く時雨霜月師走かな

世に住まば聞けと師走の礫哉

ここに人間をこよなく愛し、人間苦に挺身する人生派の詩人西鶴の魂を垣間見るのであるが、やうやく散文精神に徹してきた晩年においてかかる西鶴のポエジイに接しうることを私はふしぎと思はない。一人の作家における散文精神の確立は、その作家の詩人的資質の喪失を意味するものではなく、かへつてそれぞれの精神の純化をうながすものであると考へるからである。

俳壇に復歸した西鶴にとつて、不愉快なのは生理的條件だけではなかつた。その頃、元祿元年から同四年まで、永年用ひなれた西鶴をあらため西鵬の號を用ひてゐるが、これはかつて眞山青果氏が「文藝春秋」(五年十月)で考證されたやうに「鶴字法度」のせゐであつた。元祿元年二月一日、將軍綱吉の息女鶴姫が紀伊中將教家へ入輿するにつき、鶴屋の家號および鶴紋の使用を禁じたので、西鶴もやむなく改號したのであつたが、鶴姫が病歿したので法度も立消えになり、元祿五年いごはまたふたたびもとの西鶴にかへることができたのである。

健康の恢復と不愉快な改號沙汰からの解放、ひさしぶりに訪れた快適な條件の下に書かれた作品

が元祿五年正月刊の「世間胸算用」である。發病以前の「日本永代藏」においては、積極的な致富の種々相を描いた西鶴が、この作品では貧しい町人大衆の生きる苦しみを描いてゐる。しかもけつして感傷的になつたり激したりしないで、底に深い愛情をたたへながらをかしいほどみじめな町人大衆の苦惱を凝視してゐるのである。

「胸算用」によつて西鶴は昔日のごとき創作活動を開始するかに見えたが、一時小康をえた健康はふたたびまたくづれはじめた。しかも當時唯一の肉親であつた盲目の一女も「胸算用」發表の翌翌月、五年三月二十四日に失つた。「西鶴置土產」こそはそのやうな暗澹たる病苦と孤獨のうちに創作された最後の作品である。さらに「胸算用」よりもどん底の世界、すくひのない人生のどん詰りにおちこんだかつての上層町人の生態を、西鶴は肯定も否定ものりこえた澄明なまなざしで觀照してゐるのであるが、おのづから姿を消していく男たちの中に、意志的なまた本能的な、ほろびることのない人間性を見出してゐる西鶴の眼を私はたたへるものである。最後をかざるにふさはしい作品といふべきである。しかも西鶴は序文まで書いた「置土產」の刊行をみるに至らず、元祿六年八月十日、五十二歳で歿した。

浮世の月見過しにけり末二年

同年の冬、遺稿として門人の北條團水が發表した「置土產」の卷頭にかかげられた辭世吟である。

かへりみて悔なき充實した生涯をもつた偉大なる凡俗の述懷である。

西鶴の文藝理念と方法

1

日本古典の理論的方面を見ると、「歌經標式」(大和時代末期)の昔から、中世の歌論、近世の俳論と詩歌方面はわりあひに發達してゐるが、散文方面は實にびびたるものである。それは和歌および俳諧が生活的に把握されてゐた上に、その完成された形式への信頼が內容への思索を容易ならしめたからであると思はれる。

それに反して散文の方は、鎌倉時代の「寶物集」や「今物語」に、源氏物語を書いた紫式部が妄語の罪によつて地獄におちたといふ話があるし、德川時代の指導的立場にあつた儒者達は、源氏物語を好色誨淫の書としてしりぞけてゐたのであるから、散文藝術における理念の發達などがありえようはずがないのである。

だがしかし、それほど虐待されながらも、紫式部が「螢」の卷の小說論をもつたやうに、西鶴も

またその偉大なる體驗のおのづからなる結果として、意味深い言葉を殘してゐる。

寓言と僞とは異なるぞ、うそなたくみそ、つくりごとな申しそ。

元祿三年の冬成立した門人北條團水編の俳書「團袋」に收められた一家言である。俳書に俳人として發表した一家言であるから、これは疑ひもなく俳論であると一應は受取らねばならぬのであるが、しかしそもそも西鶴の俳諧なるものがその敍事詩的傾向をたくましく延ばして小說に成長したのであり、ことに元祿三年といへば、初期の愛慾小說から諸國咄・武家物・町人物へと筆を進め、作家として西鶴がもつとも充實した時代である上に、當時はジャンルについての明確な把握はなかつたのであるから、俳諧・小說を通じての理念と考へてまちがひはなからう。

さてここにいふ「寓言」といふ觀念は、もとより「莊子の寓言」につながりを持つのである。鎌倉時代以前の文學が主として佛教と關係を持つたやうに、それ以後の文學は多かれ少なかれ老莊の隱逸思想と交涉を有してゐるのであるが、とくに德川時代に入つて數を增した浪人の中の教養ある者が、老莊的隱逸生活を愛した。武士として志をえず、詩歌の道に投じた西鶴の師宗因もまた「隱士」氣取りであつたのであり、その俳諧觀がまた莊子の寓言によつてゐるのはけだし偶然でない。

莊子像贊

抑俳諧は雜體のそのひとつとして、連歌の寓言ならし。莊周が文章にならひ、守武が餘風をあ

ふがざらんや。今此畫圖にむかへば、栩々然として花にたはむれ、蘧々然としてまくらをそばだてて、夢うつつのあいだにあり。世は皆まつかう昔はまつかう。あそんだがましじや。

世中よ蝶々とまれかくもあれ。

これは宗因が判をした門人岡西惟中の「十百韻」の序における「莊周の夢」の圖の贊であるが、しかしこれは俳諧の本質論ではなく、インテリ浪人としての彼の境涯とマッチした老莊的人生觀による俳諧の存在意義論ともいふべきものである。

この宗因の寓言說は、さらに儒者であつた大阪談林の門人岡西惟中と僧であつた江戸談林の雪柴によつて祖述されてゐるが、けつきよく惟中は寓言を一時の狂言と解して娯樂說におちつき、雪柴は中世歌論におけるが如く「菩提の道に入る階梯」であるとする目的論的文學論におちついてゐるのである。

その中にあつて一人西鶴のみが何故に娯樂說にもよらず目的論にも左袒せず、純粹な本質論に達しえたのであらうか。いふまでもなく町人出身の作家西鶴にとつては、その豊富な藝術的體驗のみが、彼等の根據（儒・佛）に代るべき唯一絕對の根據であつたからにほかならない。

さて「寓言」は普通、假に事を設け、眞實を寓した物語であると解されてゐる。英語のフェイブルである。そして元來啓蒙教誡の方便として發生した方法であると考へられるが、前掲の寓言論を

一見しただけでわかる通り、また西鶴の作品が語つてゐる通り、發生的な意味は抹殺されて、一つの文藝理念としてマスターされてゐることはあきらかであらう。

今西鶴の言葉をそれだけで解すると、寓言は僞でないといふ。しかしながら寓言の持つ假作（虛構）の定義は不變なのであるから、僞でないといふことは事實であるといふことにはならない。けつきよく僞でもなく事實でもないといふのであるから、我々は當然現象（事實）に對する本體（眞實）への認識の存することを認めざるをえないのである。

2

心中をもつとも多く扱つたのは近松であり、またもつとも美化したのも近松であつた。それに反して西鶴はほとんど問題にしてゐない。西鶴と近松では作家としての全盛期が二十年程ずれてゐるので、世相の相違もたしかにある。何といつても西鶴は寛文から元祿にかけての資本經濟の上昇期を生きぬいた作家であり、近松の全盛期は資本經濟が封建制度の限界内において飽和狀態に達し、やうやく耽溺的な風潮が彌漫しはじめた時代であつた。諸國の情死事件を收錄した寶永元年刊の「心中大鑑」といふ浮世草子の序に、「きのふも心中けふもまた、あすか川の淵瀨かはつた事がはや

りける。京大坂田舍ひとつひとつあつめければ全部五冊、好色の媒として世の身持鑑」とあるやうに、西鶴歿後の元祿から寶永にかけて、情死が目につきはじめたことは事實であつた。

しかしもちろん、西鶴の時代でも相當に行はれてゐたのであつて、それがはなばなしく文獻的に取上げられなかつたのは、西鶴のといふよりは時代の積極的な精神が情死に對して否定的であつたからである。その證據に西鶴も「二代男」の中でたつた一度、心中を大々的に取扱つてゐる。卷八「流れは何の因果經」の一章である。

その山に行くと逢ひたいと思ふ亡き人の姿があらはれるといふ越中の立山地獄をかりて舞臺とし、遊蕩のきはみ世を捨てた僧を配して、諸國の色人の心中死の有樣を再現させる。いはゆる「寓言」である。男は脇差、女郎は剃刀、その幾十組かの心中死の中には、僧が故鄉大阪の廓新町で見知つた女も大勢ゐた。そしてその女友達は、太夫職の雲井をのぞきすべて階級の低い端女郎であつた。西鶴は續けて、

されば此おもひ死を、よくよく分別するに、義理にあらず、情にあらず、皆不自由より無常にもとづき、是非のさしつめにて、かくはなれり。其ためしには、殘らずはし女郎の仕業なり。男も名代の者は、たとへ戀はすがるとてもせぬ事ぞかし。雲井は太夫職にして、かかるあさましき最後、今に不思儀なり。

といつてゐる。太夫雲井の心中事件は、延寶九年刊の「名女情比」に、阿波屋某といふ愛人が勘詩されたのに同情して心中した由が記載されてをり、當時一部の人々は名女扱ひをしてゐたことが知られるが、雲井の場合に限らず情死の眞相をつかんでゐた西鶴にとつては、美しい行爲とも思へなければ、まして名女扱ひをするどころの騒ぎではなかつたのである。

心中をする男女が經濟的に惠まれないどころか追詰められた低い身分の人達であつたことは、近松の場合でも同じである。「曾根崎心中」のお初も、「心中二枚繪草紙」のお島も、「重井筒」のおふさでも、みんな安手な茶屋女で、相手の男も人の手代か部屋住みの息子で、一樣に金に詰つた擧句の果である。だが近松はそんな味氣ない現實よりも、心中といふ行爲の表面にただよふ頽廢的な美をとらへ、義理と人情の小道具を使つてたくみに美化し淨化する。それに反して西鶴は現實の醜を醜としておほふことをしない。生拔くことの强さと尊さを前提として、行爲の裏にひそむ怪しい眞實をあばくことをもつて作家の本分と心得てゐるものの如くである。そしてその目的においてのみ心中は集約的にただ一度西鶴の手に取上げられたのである。

近松の人生に求めたものは甘美な詩的（主觀的）眞實であり、西鶴が人生に求めたものは荒凉たる散文的（客觀的）眞實であつたといふことがゆるされるであらう。

この場合我々は演劇と小說の性質の相違も考へねばならぬが、しかし貞享二年正月、前年十月に

なされた貞享新暦の頒布を題材として、西鶴は京下りの宇治加賀掾のために淨瑠璃「暦」を、近松は竹本義太夫のために「賢女の手習並新暦」を書下して同時に上演し、西鶴はまんまと失敗した。色々な理由が數へられる。がその中でもつとも大きな原因として西鶴の作品が餘りにレアリステイックであつたことが擧げられる。そこにやはり當時の演劇の性格であつたロマンテイシズムに適應しえた近松の個性と、氷炭相容れない西鶴の個性が考へられるのである。

西鶴のかうした對象の把握の仕方は、彼にとつてもつとも不得手な題材であつたと思はれる武家物において、かへつて明瞭にあらはれてゐる。

たとへば「武道傳來記」は、毎卷四話すべて三十二話の敵討談が收められてをり、ちやんと「諸國敵討」と傍書までしてある。こんな場合、普通の大衆作家ならば、正義化され英雄化された復讐行爲をクライマックスとし、主人公が目的達成の爲にしのぶ苦難の過程を描いて讀者の同情と聲援を期待するのに、西鶴は討つ者と討たれる者がいかにして發生したかといふ點を主題としてゐる。心中に對する態度と同じである。それ故敵を憎惡しないし、討つ者にもあへて聲援をおくらない。讀者をして敵討の成就に對する熱意を抱かせようとしてゐないのである。中には討たずしてやむ者もある。討つ者が卑劣で討たれる者が正しくりつぱな場合もあり、愚かしい二重三重の敵討もある。だから「武道傳來記」は、形式的には短篇集であるが、實は西鶴の眼前において正義化されてゐた

敵討といふ行爲（現象）の裏にひそむ眞相の全體的把捉を意圖したものであると考へられる。

西鶴にとつて、文學とは常識的なモラルや美意識でメツキされた現象（事實）をそのまま描くことではなくて、本體（眞實）を把握して表現することであつた、とすくなくともこれだけの結論めいたことが以上によつていひうるであらう。もつとも現象を通じて把握した普遍的・抽象的眞實を形象化する場合、直接その眞實を基礎づけてゐるところの現象が動員される場合の多いことはいふまでもない。そして私は今、ギュイヨーの言葉を思ひ出さざるをえない。

藝術家は、單に生の儘の事實、包含する群から離れた單なる現象を見、又は語るを以て滿足してはならない。よしんば抽象的理論を聯ねて、因果の理法を吾人に示し得なくても、少くとも吾人をして之を感ぜしめ、恰も表面の波動の下に之を引き起す隱れた原因としての溫度と、運動の內的原理とを感ずるのと同じ樣な心持を抱かしめねばならぬ。

したがつてもし、事實を忠實に描寫すれば、それがただちに藝術だとするやうな考へ方が二十世紀の今日なほ存在してゐるとすれば、我々は改めて西鶴を認めなくてはなるまい。

さてかうなつてくると、表現といふことがかなり重大に考へられてくる。事實をそのまま描くのが藝術だといふのならば、大した問題はないが、一度抽象した眞實を形象化するといふからには、そこに方法がなくてはならぬからである。

3

西鶴はわづか十二年間の作家生活の間に、愛慾小說、諸國咄、武家物、町人物と急激に變化していつた作家であるから、世界觀や理念がその性質上ほぼ一貫してゐるのに反して、物的な方法は一樣でない。多く短篇集の形式に從つてゐるので、ことなる方法が一つの作品集の中に雜居してゐることもある。

だがしかし、全作品を通じてその現實主義的方法は集約的であるといふことができるし、またその方法は現實主義的とはいひながら、初期の愛慾小說時代と晩年の町人物時代とではいちじるしい相違を示してゐるのである。

「二代男」卷三「欲捨てゝ高札」の章は、吉原の太夫西尾の馴染客の大盡が、自分の乘つた惡所船の船頭が西尾に命をかけて執心してゐることを知つて憐をもよほし、自分の戀をよそにして二人の仲を取持つてやるといふ話である。通り一遍の慕情では、大盡の媒介は一片の俠氣、物數奇に終る。そこで問題は西鶴が船頭の執心をいかに表現したか、といふ點にあるわけである。

西尾のもとへ通ふ大盡を乘せたその船頭の舟が、觀音堂の邊まで來ると、俄に空が薄曇り、雷し

きり、夕立が襲つて來た。岸のしやれ貝の光も目にあやなく、念佛申しつつふと行手を見やると……行水の上に今迄ありとも覺えぬ紫だちたる筋はへて、居姿の女忽然とあらはれ、打掛して髮はしやらほどけの後付……後見返れば西尾の面影であつた。大盡は思はず船首に立上つて言葉をかけたが、すげなくも返事をしない。時に船頭はたまりかねて、……我心玉にもせよ、思入れの淺からぬしるしを見せんと、まねけばうなづき、笑へばあいをなし……嫋嫋としていつとなく消失せた。

大盡の船頭への同情と哀憐はこれで決定的なものとなつた。千萬言の口說も說明も、このわづかな描寫におよばない。そしてこれは、明瞭にAをA以上に表現せんとする方法の超自然主義である。

このごろ讀んだ上田秋成論の中に、秋成の怪異の迫眞性は、秋成自身が怪異を信じてゐたからである、といふ說があつた。秋成が怪異を信じてゐたらしいことは、その隨筆「膽大小心錄」にも見えてゐるからもつともであるが、この考へ方は文學の思想の問題だけを追求し、表現の問題を無視してゐるのではなほだ不完全だ。いかに怪異を信じてゐても、表現の如何によつて迫眞性が失はれることは論をまたない。

秋成が題材としてえらんだ怪異を信じてゐたといふことは、それは對象としての超自然主義であり、そしてその表現の方法は「雨月物語」などに見られるとほり、むしろ寫實主義的である。秋成

に比較すると西鶴の場合は、對象は自然なるもの、現實的なるものであつて、その怪異は方法としての超自然主義である。したがつて結果（作品）からみると一見どちらも超自然主義的なものに見えるが、作者の意圖するところも、讀者側のうける感銘も根本的にちがつてくるのである。

おなじ「二代男」卷二に「百物語に恨が出る」といふコントがある。隙な遊女達が集つて百物語をはじめたが、話がすんでも物の怪があらはれない。そこで今度はおのおの客をだました話をはじめ、我と我が心の鬼の物すごく身をふるはせる頃、屏風襖が鳴動し、四方の隅から青雲が落重なつて、落ぶれて見る影もない男達の幻があらはれ、一人ひとり恨をいふ。皆生きた心持もなく詫言をいふ中に物がしこい女郎が考へて、「各々揚屋の算用の殘りは」と聲高にいふと、さすがの幻も、それを聞くと否やぱつと消失せてしまつたといふのである。西鶴にとつて超自然なるものは目的となりえなかつた。どこまでも散文的眞實表現の手段としてのそれであつたのである。

初期の愛慾小說時代における西鶴の方法が、すべてこんな超自然主義的なものであるといふのではない。初期の特殊な方法としては、古典を驅使した「俳諧的方法」なども逸すべからざるものである。

たとへば「二代男」卷三「樂助が靱猿」において西鶴は、島原の太夫薫の替衣裳の寬濶を主題として、遊里において浪費があらゆる快樂の根本であるといふ眞實を表現するために、狂言の「靱猿」

を利用してゐる。

遊女達が伊勢講を結んで、百二十末社（幇間）の集つてゐる處へ、大盡がやつて來てお初穗にと巾着を投出す。その上末社どもは何のかのと文句をつけて羽織から脇差、印籠、緞子の下帶に至るまでまき上げて大盡を丸裸にする。時に騷ぎのうちは何氣なく軒近き花に見とれてゐた太夫の薫は禿にささやき、かねて用意しておいたその大盡の定紋附の衣類諸道具を持參して、たちまちに大盡を元の姿にした。

さて狂言の「鞦猿」においては、大名が猿曳の猿を見て鞦を作りたくなり、生皮を所望したが、憐れになつて赦してやり、果は扇を與へ、着物までやり、かへつて身の皮をはがれる結果となる。末社達に身の皮をはがれる大盡は、猿でもあり大名でもある。大盡に着物を與へる薫もまた大名となる。これはいはゆる翻案ではない。描くべき現實があつて古典がまねかれたのである。狂言「鞦猿」の古典的興味を、現實描寫の背景として不卽不離の位置におき、表現の平板と單調からまぬがれようとしてゐるのである。

このやうな古典の驅使は、とくに初期の「一代男」や「二代男」の隨所に見られる方法であるが、かかる方法を行使するためには、それを理解する讀者の教養、（談林俳諧的教養）が前提となる上に、そもそも連句の方法を惰勢的に散文の上に適應したものなのであるから、「小說の方法」としては永

遠性がない。小説におけるかかる特殊な方法は、じつさいにまた西鶴に、とくに初期の作品に限られてゐるのである。

愛慾小説から諸國咄・武家物と散文の世界に深入りするにつれ、超自然的なものや古典を驅使する俳諧的な、餘裕派的な方法を次第に揚棄し、町人物時代になるとまつたく近代的な小説の方法を確立するに至つたのは、けだし當然であらう。

4

町人物の第一作「日本永代藏」は、それまで愛慾小説や武家物など享樂的・消費的な面を對象としてゐた西鶴が、はじめて罪惡と苦惱の渦まく生産面を對象とした作品であるから、ややもすれば現實のはげしさに壓倒されて形象化の餘裕を失ひ、説得的な態度を露出してゐるが、しかしそれ故にまた「永代藏」においては、初期の方法に代るべき清新な寫實主義的方法の萠芽を見ることができるのである。

「日本永代藏」は、元祿商業資本主義社會における致富の方法をあらゆる角度から短篇形式で描いた作品であるが、中に卷五「大豆一粒の光り堂」は、珍らしく封建時代において資本のおよばな

かつた生産部面、農業方面における致富の方法を描いてゐる。

大和國の川ばたの九介といふ小百姓が、色々な農具の改良や發明によつて、たとへばそれまでなかつた鐵の細攫とか、後家倒（今日の稻扱）とか、千石通しとか、唐弓（綿打弓）とかをつくりだして分限になつたといふ話である。一見はなはだあつけないやうであるが、この話は資本のおよばなかつた封建治下の農業方面において、道具機械の改良による勞働能率の增進以外に致富の手段はありえないといふ社會的眞實を表現してゐるのである。

昔稻穗を落すには、「扱竹」といつて二つの竹管を手挾み、老人とか後家とか浮世に隙な人々が狩出されて當つてゐたのであるが、「後家倒」が創製されてからは一人で日に數十石も落すやうになつたので、後家の仕事を奪ふといふ意味で「後家倒」となづけられたのである。また「千石通」の發明によつて從前の「釣篩」の十倍も能率があがつたといふことも事實であり、「唐弓」も昔は二尺ばかりの竹弓で一日二三斤ほどを女の手仕事としてゐたのだが、明暦のころ支那傳來の道具をまねて改良し、一日二十斤あまりも打出すやうになつた。

さうした道具の改良による生産力の增進を、西鶴は經濟の中心地大阪にゐて、もつとも綜合的に現實的に感受した。そしてその社會的眞實をより强く表現するために、けつして一人の手によつて改良發明されたものではない各種の農具を、ある一人の小百姓の手に成るものとして描いたのは、表

現せんとするレアリテイの領域を擴大せんとする集約的な寫實主義的方法といつてよからう。

偶然の疑ひと罵りをさけて、同樣な方法を今一つ取上げてみよう。「永代藏」卷二「天狗は家名の風車」は、これまた商業資本のおよばなかつた當時の生產部面、魚業における致富譚であるが、主人公である紀伊國太地の鯨突天狗源內は、まづ第一にそのころ人の捨ててかへりみなかつた鯨骨を貰ひ集め、それをくだいて油をとることを發明した。次に鯨網を考案して捕逃すおそれをなくし、最後に西の宮の夷から生船にて輸送の途中で弱る鯛を活氣づかす方法をさづかり、しだいに分限となつた。

もとよりこの物語には虛構がある。たとへば源內が創始したと西鶴のいふ鯨網は、「鯨史稿」によれば肥前大村の深澤義太夫が工夫したのを、太地の庄屋大池覺右衞門が傳へ、ちやうど西鶴が大阪談林の中堅として活躍してゐた延寶のころからはじめて太地で使用したとある。もとより「鯨史稿」を信ずべきであらう。

だがこの物語には前作と同樣に、資本の觸手のおよばなかつた封建治下の生產部面において、道具の改良發明と科學的頭腦が致富の不可缺な條件であるといふ社會的眞實の、全體的・集約的な表現が意圖されてゐる。したがつてこれ等の短篇のデテールは歷史的事實によつて象嵌されてゐるが、プロットの歷史性はもとよりない。西鶴が寓言と稱する所以である。個々の事實が壯大な一つ

の社會的眞實を形象化するために驅使されてゐるのである。

江戸後期の洒落本も、同樣に寫實主義的な文學であるが、その方法は豫定された現象をありのままに描く、いはゆる自然主義的方法である。同じやうに現實を對象としても、洒落本の場合は表現の獨自性にとぼしい。寫眞の沒個性にちかい。それにくらべて西鶴のこの方法は、素朴ではあるが表現のオリジナリティを主張する肖像畫ともいふべきであらう。

西鶴の町人物における方法を說いて、晩年の「世間胸算用」にふれないわけにはいかない。積極的な蓄財の方法をテーマとした「永代藏」から出發して、「胸算用」における西鶴は物質的に惠まれない町人大衆のみじめな生活を對象としてゐるが、それを二十の短篇にまとめるに際して、すべての作品に大晦日といふ時間的限定を課してゐることにまづ注目される。經濟生活が最高潮に達する特定の日をえらんだといふことは、「時の强調」といふ近代短篇小說の方法とおのづから一致するものであり、その上「處」は上方商業都市、「人」は下層町人大衆といふ條件も備はつてゐるのであるから、これはもはや見事な近代的方法といふことがゆるされるであらう。

しかもこのやうな作品全體に課せられた方法は、個々の作品においてより見事な成果を示し、それは今日我々が「集約的レアリズム」と稱してゐる方法とまつたく一致するものとなつてゐるのである。——個々の作品において見られるそのやうな方法については、「西鶴晩年の生活と藝術」の

〔6〕において比較的詳細にふれてゐるので重複をさけた。その章を參照せられたい。――

りつぱな現實主義的文藝理念としての「寓言論」はあつても、それは體驗から生れたものでけつして思辨的なものではない。そんな自然發生的な西鶴でさへ、それが小說であるためには一定の方法を持たねばならなかつたのである。今日まさか事實がただちに藝術だと考へたり、あるひはまた文學は內容となる思想だけで十分だと考へてゐるやうな人があらうはずはない。(十二・三)

西鶴の風俗描寫

1

延寶元年三十二歳の年、西鶴は同志をひきゐて大阪生玉社頭で萬句を興行し、間もなくその成果を發表した。西鶴の處女撰著として知られる「生玉萬句」である。その自序に、

或問、何とて世のならはしを放れたる俳諧を好るゝや。答曰、世こそつて濁れり、我ひとり清り。何としてかその汁を啜り其糟をなめんや。……朝干夕聞うたは耳の底にかひはへて口に苦を生し、いつきくも老のくりこと益なし。故に遠き伊勢國みもすそ川の流を三盃くんで醉のあまり、賤も狂句をはけば世人阿蘭陀流なとさみして、かの萬句の數にものそかれぬ。されとも生玉の御神前にて一流の萬句催し、すきの輩出座その數をしらす。

もうすでに當時西鶴は、保守派の詩人たちから「おらんだ流」の名をもつて異端視せられてゐたことが知られ、しかも本書は保守派に對する宣戰布告であつたことが知られる。

「世のならはしをはなれたる俳諧」が阿蘭陀流なわけであるが、「世のならはし」とはいふまでもなく當時天下を風靡してゐた貞門の俳諧をさすのである。

松永貞徳のひきゐる貞門の俳諧は、いちはやく守武・宗鑑の餘風を仰いで、民衆詩建設のイニシヤテイヴをとつてゐたのであるが、上流出身の貞徳は貴族趣味を止揚しきれず、民衆詩であるべきはずの俳諧を連歌への階梯なりとし、庶民性を用語の上にのみ求め、本質的には自然美を對象とする中世的・連歌的なる優美を墨守し、言語機智の域を脱しなかつた。

町人出身の、そして最後まで町人的であつた西鶴が、そのやうな俳風にあきたらうはずがなく、されば阿蘭陀流と異端視せらるることとなつたのであるが、しかしまだ「生玉萬句」に收められた作品そのものはそれほど飛躍的なものではなかつた。

天川に艶なかるゝ珊瑚珠　　岩井　武仙

革巾着やいつの小男鹿　　井原　西鶴

天川（あまかは）は江戸時代における阿瑪港（あまかお）（今の澳門）の呼稱で、そこから珊瑚珠や印傳革が輸入されたので天川珊瑚珠や天川印傳の名がある。前句はもとよりその地名の天川を天象の天の河にいひかけ、天の河に流るる紅葉は珊瑚珠ならんといつたのである。それに對して西鶴の附句は艶に鹿、珊瑚珠を根附と受取つて革巾着と付けたのはもとよりであるが、阿蘭陀流のおらんだ流たる所以は、毛皮

の巾着を見ていつの小男鹿であつたらうと思ひよせたところにある。ビフテキを見て牛を思ふたぐひである。

對象も方法もまだそれほど貞門のそれと距離があるものとは思へない。それにもかかはらず阿蘭陀流の名をもつて排擊されなければならなかつたのは、つまるところその物の見方、自然を自然として素直に受取らないで人間生活に引付けて笑はうとするその現實主義的な態度にあつたのである。

西鶴をしてそのやうな態度をとらしめたのは、もちろん彼の個人的な性格にのみよるものではなくて、彼のぞくする町人層の壓倒的な要求によるものであることを忘れてはならない。

すでに織豐時代に組織化されつつあつた貨幣經濟は、和平的な中央集權的封建社會の成立と同時に決定的なものとなり、中世においては未だ階級を形成するに至らなかつた町人に、最下位ではあるが社會的位置があたへられることになつた。その結果、西鶴が阿蘭陀流の旗幟をひるがへした寛文・延寶の頃にはすでに彼等は大阪を中心に金權を確立し、當然文化の創造に對する熱意を抱くにいたつたが、政治的な發言權は依然としてあたへられない。社會的位置はその生活力の向上にくらべて、宿命的なみじめさにあつたのである。

當然、奔流のごとき生命力は、金錢の力を尊重する、また尊重せずにはをられなかつた彼等の現實主義にリードされて官能的な享樂生活と結びつき、遊里と劇場が彼等の情意生活の中心地帶とし

て登場したのであつた。

されば「生玉萬句」においてはいまだ態度の上にとどまつてゐた西鶴の現實主義的傾向がしだいに對象の上におよび、「大坂獨吟集」（延寶三年）「西鶴大句數」（同五年）をへて獨吟四千句の「大矢數」（同八年）に至つては、完全に新時代の風俗が對象となつてゐるのである。

小芝居の狂言綺語を振捨て
巾着きりはむらさき服紗

（大矢數、第一）

契りも今宵たいこ上鵠
念比に語り申せば只金じや

（同、第二十四）

河野屋のみつが情を問寄りて
袖行水は太股だけか

（同、第十八）

繪草紙も下りを請て送狀
心中の末は年寄女房

（同、第十三）

三里さがつて大坂堺
一時に米の相場が知れて行

（同、第三十四）

行春も堪忍ならぬ伯父坊主
今度の公事はおれが出て埒

（同、第三十四）

御公儀の御觸きいた時鳥
牢人置な卯の花の宿

（同、第二十三）

御成敗かくのごとくの泪也
粟田口をば世悴見て置

（同、第三十五）

檢見の時分の二村の山
おもくなるおもはん方の袖の下

（同、第二十一）

寢所替て哀なる宿
敵討枕の夢もひつくると

（同、第三）

芝居、傾城、茶屋女、心中、相場、公事、法度、處刑、檢見と贈賄、敵討、いづれも新時代の世相であり、風俗である。さうしてそのやうな都會の消費的・享樂的な面に昂揚され集中された町人層の生活感情をうたふ西鶴の風俗詩のきはまるところに發生した小說、とくに初期の作品が、今日

我々のいふ風俗小説的性格を多分に有してゐることはいふまでもなからう。

だが私は今、さうした廣義の風俗に對する西鶴の興味の在り方を知らうとしてゐるのではない。さうした廣義の風俗に對する關心に正比例してクローズ・アップされるはずの、狹義なる風俗（ファッション・スタイル）を、西鶴がどのやうに扱つてゐるかを考察して見たいのである。

まことに巷のファッション・スタイルは、民衆の身分や職業や氣質の美的形象にほかならない。風俗作家でなくとも、すくなくとも現實を、人間を對象とする作家の筆をおよぼさざるをえない所以である。

2

新しい時代がおとづれて新しい風俗が生れた時、その風俗を美的對象として把握する點において、文學よりも繪畫が先行するものであるらしい。機能の相違にもとづくのであらう。

西鶴が「生玉萬句」ではじめて阿蘭陀流の旗幟をひるがへした頃には、すでに菱川師宣一派が盛んに新しい風俗畫を創作してゐた。後に師宣が西鶴の「一代男」江戸版（貞享元年）の挿繪を描いてゐるのも、けだし偶然ではない。

その師宣の浮世繪は、とくに一枚摺の風俗美人畫が尊重されてゐるが、風俗史的價値からいへば「和國諸職繪盡」とか「和國百女」等のごとき綜合的な風俗畫譜こそ注目すべきものである。

たとへば「和國百女」は、奥女中、御物師、町女房、町娘、下女、妾、遊女、五月乙女、比丘尼など、主として中流以下の女性の當世風俗を描き、その上氣のきいた短文の解說をそへたもので、單なる繪畫的興味から一歩ふみ出し、風俗を綜合的に解說することによつて現實的な時代民衆の智的興味にこたへんとする藝術的意圖をくむことができるのである。

さうした風俗畫譜的な興味は、浮世繪にリードされて散文の分野においてもいち早く取上げられた。西鶴の處女作「一代男」刊行の一年前、延寶九年三月刊の「都風俗鑑」(四冊・內題都色欲大全)がそれである。

都とはいふまでもなく、傳統を擁して近世文化發祥の先陣をうけたまはつた京都のことである。第一卷は都の遊里嶋原に群集する遊客の風俗を、大體上中下に分つて敍述し、第二卷は御物師、腰元、中居、端女などの女奉公人および町娘、町女房の風俗、第三卷は四條河原の歌舞伎野郎に狂ふ僧俗男女の風俗、第四卷は風呂屋女、茶屋女、勸進比丘尼等の私娼風俗を敍してゐるが、注目すべきはその敍述態度である。たとへば卷二、

商人の女房の事

あきんどがしなよき女房をもてばあきなひが有也、さるゆへ女房をおとりにあきなふみせつき一風有、とりわき女のあきなふはあふぎや、おしろいや糸や也、……初手から女のでるもあり、先亭主出てあいさつする所へいつの間にやら出て男の詞のしり馬にのりてあいさつするもあり、……大かたわが色にはきたるぞと思ふときはしり目づかひ詞のはづれにおもはくをかけ、立まはるふりにまへしどけなくほらつかせてえもいへぬ所をいだすもあり、……。

といふ風に、町女房の風俗を述べるにあたつても風俗圖繪の客觀的態度から一歩ふみ出して、その生態をエロテイツクに把握しようとしてゐるのである。まして女性のフアツション・スタイルがさうした角度から觀察されてゐるのは當然のことである。おなじく卷二、

都女の風俗

ときにあたりてはやる事とはいひながら、女の諸體異樣なり。先ひたいのていけうこつなり、くはとうぐちを大うねりにすりあぐるもあり小うねりに剃もあり。……さてえりつきは、少むねをあけめにしてえりにはわたをとりわきふくませ、鳥羽にかさねなし臍のうへにて重とめたれば、身のひねりかほのうごきにしたがひて、雪のはだへ清らにて、さかづきをふせたるごとくなる乳ぶさのみゆる折からは、いかなる嶋の夷むゐき者も見てはきえ／＼となりぬべきと是おもはせぶりなり。さて帶は大方無地にして、嶋繻子黑じゆす、鼠、すゝ竹相傳がら茶、彼は

、ばびろの二つわりを、なるほど〳〵おなどにかけて、尻つきみぢんしはなくのしつけ、……。

これ等の例によつて知られる通り、それは單なる風俗の描寫紹介ではなく、愛慾の對象・享樂風俗として把握したところに、本書がスタイル・ブック的興味から一歩出て、西鶴文學出現直前の大衆讀物たらんとした文學的意圖を指摘することができるのである。實際にまた西鶴が小說の筆をとるまでは、現實的な町人層の文學的要求は談林の俳諧ぐらゐでは滿足できないところまで高まつてゐたにもかかはらず、その要求に應じうる散文作品がほとんど存在しなかつたのであるから、たとへ物語性がなくとも、この程度の作品で讀者は滿足するよりほかしかたがなかつたのである。

要するに「都風俗鑑」の作者は、あきらかに時代の要求に應じようとして、せつかく風俗を愛慾の對象といふところまで追求しておきながら、才能の不足によつて荒々しい素材の魅力を提供するにとどまり、つひに西鶴の登場を待たなければならなかつたのである。

3

もともと風俗詩人であつた西鶴初期の作品が、「都風俗鑑」に登場するマネキンに輸血し、性格を與へ、行動せしめたものであることはいふまでもないが、しかしファッション・スタイルに對する

プリミティイヴな興味は依然として繼承されてゐるのである。

すなはち風俗描寫(スタール)を小說における人間描寫の缺くべからざる側面として消化しつつも、「和國百女」や「都風俗鑑」の有する基本的な風俗畫譜的構想を、一つの文學的方法にまで發展せしめてゐるのである。「一代男」の姉妹編である「二代男」卷五の「彼岸參の女不思議」の一章はその適例であらう。

彼岸の中日、大阪四天王寺に群集する善男善女を目あてに、無分別仲間が女人見物に出掛ける。見張つてゐる一行の前を色々樣々に着飾つた女達が通り過ぎる。

椎寺の地藏の前をにしへまだ其年も廿にはなるまじき女、地は薄玉子に、承平の染紋下には花柴の千種かへし、虹嶋の糸屋帶、すこしは分らしき風情に、二つ斗の娘の子を抱て行、目つき鼻筋、それが自子にうたがひなし、機嫌のよきを、にくさげにつめりて泣す事、度重りなば命の程もあぶなし。また神子町の東より、人の女房とは見えて、物に馴たそふなる風俗、着物三つながら、黑きひつかへしに、黑糸の縫紋、目だゝぬ茶もうるの帶して、此程年切て置たらしき下女に、嵐が狂言の咄しを、口から果迄聞、我を見せにやるは、內へ歸りてとはれし時、語るためじやと、懷より鬢鏡取出してやらるゝ、……。

といふ風にである。前の女は嫌な亭主の子なのであらう。後の女房は下女に芝居を見せておいて何

かよくない事をしたのであらう。それぞれ陰影を持つた美しい女性群を見盡したあげく、一行が優劣を論じてゐると、天王寺の名物絲櫻の邊にめぐらした幔幕の中から、何ともいへぬ美女が出てきた。

下に白むく、上着は黑羽二重の紋なしに、黑き帶して、紙緒の草履をはき、人に見られたき風情もなく、初心にはあるけ共、上がへの蹴出し腰のひねり、かざす手元迄、いづれかしほらしからざる所なし。……どうりでこそあれ、昔日藤屋の太夫背山也、勤めし時の形はなきに、町の女房とはあふきに違ふ物かな。

と結んでゐる。元祿時代においてもつとも洗煉された女性美が遊里に求められたのは、けだし西鶴の獨斷ではなく、時代の要求にもとづく現實の事態だつたのである。

これはまさしく元祿大阪の典型的なファッション・ショーであるが、しかもそれがコントとなり、えてゐるのは、登場する女性の一人々々が生活の翳を持ち、かつ明確な美意識によつてそれ等をマスターしてゐるからにほかならない。

ある時また西鶴は、「五人女」卷三「暦屋物語」の發端において、京室町の今小町とうたはれた女主人公おさんと、その夫大經師なにがしを結ぶ手段として、安井の藤見の場における京都美人のファッション・ショーを利用してゐるが、最後に西鶴はこの方法を大々的に取上げ、しかも未完成に

終つてゐる。

歿後二年目の元祿八年に、門人の北條團水がまとめて出版した遺稿集「西鶴俗つれ〴〵」卷四の中、「序、嵯峨の隱家好色菴」「御所染の袖色ふかし」「是ぞいもせのすがた山」の三章がそれである。

都の嵯峨に親ゆづりの小判をかかへた町人が隱家をまうけ、歡樂の日々を送つてゐたが、諸國の美女をすぐつて一生の妻に定めようと思ひ立ち、千兩の賞金附で出入の幇間に手本の姿繪を與へ、東海道十五ヶ國は針立の休齋、東山道八ヶ國は牢人の尉右衞門、北陸道七ヶ國は伽羅屋の林吉、山陰道八ヶ國は按摩の文助といふ風に持場を定め、同じ日に出發し中秋名月の日にそろつて立歸る約束で、それぞれ美人探しに旅立つた。

やがて名月の夜、一同そろつて立歸り、諸國で見きはめた姿繪を差上げると、「是大事の吟味なれば、みぢんも用捨なしにその生れ付の當流の風義を定むべし」と、嚴密な吟味がはじまる。

以下「御所染の袖色ふかし」は山城の美女の紹介、「是ぞいもせのすがた山」は大和の美女の紹介で中絕してゐるが、その風俗の描寫ぶりは、あたかも後期の洒落本におけるがごとく微に入り細をうがつたものである。山城の女の風俗描寫、

衣裳ゆたかに下には藤色にごばんの紅嶋付、中にはるりこんに同じ紅嶋のうら付、上に薄玉子色に同じ紅嶋のうら付、肩より壹尺程あを〳〵と御簾のもやう唐織の緣くれな井の房をさげ、

さりとは〳〵至りたる物ずき、すそはみだれ萩まことの男鹿も是にはこがれ鳴べき、帶はくろきびろうどに、大紋の石たゝみうしろにまはして御所むすびのはしに、銀にて鶴菱の四紋、かへし妻をくび先をすこしあけて帶の下にはさみ、抱へ帶なしにほそきしのび帶をしめ、白きあはせ内具のすそに鉛のしづを掛、惣淺黄こんがうをはきてすり足にあゆみ、しめつけ島田髪先も跡も長み同じ事にして、中程に平簪をかけ、さし櫛白たんの木地にさんごじゆの切入梅の古木に氣をつくし、前髪にくじらのひれのまがりたる物を入、髪の狂はぬやうに仕懸、わづかうつむき首筋あり〳〵と見せて、付肱にひだりの手先にて袖口をあげ、右の肩より袖ゆきしとやかに流し、……。

このやうに衣裳つきから髪つきポーズまで風俗の描寫に意をつくした結果、西鶴はかんじんの人間を忘れ、それはまつたく飾り立てた衣裳人形になつてしまつてゐる。「二代男」の「彼岸參の女不思議」における成功を西鶴は忘れてしまつたのである。

おそらく西鶴は、山城・大和の美女の紹介を手はじめに、諸國から集つた姿繪の批判に託して元祿の男性の理想とするあらゆる傾向の美なる女性風俗を網羅する豫定であつたらしいことは十分に察せられるにもかかはらず、その一二を擧げるにとどまり、つひに計畫を放棄せざるをえなかつたのは、人間を忘れ、風俗を感性的な美的對象としてのみ見ようとしたからであつた。

文學における風俗描寫は、それを生活の一側面として見る限りにおいてゆるされるのである。しかしながらこれをもつて西鶴を責めるべきではない。西鶴は自己の失敗を意識し、中途にして放棄してゐるからである。責めるならば西鶴の意志に反して發表した門人團水を責めるべきであらう。

（十五・十）

西鶴の愛慾小説

A　愛慾の起承

西鶴は風教上おもしろくないとか、西鶴の文學は人間の弱みにつけこむ文學だからよろしくないとか、否定面を主として追求してゐるからいけないとか、まつたくふざけた理由で戰爭中は語りたくても語れなかつた西鶴が、終戰後はにぎやかに人々の口のはにのぼるやうになつた。しかしじつさいは伏字なしといふ煽情的な廣告で作品が翻刻されつつある程度で、評論らしい評論はまだ一つもあらはれてゐない。ただ性慾を大膽に描いたわが國唯一の古典作家といふありきたりの常識の線をうろついてゐるのである。十一月號の「新潮」で舟橋聖一がいつてゐた。

今年度上半期末から下半期へかけて、私に集中された文藝批評家その他の彈劾文章は、まことに目ざましいものがあつた。都の錦や瀧澤馬琴に、無智文盲の好色漢と罵られた井原西鶴にも劣らざる惡名をかち得ることができた。

これによると舟橋は、今こそおれは好色漢の悪名をうけてゐるが、西鶴と同じやうにおれの文學こそあらゆる凌辱にたへて生きながらへる種類の文學なのだといつてゐるやうにきこえる。このくらゐの自信はなくてはかなはぬところだが、しかし讀者よ、ごまかされてはいけない。舟橋と初期の西鶴は性慾を大膽に描いて悪名をうけたといふ點において同じ側にあるが、その大膽さも、その態度もまつたく他人なのである。同じやうに性慾を描いてゐても舟橋と坂口の文學を同日に論ずることができないと同樣にである。それで私は、この文章において、西鶴が今日ふたたび脚光をあびるに至つた必然性を考へ、あはせて愛慾小説の作家としての西鶴の正體について語つてみたいのである。

坂口も織田も、さてはまたサルトルも、一應第二次世界大戰によつてもたらされた思想的昏迷と不安が生んだ文學と考へてよからうと思ふ。今まで信じてきた一切の思考が信ぜられなくなつた思想的動亂に乘じて、美やモラルやもろもろの觀念によつて不當に壓迫されてきた肉體が自己を主張しはじめたところに發生した文學である。作家の側からいへば今まで肉體を律してきた彼自身の思想に對する不信の結果、あらためて肉體の語るところに耳を傾けようとしてゐるのである。かかる風潮に乘じた賣文の徒は論ずるにたらぬと同時に、かかる風潮を一がいに人道の敵と稱し、個に淫して全體を忘れたるものと氣前よく割切る公式論は現實に目をおほふものといふべきであらう。と

にかく生理を見すゑた今日の文學は、レディメイド・モラルに對する作家の本能的な不信が、敗戰によつて爆發した結果、生を生自身より開示しようとしてゐるといふ意味において、それは頽廢に通ずるものではなく、むしろ意慾的なものといふべきである。

愛慾作家としての西鶴が今日問題になりうるのも、まさしくさういふ意味においてであつて、けつして性慾描寫の大膽さの故ではないのである。伏字なしでよんでごらんになればわかることであるが、その點スタンダールと西鶴をわが小說の師といつてゐる織田作之助の方がはるかに臆面なく描寫してゐるのである。しかしもちろん私は西鶴が大膽でなかつたといふのではない。西鶴、武田織田と大阪出身の作家をならべてみると、やはり何といつても西鶴が一番デスペレエトな精神を持合せてゐたやうである。さきのことはともかく今の織田よりは死んだ武田の方がはるかに圖太い。その武田が西鶴について次のやうにいつてゐる。

貪婪と云つてよいか、圖太いと云つてよいか、誠に强い魂で以てあらゆる現象に氣怯れせず捉へてゐる。あらゆる俗惡事にも、それが現實である限りは眼をそらさず、寧ろ悅んで沒入してゐる風が見える。……彼は彼の見つけ、その限りでは彼の創造した世界に、人に絕望のみを感じさせる世界に、何等かの責任を感じなかつたか。

と詰めよつてゐるのであるが、さういふ西鶴の圖太さについて、「これは當時經濟的に勃興期にあつ

た町人のイデオロギーに根據を持つものであつたらう」といつてゐる通り、まさしく西鶴の圖太さといふものは彼自身がその一員であつた大阪町人のデスペレエトな根性がもつとも昂揚された時代のものであつた。であるからそれは二十世紀の知性をもつてしては及びがたい原始的なたくましさなのである。がそれとともに見のがしてならないことは、その大阪町人が下層階級であつたといふことである。大正・昭和の文壇を通じて、もつとも冷徹なリアリストであるとされてゐる志賀直哉が「暗夜行路」の中で次のやうに西鶴の「本朝二十不孝」について語つてゐる。

彼は二三日前、お榮から日本の小說家では何んといふ人が偉いんですか、ときかれた時西鶴といふ人ですと答へた。さういつたのは、丁度その前讀んだ二十不孝の最初の二つに彼は悉く感服して居たからであつた。それは餘りにと言ふ程徹底してゐた。病的といふ方が本統かも知れない。彼は若し自分が書くとすればああ無反省に慘酷な氣持を押し通して行く事は、如何に作り物としても出來ないと考へた。親不孝の條件になる事を竝べ立てて書く事は出來るとしてもそれをあの強いリズムで一貫さす事は却々出來る事ではないと思つた。……で、實際西鶴には變な圖太さがある。

なるほどそれ等の作品において西鶴は、自分のしてゐることのおそろしさに死ぬまで氣のつかぬ無反省な青年の行動を平然と語りつづけてゐるのであるが、さういふ西鶴の無感傷性は生來のもの

魂を見ないわけにはいかないのである。學習院出身の志賀氏にとつてそれはまさしく「變な圖太さ」であつたに相違ない。

本來たくましかるべき勃興期の精神とむかうみずな下層階級的精神によつて構成された西鶴の文學精神が「好色一代男」といふ青春の花火を打上げて、それまで貴族や僧侶や武家の手にあつた特權階級の文學をなきものにしたのであるが、しかし西鶴が處女作の「一代男」で青春をたたへ、感情の花を咲かせ、肉體の歡喜を力強くうたつたのは、何といつても彼が人間をこの上なく愛し、この上なく興あるものに思つてゐたからである。

「人程かはいらしき物はなし」といひ、「世に人ほど化物はなし」などと愛情をひれきしたり、複雜怪奇な人間に對する興味のほどをもらしたりしてゐるが、その西鶴のいふ人間とは、封建的な身分や教養やエチケットなどひつぺがしたあとに殘るすつ裸の人間であつた。

それ人間の一心萬人ともに替れる事なし。長劍させば武士、烏帽子をかづけば神主、黑衣を着すれば出家、鍬を握れば百姓、手斧つかひて職人、十露盤をきて商人をあらはせり。

飲んだり食つたり、戀愛をしたり失戀したり、憎んだり憎まれたり、泣いたり笑つたりする肉體を持つた具體的な人間、本能的な人間に西鶴は興味を抱いてゐたのである。

さういふ風に人間を把握し、しかもこの世の中で人間ほど愛すべき存在はないといふ確信があのデスペレエトな精神と結びついたところに「一代男」が生れたのであるが、しかしその受胎はけつして無抵抗になされたのではない。なぜならば、さういふ人間觀なり精神なりが理解され支持される可能性は當時にあつてはきはめてすくなく、わづかに進取的な町人階級の一部に限られてゐたからである。しかも言論の機關を持合はさぬ町人たちの聲援が聲なきものであつたのに對して、當時の文學のヘゲモニィはまさに反西鶴的な思想を擁する特權階級の手ににぎられてゐた。「一代男」を書くまでの西鶴は、詩人として町人社會の新しい風俗を大膽率直に、いとも樂しげにうたひつづけてゐたのであるが、その頃すでに西鶴は保守派の詩人群にオランダ西鶴の惡名をもつてさげすまれてゐた。西鶴一派によつて散文の泥濘の中に引ずりこまれた詩の純化を叫んで立上つた芭蕉の非難は、それが詩の本質に目覺めたものの言葉であるだけに、痛烈をきはめてゐる。

或は人情をいふとても、今日のさかしきくまぐまを探り求ぬ、西鶴が淺間敷下れる姿あり。

けれども保守派の詩人群にしろ芭蕉にしろ、立場の相違はあつても彼等に一貫した精神なり思想なりは中世的なるものであつた。動亂つねなき時代を溫床として支配的位置についた佛教的世界觀によつて、その時代の文學は人間否定の文學となつた。ことに文學の主流であつた詩歌にあつては、青春を忘れ肉體をさげすみ、もつぱら自然を享樂してゐるのである。西鶴の「好色一代男」は、さ

ういふ中世的な人間否定の世界觀や文學精神との戰ひのうちに形成されたものであるから、何よりもまづ筆はじめに自己の立場を主張し宣言せざるをえなかつたのである。

櫻もちるに歎き、月はかぎりありて入佐山、爰に但馬の國かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに寢ても覺ても夢介とかえ名よばれて……。

中世的な詩人たちが享樂の對象とした自然美の有限性に對する不信を表明し、金ほる里のほとりにといふ町人的な經濟力を背景とした人間的な歡喜を主張してゐるのであるが、これこそ永きにわたつて抑壓されてきた人間性の解放のさけび聲であり、近世に入つて新しく活動をはじめた自然的生命の力強い肯定である。「一代男」のフィナーレにおいて、六十歳の世之介を女護島の遠征に船出さしてゐるのは、まさしく卷頭の宣言に呼應してほろびることなき人間性、永遠なる青春をうたつたものにほかならない。

「好色一代男」における西鶴の主題は、文化の近世的な發展をはばむ否定的な中世的世界觀に抗して、生を生自身から新しく開示しようとした結果、愛慾の花さく肉體こそ人間の幸福の場であることを主張してゐるところにあるといふ意味において、今日かへりみるに足るものを持つてゐるわけである。しかしながら敗戰といふ外部的な條件にかり立てられてあわただしく肉體の意味をよみとらうとしつつある今日の愛慾小說とちがつて、西鶴の場合は新興町人階級のやむにやまれぬ自己主

張であつたといふ意味において、比較にならないほど積極的なものなのである。

このやうに歴史的・階級的な意義をもつてスタートを切つた愛慾作家としての西鶴は、作品としては「好色一代男」と續篇「好色二代男」、および「好色五人女」と「好色一代女」の四篇をもつて役割を果してしまつてゐる。年齢としていへば四十一歳から四十五歳までの脂の乘り切つた時代であるが、五十二歳まで十二年間の作家生活からいへば、初期の一時期を劃してゐるにすぎない。それにもかかはらず西鶴の名がとかく愛慾作家として語りつたへられてゐるのは、卑俗なる興味によることはもとよりであらうが、やはり何といつても初期の愛慾小説にもつとも生命力があふれてをり、新興階級としての町人意識が昂揚されてゐるからであらう。現に初期の作品の中でも處女作の「一代男」に西鶴の進歩的な町人意識がもつとも昂揚されてゐるとし、その故をもつて「一代男」に西鶴文學の至上價値を見出さうとする公式主義者もゐるのである。

西鶴の町人意識が「一代男」においてもつとも昂揚されてゐるといふ事實は、私が今まで説いてきたところで、異存のあらうはずはない。ただ私は進歩的な階級意識が昂揚されてゐるから文學價値も高いといふ樂天的な公式論に同意しかねるのである。さういふ場合もあるひはあるかも知れない。だが殘念ながら西鶴の場合はその思考があまりにも町人的であつたために、主題として把握されたその輝かしい歴史的な意義を持つ生解釋を見失つてしまつてゐるのである。

好色一代男とは、愛慾に生涯を賭けて悔なき男との謂である。その主人公一代男こと世之介は、上方商業ブルジョアジイの第二世で、七歳にして戀を知り、六十歳にして女護島に渡るまで、五十四年間、五十四章の愛慾一代記である。七歳で愛慾に參じた世之介は、十九歳で勘當の身となり、三十三歳まで十五年間、放浪しつつ愛慾に挺身する。三十四の年父親が亡くなつてむかへとられ、今の金にして十二億圓ほどの遺産を相續し、名實ともに元祿のダンディとなる。三十五歳より女護島にわたる六十歳までの二十六年間、東西の上層町人のサロンであつた京・大阪・江戸の遊里を主要なる舞臺として、吉野、夕霧、小紫、高雄などの一流の名妓を相手に、洗煉された情生活をいとなむ。

十五年におよぶ放浪の期間中、世之介はまつたく生活の資をたたれ、生きるためにはあらゆる下賤なる職業に從事してゐるのであるが、西鶴が世之介の青春を試煉の時期にふりあてたのは、町人社會における典型的人間は現世的な努力によつてのみ達しうるのであるといふ町人的な思考によるものであらう。が何よりも注目すべきことは、この放浪の期間においてのみ一代男の主題が正しく昂揚されてをり、名實ともにダンディとなつて遊里の人となつたとたんに主題が見失はれてしまつてゐるといふことである。

二十八歳、放浪中の世之介は、指から強盜騷ぎで人改めのきびしい碓氷峠に近い追分の關所で風

體をあやしまれ、しばらく留置されてゐるうちに、隣の牢にはひつてゐる夫を嫌つて家出した女に思ひをかける。天井の煤を楊枝にそめて返すがへすも書きくどき、命ながらへたらばと互に文をとりかはし、強盗の嫌疑でつかまつた明日をも知れぬ身の上でありながら、格子にとりついて女をこの胸に抱きしめることのできない不如意を歎くのであつた。ところが幸ひにも將軍家の法事があつて特赦令が出たので、あやふい命を助かり、世之介は女を背負つて筑摩川を渡つた。雹などふつて心細い夜であつた。女が空腹をうつたへるので、麓に引きすててあつた柴積車の上に寢せておいて食物を探しに出掛けた留守中、女は女を探してゐた一族の者たちに發見された。折よく歸りあはせた世之介が女をかばつて爭つたが、取圍まれてのびてしまつた。氣がついてみると女はゐない。車のみがありし女の寢姿をしのばせてゐる。今宵こそ枕はじめ、と思つたに、肌がよいやら惡いやらそれも知らずにと悔みながら、足もとに落ちてゐた油臭い黃楊の櫛をせめてもの形見に握りしめて、暗い野道をあてもなく女を探しまはつた。それから四五日たつた夜、人里はなれた薄原をさまようてゐると、幽かな籠火をたよりに二人の百姓が新墓をあばいてゐる。世之介の足音をきいて逃げようとするので、脇差に反をうたして詰ると、若い女の土葬を掘り返し、黑髮や爪をはぎとつて上方の傾城町の遊女たちに賣るのだといふ。大勢の客にさうさう髮を切つてやつたり爪をはがしてやるわけにはいかないから、かうして代用品を提供するのです。あなたもとかく目の前で切らせなさい

とあべこべに說教されながら、ふと足もとの女の死體を見るとまさしく尋ねる女であつた。我ゆゑと抱きついて身悶えすると、不思議や女は眼を見開いて微笑したかと思ふと、また元の冷い死體にかへつた。二十九までの命、思ひ殘すところはないと自害しようとする世之介を、二人の百姓がやうやくなだめて連れ歸つた。

夫をきらつて家出する女は、現代の我々にとつて別に珍らしいものではないし、結婚と離婚が自由になつて、これからまたふえることであらう。しかし封建時代にあつては、命がけのはなはだセンセーショナルな行爲であつた。女を打殺さうとする男どもがいつてゐるやうに、親兄弟にも難儀のかかる仕儀なのである。親同士の相談で見も知らぬ男と結婚させられ、とへはたへの掟にしばられて好きも嫌ひもなく一生を終つてしまふのが常識であつた時代に、愛のない家庭生活にたへられなくなつて掟からはみ出した女は、性格や感受性の强さがしのばれ、愛慾の巷をさまよふ世之介にとつては又と得難い相手であつたに相違ない。家出した女といふことをきいて、「是はおもしろき事かな」と、明日をも知れぬ身の上を忘れて世之介がかきくどいたのも無理のないところであつた。この世之介の戀慕はたしかに衝動的であり、またきはめて官能的である。といふよりはむしろ肉體で戀をしてゐるのである。それにもかかはらず本能につきまとふ暗さと嫌らしさが感ぜられないのは、それに一さいが賭けられてゐるからである。肉體を輕蔑したり、性慾をいやしんだりすること

が上品だと考へる中世的な精神主義的思考から解放されて、何のかけひきもなく肉體を持つた人間として誠實に自由に行動してゐるのである。まさしく打算なき青春の美であり純情である。

このやうに二十九歳の世之介が示した打算なき青春の純情は、年とともに失はれることがない。世之介五十三歳の年、出羽の國庄内へ米の買入れに出かけて滯在してゐると、大阪に殘して來た愛する太夫和州から悲しい便りが屆いた。世之介が發つた後のつらく悲しい廓の日日をこまごまと書つづけた文を、泪にくれて讀んでゐると、和州のまぼろしが後に立ちそひ、妾はいよいよ京へ住替への談合がきまり、明後日はつれなくも大阪を去つて京へのぼります、といひさして泪ぐみ、この頃すこし客がへつたからといつて、京へ住みかへさせるとはむごい仕打です。京へ上つたら追つつけ死んでしまひますといふ。それはと悲しく見上げると、四足五足あし音がして、淋し氣に後を見返つて消え失せた。——是まぼろしなればとてこのままは捨て難し——と、五百里の道を大阪へかけ戻る世之介なのである。泪にぬれた幻は、たとへわが心のなすわざであらうとも、愛する者の悲境を知つてすべてを投げすててかけつける純情は、二十九歳の世之介の純情にほかならない。

このやうに年齡にかかはりなく「一代男」にみなぎる芳しい青春の香氣は、いふまでもなく西鶴の對象が特定の個人でなく、時代の典型であつたからにほかならない。世之介のおとろへることなき青春は、すなはち上昇期町人の青春なのである。それにしても見落してならないことは、その青

春性こそ失はれてゐないが、五十三歳の世之介の純情には肉體がないといふことである。愛慾に挺身する若々しい意慾のみがあつて、かつての世之介に見られたやうな強力な肉體の裏打ちがないのである。この變化を人は西鶴の年齢に對する考慮と解するかも知れない。たしかに時の流れは容赦なく冷酷に肉體をむしばみ、その機能をうばつてしまふからである。けれども七歳にして目覺め、六十歳にしてなほかつ强精劑を積みこんで女護島遠征に船出する「一代男」に關する限り、さういふ常識は通用しない。この變化はさきに指摘しておいたやうに、西鶴が町人作家として遊里を愛慾の場としてえらんだことに起因してゐるのである。

父の死によつて遺產を相續した三十五歳以後の世之介は、もつぱら三都の遊里を舞臺として愛慾に挺身してゐるのであるが、その第一歩、三十五歳の章「後は樣つけて呼ぶ」において、西鶴は次のやうな世之介を描いてゐる。いやしい小刀鍛冶の弟子が自分を戀ひ慕ひながら、賤しさ故に金でなることもならぬ身の上を歎いてゐることを知つた世之介の愛人の太夫吉野が、ある夜ひそかに呼び入れて身をまかせ、盃までして歸してやつた。それを知つた世之介は、――それこそ女郎の本意なれ、我見捨てじ――と吉野を身請して妻にしてゐるのである。また四十三歳「身は火にくばるとも」の章においては、名妓夕霧を次のやうに讃美してゐる。

いづれも情にあづかりし過ぎにし事ども語るに、あるは命を捨る程になれば道理を詰めて遠ざ

かり、名の立ちかかれば了簡してやめさせ、つのれば義理をつめて見はなし、身おもふ人には世の事を異見し、女房のある男にはうらむべき程を合點させ、魚屋の長兵衛にも手をにぎらせ、八百屋五郎八までも言葉をよろこばせ、只この女郎の人をすてずに、まことなる心を思ひ合せ、はじめの程は高聲せしがいつとなく靜になりて、いづれか泪をこぼさぬはなし。

吉野も夕霧もこれを愛慾の化身として西鶴は肯定的に描いてゐるのであるが、それは何と理智的なことであらう。ここにはもはやあの率直な肉體の自己主張はない。美しく熾んな性の炎は冷たい理智の前に消滅してしまつてゐる。愛慾は肉體から遊離して觀念的なものとなつてしまつてゐるのである。

封建的な身分制度や道德にしばられることなく、自由に人間的な慾望を充足しうる世界であるが故に、遊里は町人階級のサロンとなつたのであり、西鶴もまたその町人の一人であつたが故に、彼が主題としてかかげた生の解放の場として遊里をえらばざるを得なかつたのである。しかしながら遊里における肉體は市場價値を有し、愛情によらず金錢によつて取引きされるのである。したがつて肉體の意志であるところの愛慾はそつちよくに自己を主張することができない。肉體はただその機能によつて存在するのみである。

肉體にそれ以上意味を與へることのできない遊里であるが故に、そこで語られる愛慾はいよいよ

觀念的なものとなり、肉體と遊離した普遍的な眞情に無上位を與へざるをえないのである。ここに肉體の青春をうたはうとしながら中途にしてその主題を見失ふに至つた所以のものがあるのであるが、それはいふまでもなく「一代男」における西鶴の思考があまりにも町人的であつたからにほかならない。

すでに町人意識が强烈であつたからこそ、遊里を生の解放の場とし、事の志と違ふ結果を招いたのであるが、それについて西鶴がまつたく無自覺であつたことは、引續いて今度はぴんからきりまで遊里を舞臺とした「好色二代男」を書いてゐることによつて知られよう。まつたくこの作品では、遊里こそおれたちの世界だと、あぐらをかいてしまつてゐるのである。もちろん溺れることを知らない西鶴の眼が、かすかすの眞實を描き出してこの作品の危機を救つてゐるのであるが、しかし依然として愛慾を主題としてゐながら、この作品ではもはやまつたく肉體を見失つてしまつてゐるのである。その尤なるものは「死なば諸共の木刀」の一篇である。

江戸吉原の太夫若山と深く愛しあつてゐた半留といふ男は、やがて身請けして妻にするつもりでゐたが、この上もない若山のまごころをまだ信じ切れず、ある時破產したと稱してみすぼらしい姿をあらはし、心中をせまつた。若山はすこしも惡びれず、男の心に從つて部屋にこもり、脇差をかまへていざといふ時、自分ゆゑに愛する男を殺す悲しさに思はずも泣聲をあげた。その聲をききつ

けて揚屋の者がかけつけ、二人を取りおさへて詮議すると、半留は騒ぐ氣色もなく、銀箔をはつた木脇差を見せ、女の心をためすつもりでしたことと供の者に持たせてあつた金を取りよせてその場で女を身請けし、大事の時の一言が氣に食はぬからとそのまま親里へかへしてしまつた。その日から半留は相手をかへて眞實などにはとんぢやくなく、別人のごとく面白をかしく遊びはじめた。

自分ゆゑに愛する男を殺す悲しさは、心が深ければ深いほど強いはずである。ところが男はそれをさへ女の我が身可愛いさの悲鳴ととつたのである。おそらくこの男の胸に巣喰うた疑惑の芽は、いかなる眞情をもつてしても摘みとることはできなかつたであらう。約束どほり女に自由を與へておいて、別人の如く騒ぎはじめた男の陽氣は、求むべからざるものを求めた愚かさを悟つたところからきたものである。西鶴がここに描かうとしてゐるものは、通じないはずのない人間の眞情が、金のついてはなれぬ遊里であるが故に通じない悲しさ、美しい人間の誠實を目の前にしながら、それをどうしても素直に受入れることのできない遊里人種の不幸なのである。「一代男」においてはもとより、「二代男」においてすら遊里における眞情の尊さと美しさを語りつづけて來た西鶴は、ここにおいて明らかにわびしいその限界をつきとめてゐるのである。まごころに二つはないにもかかはらず、それが額面どほり通用しない遊里の不幸を見すゑたのはさすがであるが、しかしここにはもはや全く肉體についての思考はない。牢の格子にとりついて、女を愛撫することのできぬ齒がゆさ

に身悶えした世之介の青春は遠い昔の夢となつてしまつてゐるのである。

それもこれも遊里を舞臺としたためである。同じく「二代男」の卷一に、こんな話がある。二年あまりも揚詰にしてほかの男に逢はせず、そのあげく我を思ふとの誓紙を書けと太夫に要求したところが、いくらでも御心まかせに書きませうが、正直のところこれほど大切にしていただいても一向あなたがいとしくありません。偽りでよければ書きませうといふ。そこで惚れぬといふ誓紙を書かせ、その偽りのない心中を有難がつてなほも通ひつめたといふ話である。

かうなつてくると事はもはや愛慾の領域をはなれ、ひたすら普遍的な眞實の前に拜跪するといふ錯倒した心理狀態に突入してしまつてゐるのである。

西鶴の旺盛な町人意識が、彼等のサロンであつた遊里をちうちよなく生の解放の場として取上げたのであつたが、はからざりきその世界は肉體の青春をうたふにはもつとも不適當な舞臺であつたために、西鶴はつひに主題を見失つてしまつてゐるのである。しかしさすがに西鶴だけあつて、再びまた作家としてその世界に望む餘地なきまでに、その特殊な世界における愛慾の限界を描きつくしてゐるのである。

詩に起承轉結といふ。稀有なる愛慾作家として登場した西鶴は、その小說の起承において町人なるが故の當然なる袋小路に迷ひこんだけれども、作家としての西鶴の性根はゆがむことなく、やが

て「好色五人女」と「好色一代女」の二作によつて正しい轉結を示してゐるのである。(二十二・二)

B　愛慾の歸趨

世界大戳がもたらしたあらゆる思想に對する不信から出發して、人間を一應思想から切りはなし、肉體のデッサンからはじめて新らしい人間觀とモラルを打ちたてようとする現代の實存主義的な愛慾小說とちがつて、十七世紀末の日本における西鶴の愛慾小說は、階級を形成してまだ一世紀にもみたない町人階級が、武士階級によつて一そう强化された非人間的な中世的道德や制度の重壓にたまりかねて、やむにやまれず打上げた青春の花火であつた。

人間性の解放、肉體と感情のゆたかな啓示、等々の世紀の課題にこたへるべく、西鶴は「好色一代男」を創作したのであるが、しかしさういふ主題を處理する彼の思考や方法があまりにも町人的であつたために、具體的にいへば生の解放の場として町人階級のサロンであつた遊里をえらばざるを得なかつたために、彼は間もなく主題を見失ひ、もつぱら肉體をともなはない美と眞情について語つてゐるのである。しかもさういふ傾向は典型的な遊里文學としての續篇「好色二代男」に至つてきはまつてゐるのであるが、しかし曇ることなき西鶴の眼と心は、よく愛慾の場としての遊里の

限界に筆をおよぼしたのであつた。その結果、政治的にも道徳的にも一般社會から隔絶された特殊地帶としての遊里からさまよひ出て、制約の多い、しかしそれ故にこそノルマルな命の場である巷の人となつた西鶴について、私はすでに語るところがあつた。

その思考があまりにも町人的であつたが故に遊里を場として主題を見失つた西鶴が、再びまた主題をかかげ直して正當な場に臨んだといふことは、彼が生れながらの作家であることの證左であらう。無意識に書いてゐるうちに成長したその作家的性根が「好色五人女」と「好色一代女」を生んだのである。西鶴の愛慾小説の歸趨は、まさにこの二作品について考へるよりほかはないのであるが、しかし「二代男」(一六八四年)と「五人女」(一六八六年)の間に横たはる一年半あまりの歳月を空しくすごしたわけではなかつた。その間に西鶴は「西鶴諸國ばなし」(一六八五年)と「椀久一世の物語」の二作を書いてゐるのであるが、ことに「諸國ばなし」の中の短篇の一つ、テーマを「戀」と明示してゐる「忍び扇の長歌」と題する一篇は、「二代男」から「五人女」への跳躍の足場として見すごしがたいものである。

上野は花の盛り、ざわめく群集の中を行く大名の奥方らしい乘物の中の一つに、はたち餘りの美しい面影があつた。それを中小姓ぐらゐの浪人者がうかうかとついてまはつてゐたが、たまりかねて中間に様子をきくと、さる大名の姪といふことであつた。男は手づるを求めて奥方に奉公し、は

や二年あまり、乗物の供をして歩いてゐる中にいつしか心が通じ、令嬢の方でも男を思ふやうになつた。しかし尋常の手段では決定的に身分のちがふ二人が結婚することはできないので、令嬢の方からさそつて屋敷を抜け出し、江戸の片すみのかはらけ町で裏店住ひして、自活しながら幸福な日日を持つた。しかし半年ほどして發見され、男はその夜の中に成敗、令嬢は一間におしこめられて自決するやうに仕向けられたがなかなかその様子がない。時節うつればいかに女なればとておくれたり、最後をいそがせと大殿よりの仰せで、使ひの者が令嬢の所へやつて來て、世の定まり事とて御いたはしく候へども、不義あそばし候へば御最後とすすめると、令嬢は昂然としていふのであつた。

我命をしむにはあらねども、身の上に不義はなし。人間と生を請けて、女の男ただ一人持つ事、是作法なり。あの者下々をおもふは是縁の道なり。おのおの世の不義といふ事をしらずや。夫ある女の外に男を思ひ、または死別れて後夫を求むるこそ不義とは申すべし。男なき女の一生に一人の男を不義とは申されまじ。又下々を取あげ縁をくみし事はむかしよりためし有り。我すこしも不義にはあらず。その男はころすまじき物を。

とさういつて令嬢ははじめて涙を流し、愛人のあとをとむらふためにとみづから髮をおろし、不當な死の要求に最後まで抗してゐるのである。

西鶴が生きた時代は、今日われわれが打破しつつある封建的な人間關係、主從關係、身分制度、家族制度などがもつとも強化された時代であつた。個人の價値、尊嚴、自由、意志、感情などのみとめられることのまことにすくなかつた時代である。當然男女關係はさういふ制度や人間觀にもとづいて處理されてゐたのである。結婚の前提としての戀愛はもとより、一般的な理會や友情でさへもみとめられないのが普通であつた。ことに武家社會にあつては彼等自身のために設定した制度でありモラルであつたから、それは一そう嚴重であつた。家格および私有財產の繼承が目的のすべてなのであるから、當事者間の意志や感情を無視してすべてが家長の一存ではこばれ、しかも一夫一婦の掟に從はせられたのである。非情なる肉體の結合によつて開始される結婚生活は、さいはひに愛情が芽生えればよいが、さもない限りただ冷たい意志の力と掟に對する怖れのみによつて貞潔が守られなければならなかつたのである。しかもさういふ掟の中に住んでゐた人々も、あの誰かを愛さずにはをられない青春を持合はせてゐたのであつた。さうしてもし人々がやむにやまれぬ青春の攝理にしたがつて愛情の花を咲かせたが最後、不義の烙印をおされねばならなかつた。ことに身分制度を無視したものはその存在までおびやかされたのである。さういふとへはたへの桎梏を承知の上で出奔した令孃の行爲は、もとより芽生えた內心の人間的な要求に忠實であらうとした結果であるが、豫想どほり見つかつて捕へられ、男は殺され令孃は自殺を强ひられるはめに立ちいたつた。世

の定まり事として御いたはしく候へども、不義あそばし候へば御最後と自決をすすめる役人は、封建の制度やモラルの代辯者にほかならない。それに對する令孃の主張の根本は、いふまでもなく戀愛の自由である。封建制度が自己保存のために扼殺してはばからない人間性の解放であり復活であつた。しかしながら令孃も言つてゐるやうに、動物としてではなく人間として生を受けたといふ自覺を持つ以上、戀愛の自由もまた人間的制約のもとに營まれなければならないものであらう。さうしてそこから女が男をただ一人えらび持つことの自由と正しさの主張がみちびき出されてきたのであつた。一夫一婦の思想は封建的な儒教道德にもとづくものであるといはれ、あるひはまた封建的な父系による私有財產繼承の要求するところとも說かれてゐるが、しかし令孃の場合はさうした人爲的な掟を否定し超越して人性の自然にしたがひ、命をかけた愛情の必然的な歸結として提示された貞潔の觀念であるが故に、時代を越えた新しさがあるといふべきである。

貞潔は掟や冷たい意志によつて支へられるべきものではなく、捨身の愛情によつて支へられるべきものである。しかもさういふ昂揚された愛情の前には人爲的な身分の相違などはあり得ない。人間は平等であるべきだ。——人間と生をうけて女の男をただ一人持つことこれ作法なり、あの者下々を思ふはこれ緣の道なり——といふ令孃の思想は、まことに愛情と貞潔の本質を把握した常に新らしく正しい戀愛のモラルである。

思ふに「一代男」以來、愛慾の自由と解放を主張し謳歌しつつも、美と眞實を强調するにとどまつたのは、一般社會のモラルに抵觸することのない遊里を場としたためであつた。その西鶴が「二代男」を最後として遊里に背をむけ、一歩社會にふみこんだところにおのづから激發し、醸成された愛慾のモラルにほかならない。道德や法律や制度と對決することなしに描くことのできない「好色五人女」を創作するに當つて、西鶴はすでにこのやうな心的過程を持つてゐたのである。

「好色五人女」は愛慾を主題とするといふ點において「二代男」に直結する短篇集であるが、五人のヒロインはいづれも悲劇的な愛慾の騎士として當時巷間に喧傳された家庭の女性たちである。しかしながら「五人女」は單に題材の上から見ても、これを一律に取扱ふことはできない。同じ家庭の女性であるとはいへ、お夏とお七とおまんの三人はいづれも十六歳の初戀で、それに生涯を賭けた女性として描かれてをり、おせんとおさんはともに有夫の女で不倫の道をたどつた女性として描かれてゐるからである。當然西鶴の見るところ求めるところもおのづから異なるところがなくてはならない。私はまづ三人の少女の戀物語からはじめることにしたい。

三人の少女の戀のアラベスクは、一應それぞれ異なる色彩で描きわけられてゐる。自分の家の手代の清十郎と戀をし、かけおちしそこなつて捕へられ、清十郎が盜人の寃罪で處刑されたことを知

つて發狂し、尼となつて生涯を思ひ出に生きたお夏、焼け出された避難先の僧院でめぐりあつた美少年の吉三郎に逢ひたさに、放火の罪を犯して火刑に處せられたお七、美少年を愛して女などには目もくれぬ源五兵衛のあとを追つて家出し、苦難をものともせず添ひとげた薩摩乙女のおまん、それぞれ感情に明暗の差があり異なるプロットを持つてゐるが、しかし西鶴はこの三人の少女に共通の性格や運命を與へてゐるやうである。

何よりも三人の少女は戀愛において常に主導的であり、自主的であり、灼熱的であり、從つてそのおのづからなる歸結として、「諸國ばなし」の令孃におけると同じ貞潔に生きてゐるといふことである。もちろんそれは少女たちの口を通じて理念として語られてゐるのではなく奔流する青春の描寫そのものの中に語られてゐるのであるが、そこにかへつて「諸國ばなし」において語られたモラルの燃焼した姿を見ることができよう。さういへばお夏の場合など構想まで同型である。男はその家の使用人で結婚できないと見て出奔し、事あらはれて男は處刑され、女は尼となつてその菩提をとぶらつてゐるのである。もちろんお夏の場合も實説にもとづいてゐるのであるから、一應偶然の相似ともいへるが、しかしかういふ結果を見たのは同じ主題をえらんだからである。灼熱せる愛情のおのづからなる歸結として無意識の貞潔を持つたお夏は、前の令孃とともに町人西鶴の肚裏に出づる新らしいモラルの實踐者なのである。生涯に一度の戀に身を焼いた火の少女お七もまたその一

人であり、只一人幸福なる結末を與へられてゐるおまんにしても、その仲間にほかならない。しかも注目すべきことは、「諸國ばなし」では省略されてゐた愛情の性質が、ここではきはめて具體的に描かれてゐることである。

それは處女作「一代男」において掲げながら見失つてしまつたところのあの主題、愛情は本質において肉體的なものであり、それをほかにして男女間の幸福はあり得ないといふ思考である。したがつて貞潔に通ずる性行爲は恥づべきものではなく、當然のといふよりはむしろ美しい生命の焰として描かれてゐるのである。たとへばお七が吉三郎を訪れた初夜の構圖。

吉三郎寢姿に寄り添ひて、何んとも言葉なく、しどけなくもたれ掛れば、吉三郎夢覺めて猶身をふるはし、小夜着の袂を引きかぶりしを引きのけ、髪に用捨もなき事やといへば、吉三郎切なく、私は十六になりますといへば、お七妾も十六になりますといへば、吉三郎重ねて、長老様が怖やといふ。おれも長老様は怖しといふ。何とも此繼始めもどかし。後は二人ながら涙をこぼし不埒なりしに、また雨の上がり神鳴荒けなく響きしに、是は本に怖やと吉三郎にしがみ付きけるにぞ、自からわりなき情深く、冷えわたりたる手足やと肌へ近寄せしに、お七恨みて申し侍るは、其方様にも憎からねばこそよしなき文賜はりながら、かく身を冷せしは誰がさせけるぞ、と首筋に喰ひつきける。いつとなくわけもなき首尾して、濡れ初めしより袖は互に、

限りは命と定めける。

露骨なる場面の描寫にちがひないのだが、いささかも猥雜の感がない。春にさきがけて花咲く水仙の花みる心地である。この清純な美の構成要素として、お七と吉三郎のをさなさを否定することはできないが、何よりも純一に相愛する男女の情熱の極點における抱擁を美しいものとした西鶴の心を感じないわけにはいかない。まことに西鶴は色情を詩にまで高めることのできた稀なる作家の一人である。

日本民族もまだ青春を失はなかつた頃はかうであつた。萬葉集の中に我々はいささかの不安も動搖も羞恥もなく、高らかに肉體の歡喜がうたはれてゐるのを知つてゐる。しかしながら間もなく青春を失つた民族は、宗教や道德や制度の中に肉體を見失つてしまつた。肉體を輕蔑して自然を享樂することを高級で上品なことと考へるやうになつたのである。思へば永い間忘れられ輕んぜられてきた青春の歡喜と肉體の幸福が、今西鶴の手によつて復活したのである。そしてそれはすでに處女作「一代男」において主張されたところであつたが、それは一般的な道德や制度から隔離された遊里といふ特殊な世界を溫床として持つたために、普遍的な生解釋として把握されるに至らず、「五人女」に至つてはじめて開花したのである。

しかしながら西鶴のかかる生解釋は、「チャタレイ夫人の戀人」を書いたロレンスのやうに、哲學

的な思惟の結果として得たものではない。階級を形成してまだ一世紀にも滿たない青春期の町人のみづみづしい眼と、ロレンスもさうであつたやうに下層階級出身の自由でデスペレートな魂をもつて直感的に把握した生活意識なのである。理念よりも現實を尊重する近世的な文學精神のめでたい所產なのである。

さういふ西鶴の現實主義的な文學精神を何よりもよく物語つてゐるのは、お夏やお七らの悲劇的な結末であらう。もしも西鶴が觀念的傾向的な作家であつたならば、たとへ悲劇的な結末が事實であらうとも、自己の創造したモラルの忠實なる實踐者としての「諸國ばなし」の令孃やお夏やお七に惜みなく聲援をおくり、次手に幸福なる結末を與へたに相違ないのである。西鶴はレボルタージュ作家ではないのであるから、それほどの自由は確保してゐたはずである。

戀愛のモラルについて西鶴の語るところは、中世的なもろもろの思想的羈絆から脫して、生を生自身から新らしく開示しようと努力しつつあつた町人階級の意慾を反映したものであつたから、すくなくとも彼等町人階級の共感はかちうるはずのものであつた。けれどもあまりにも明らかに、ある特定の階級にのみ通用するモラルはモラルの名に價しない。西鶴が理念よりも現實を尊重する作家であるならば、自己の創造したモラルの普遍性について、もしくは現世における可能について思ひをいたさざるをえなかつたはずである。しかもその場合の現世とは、彼を支持する町人階級を最

下位におき、身分制度と家族制度の強力な交叉によつて構築されたゆるぎなき封建社會であり、なほ町人自體が彼のモラルに同情をよせながらも、實生活においては封建道德の傘下に歸しつつあつた時代なのである。いま西鶴が「諸國ばなし」の令孃やお夏やお七を自己の創造したモラルのけなげな實踐者として肯定的に、まさしく歎美的な筆致と情熱をもつて描きながら、しかも彼女たちの末路を事實の通り悲劇的なものにせざるをえなかつたのは、正しいと信ずる自己のモラルと現世との如何ともなしがたい不調和から目をそらすことができなかつたからにほかならない。

この觀念や思想よりも現實に優位を與へざるをえない作家精神を把握することによつて、はじめて殘る二つの短篇のアンチテーゼを理解することができるのである。敗北を承知で聲援を惜しまなかつた少女たちのあかるく美しい生涯に一度の初戀に對して、この有夫の女たちの愛慾は暗く血なまぐさい。

なんぞかくし男をする女、うき世にあまたあれども、男も名の立つ事を悲しみ沙汰なしに里へ歸し、あるひは見付けてさもしく金銀の欲にふけてあつかひにして濟し、手ぬるく命をたすくるがゆへに此事のやみがたし。

樽屋おせんの一節で、西鶴が一應手きびしく否定してゐるのも當然といふべきである。がしかしある一つの素材を形象化するといふことが、眞に否定的であつてできることではない。作家はかな

らずや形象化せずにはをられぬだけの意慾をその素材に對して抱いてゐるにちがひないのである。

樽屋の情熱にひかれて結婚したおせんを、西鶴は意志的で情緒反應のにぶい農民出身の娘として描いてゐる。そんな女であるから姦通の動機もひどく觀念的であり意志的である。

かねて出入りしてゐた同じ町内の麹屋の法事の手傳ひに行き、納戸で菓子を盛つてゐると、亭主の長左衞門が來合せ、棚から鉢をおろさうとして取り落し、誤つておせんの結髪をこはした。それを麹屋の女房が疑ひ、一日中あてこすりをいひやまぬので、おせんもつひに腹をすゑかね、

思へば思へばにくき心中、とても濡れたる袂なれば、此上は是非に及ばず、あの長左衞門殿に情をかけ、あんな女に鼻あかせん。

と思ひこむより一變し、忍び忍びに約束して機會を待つてゐるうち、貞享二年正月二十二日の夜、正月遊びに更けての歸り道、かねての約束今宵こそと長左衞門につけこまれて否がならず、引き入れて契らうとしたところを樽屋に見つけられ、おせんはかなはじと覺悟の前、商賣道具の鑓鉋で胸もとをさしつらぬいて死んだ。

いふまでもなく姦通の動機は肉體的なものではない。やむにやまれぬ強烈な意地のはたらきである。言譯一つせずに鉋で胸をさしつらぬいた壯烈なおせんの最後は、もつとも烈しく罪を意識してゐるもののみがなしうる自己否定である。それほどまでに罪を意識してゐながらいささかも燃える

ところなく、蒼白な顔と冷たい手で姦夫を抱くおせんの意地のはげしさを、西鶴はぢつと見つめてゐるのである。否定しても否定しきれない是非なき女の偏執こそ、西鶴の描かうとするところであらう。

おせんにくらべると、おさんは肉體的である。その都會的な浮艶なる性情のゆゑに、夫の留守中に手代の茂右衛門とあやまつて肌ふれた後は、罪の意識や身を嚙む寂寥をけとばし、髪ふり亂して暗い本能をよすがに生き拔かうとしてゐるのである。

西鶴が有夫のおせんとおさんを通じて描かうとしたものは、それを惡と意識しながら、モラルを蹂躙してかへりみない女性の强烈な自我と、知性もモラルもこれをせきとめることのできない絶對的な肉體の妄執であつた。それにしても、三人の少女の上に全身的な愛慾の歸結としての貞潔を描いた西鶴が、なぜかういふ不逞な生き方を否定も肯定も乘りこえた異常な情熱をもつて追求してゐるのであらうか。いやふしぎではない。すでに自分の創造したモラルと現實との不調和を見てとつて、いさぎよく現實の前にひざまづいた西鶴であつてみれば、モラルと本能との間を右往左往する不調和な人生、それ故にこそモラルを希求してやまぬ混濁せる人間の正體を追求せずにはをられなかつたのである。

「一代男」以來、人間否定の中世美學や封建道德に抗して、生の解放を主張し、うむことなく愛慾

を讃美し、肉體こそ男女間の幸福の溫床であり貞潔の母胎であるといふ結論に達した今といふ今、西鶴はその同じ肉體が男女間の不幸の場であり惡の溫床であることを悟るに至つた。せつかく肉體の上に打ちたてた人間の權威と美が、がらがらと崩れていく音に西鶴は耳をそばだてゝゐるのである。

それにしても、近代の病的な精神主義に對する批判として、男女間の幸福と貞潔を肉體の上に設定した「チヤタレイ夫人の戀人」が、ロレンスにとつて結論となつてゐるのに、西鶴はそこから出發してロレンスが遂に見ずに終つた肉體の否定的な面に筆を及ぼすことができたのはいかなる理由にもとづくのであらうか。もちろんプリミティヴな西鶴の作品にくらべて、ロレンスの作品は比較にならないほど近代的に完成されてゐるし、知性とか教養とかいふ點についても、ロレンスは下層階級出身（坑夫の子）であるとはいへノッティンガム大學を卒業してゐるのである。それにもかかはらず西鶴がよくロレンスの線を突破して肉體の暗い半面をのぞくことができたのは、やはり何といつてもロレンスの思考が哲學的であつたのに對して、西鶴は思考よりも現實に優位を與へる側の作家であつたからであると考へられる。

これまで肉體の肯定的な面にそそがれてゐた西鶴の目と心は、おせんとおさんの物語を契機として否定的な面にそそがれはじめた。狂暴な肉體の歷史とその限界を描いた「好色一代女」は、かく

して登場したのである。

「一代女」は「一代男」にはじまる西鶴の愛慾小説の最後をかざる作品である。「一代女」以後「好色盛衰記」のやうな作品も書いてはゐるが、しかしいづれにしても今まで愛慾を肯定的に描いてきた西鶴が、「一代女」によつてその否定的な面を見すゑたといふ意味において、かつまた「一代女」を最後として武家生活や町人の經濟生活へ意慾をふりむけていつたといふ事實に徴して、「一代女」は最後の作品といふことができるのである。

「一代女」の意圖の一つとして、ある一人の女性の生涯に託して、封建時代の女性に與へられたあらゆるアブノルマルな職場を描かうとする風俗小説的な意圖とその成功をあげることができるが、やはり何といつても「一代女」のテーマは、モラルをじうりんしてはばからない肉體の歴史とその限界の描寫にあらう。當然西鶴はさういふテーマに從つて行動するに必要な資格を一代女に與へざるを得なかつた。その一つは「五人女」の大經師おさんに見られたあの感性的に洗煉された浮艶なる都會的性情であり、その二は樽屋おせんのあのはげしい氣象、强烈な自我であるが、何よりも注目すべきことは、さういふ性情を包むにふさはしい卓越なる肉體を與へてゐることである。顔の造作から手足、腰つき、尻つきまで、あくまでも健康で享樂的な一代女の姿態を西鶴は熱心に説明し

てゐるのであるが、「五人女」までの西鶴は、たとへばおさんのやうな本能的な女性を描く場合でも、肉體についてはほとんど注意を拂つてゐない。それが「一代女」に至つて肉體を重要視してゐるといふことは、愛慾に對する西鶴の思考が具體的なものとなつたことを意味するものである。おさん的な浮艶なる都會的性情とおせん的なる强烈な性格、それに卓越せる肉體、この三つの條件が自活を强ひられた境遇を場としてうごめくところに、一代女の限りなき顚落の歷史が展開するのである。

一代女はもとおちぶれた貴族の娘で、宮中に奉仕してゐるうちに戀をして追放され、自活せねばならぬはめに立ちいたつたのであつたが、もとより女性のノルマルな職場があらうはずもなく、おのづからその美貌とすぐれた肉體をはつて生きて行く血なまぐさい生活がはじまつた。しかしもちろん一代女も人間である以上、時に人なみの平穩な生活に心ひかれ、一再ならず正當な職業をえらんで正しく生きようと努力してゐるのである。少女時代に宮仕へしてゐた時に身につけた教養を活かして、ある時一代女は筆道指南と作法教授の看板をあげ、毎日良家の子女をあづかつて「身のいたづらふつふつとやめて何の氣もなく」、平穩で淸らかな日日を送つてゐた。ところが近所の靑年に戀文の代筆を賴まれ、以前遊女であつた時のうんちくをかたむけ、氣を入れて書いてやつてゐるうちに、いつとなく亂れてその靑年を愛するやうになつた。ある日また代筆してやつてゐるうちに情

に激し、我を忘れて口説くと、金のいらぬことならお望みに應じませうといふ。さすがの一代女もすつかりむくれてとつおいつしてゐると、折からすき間風でともし火が消えたのをさいはひ、青年は一代女に抱きついて腰のあたりをなでながら、そなた百までといい氣なことをいふので、「おかしや命しらずめ、をのれ九十九までおくべきか、さいぜんの云分もにくし、一年立たぬうちに杖突かせて、おとがひほそらせて、うき世の隙を明けん」と晝夜の分ちもなくたはむれかけて、案の如く一年もたたぬ間に醫者もみはなす身にしてのけた。

まじめに生きようとしても、その性情や肉體がそれをゆるさない一代女の顚落の必然性を語るとともに、必ずしも愛情によらず、憎惡によつても燃え上るふしぎな愛慾の生態を描いてゐるのであるが、西鶴はまた他の章において、世にも率直に肉體を見すゑ、その狂暴な意志を描いてゐる。

ある時また平穩をねがふ一代女は武家に裁縫師として住みこみ、女ばかりの靜かな暮しをつづけてゐたが、ある日若殿の下着の仕立がまはつてきた。何氣なくその裏地を見ると、菱川の筆で生けるが如く男女交歡の圖が描いてあつたので、たちまち上氣して殿心が起り、小袖など縫ふことはほかにしてうかうかと思ひ暮し、その夜はまんじりともせず獨寢の床でこし方ゆく末を思ひまどふのであつた。

仔細ありて思ひ出すほどの男も、數ふるにつきず、世には一生の間に男ひとりの外をしらず、

縁なき別れに後夫を求めず無常の別れに出家となり、かく身をかためて愛別離苦のことはりをしる女も有るに、我口惜しきこころざし、今までの事さへかぎりのなきに、是非堪忍。

と、對象のない愛慾の悶えが過去の思ひ出をまさぐつてゐるうちに反省の形をとり、齒をくひしばつてふみとどまらうとするのであつたが、しかし夜が明けると肉體はそれを無視して對象を求め、行動を開始するのである。朝の身じまひを終へて、手洗の水をすてようとすると、窓の外で長屋住ひの仲間が小用をたしてゐる。そのたくましい排泄作用を見てゐるうちに一代女の肉體の決意は動かすべからざるものとなり、屋敷をさまよひ出てただもうそれだけの目的で相手をえらばぬ淪落の女と身をもちくづして行くのである。

すくなくとも「五人女」までの西鶴は、愛情と性慾を不即不離のものとして描いてゐるのであるが、ここではもはや愛情の一かけらもない性慾それ自體を描いてゐるのである。平穩をねがひ、貞潔を思ふ意志もモラルもけとばして、一塊の生殖器となり下つた一代女、輕蔑されようと罵られようと、平然として命ある限りただ一つの目的に向つて驀進する情慾の狂態を、西鶴はぢつと見すゑてゐるのである。

たくましい肉體を持ち、その肉體の命ずるままに血なまぐさい生活をエンジョイする一代女にとつて恐るべきは、ただ一つ肉體がその機能を停止する時以外にはありえない。しかもその恐るべき

時は、徐々にしかも確實に訪れつつあつた。その皮膚が艶と彈力を失ふにしたがつて、その職場も下落し、つひには賣物にならなくなつた身を昔つとめた大阪新町の廓によせ、逆に遊女をとりしまる遣手婆となつたが、豊富な體驗に物をいはせて女たちの隱し事をあばき立てて金錢をむさぼるので、次第に憎まれて居たたまれず、畫さへ蝙蝠のとぶ裏長屋に孤獨な敗殘の身を横たへたのであつた。

一枚の着物も賣りたえて、棚板をくだいて薪とし、素湯に煎豆でしのぐ夜の雨に、人のおそれる神鳴がなり渡る時、ゆく年もはや六十五の惜しからぬ肉體をそれに打たれて死にたいと思ひ、浮世にあきはてた今といふ今、おのづと樂しかつた過去に思ひをはせてゐると、一生の間に墮胎した數しれぬ水子の幻があらはれた。えなをかぶり腰より下は血にそんだ姿でうらみ泣くのである。だがしかしそれさへ一代女にとつては懺悔の種となりえず、「無事にそだて見ばめでたかるべきものを」となつかしがつてゐるのである。魂の痛苦よりも、ただたださういふ機能を失つた肉體の痛苦にたへず、いよいよ世も限りと思ひ定めたが、夜が明けると死灰の如き肉體にも生氣がよみがへつて、「つれなや命の捨てがたく」思はれるのであつた。その裏長屋は夜鷹の巣窟だつたので、すすめられるままに「くはで死するかなしさよりは」と、夜もすがら霜夜の橋々を渡り歩いたが、たれ一人として問ひよるものはなかつた。

愛慾と生活が歩調を合せてゐた時は、まだまだしあはせであつたが、愛慾の炎が消え失せてうらぶれた肉體を鞭うち、まつたく一食のために霜夜の巷に立ち、しかも何物をも與へられない一代女の姿は、すでにこの世のものではない。當然「これを浮世の色勤めのおさめ」と思ひ切るのであるが、肉體をよすがに生きてきた一代女にとつてこの斷念は人生への訣別を意味するものであつた。

それにつけても後生を願ふこそまことなれと、近くの僧院を訪れるのであつたが、それはしかし一代女の常識が世のならはしに從つたまでで、必至の求道ざんげの姿ではない。であるからのんきに念佛などとなへながら境内にある五百羅漢の堂をのぞき、

是程多き事なれば、必ずおもひ當る人の顏ある物ぞと語り傳へし。さもあるべきと氣をつけて見しに、すぎにしころ我女ざかりに枕ならべし男に、まざまざと生きうつしなる面影あり。

と、樂しかつた昔の思ひ出にふけるのである。それにしても何とまあ羅漢たちは昔の男に似たことであらう。折も折、時も時、なつかしくも血なまぐさい過去を眼前につきつけられて、「さても勤めの女ほど我身ながらおそるしきものなし。一生の男かず萬人にあまり身はひとつを今に、世に長生の恥なれや淺ましし」と、それは人間のみにゆるされた慟哭であつた。もつとも注目すべきことは、怒濤のごとき悔恨につつまれた一代女の前に寺院はその存在意義を失ひ、僧侶もまた路傍の人にすぎず、ただその全身全靈をゆさぶる慟哭のみが一代女を洗ひきよめてゐるといふことである。

前作「五人女」において、本能とモラルの調和を企圖しながら、その不可能を見てとつた西鶴は、モラルをじうりんしてはばからない女性の強烈な自我や本能をふしぎな情熱をもつて追求し、まもなくさうした女性の典型としての一代女を創造した。しかし西鶴は性慾を唯一の力強いものとして人生を解釋しようとしたのではない。西鶴が「一代女」において追求した本能は、モラルもまたその權威を失墜しなければならないほどに強力なるものであつたが、しかしそれとともに西鶴は、そのやうに狂暴な本能でさへも、肉體の凋落とともに跡方もなく消え失せるといふまがふ方なき眞實をすなほに語つてゐるのである。

「一代女」によつて西鶴がえたものは多い。男女間の幸禍の場であると信じてきたその同じ肉體が、不幸の場でもありうるといふ平凡な、しかし動かしがたい眞實を把握するとともに、その肉體の有限性を確認し、「一代男」以來うたひつづけてきた永遠なる青春の歌に修正を加へてゐるのである。肯定と否定をのりこえて本能の正體を把握した「一代女」が、西鶴の愛慾小說の最後の作品となつたことは當然といはなければならない。このゆるぎなき人間觀の上に立つてはじめて西鶴晩年のきびしい町人物の世界が展開するのである。肉體を描くことが目的なのではない。描くことによつて人間の正體を把握することが作家の目的なのである。このことなくして描かれた人生は、砂上の樓閣にひとしいことを思ひしるべきである。(二十二・四)

西鶴の無感傷性

——說話文學について——

西鶴の無感傷性といふことは、今日ではもはや一つの常識となつてゐる。どのやうに美しいものに立ちむかつても、どのやうな人生の深淵に對しても、感動して上づつたり面をそむけたりしないで、まじまじと見すゑて描く文學態度を意味するのであるならば、古今東西を通じて現實主義的な作家に共通の性格であるから、とくに問題にするにはあたらない。それにもかかはらずとくに西鶴の無感傷性がいはれるのは、西鶴のさういふ傾向がけたはづれてゐるからにちがひない。

西鶴の無感傷性はもとより彼の全作品を通じて指摘しうる傾向であるが、とくに非情な金錢の生態を描いた晩年の町人物についていはれる場合が多い。

私たちは彼の町人物の中で取扱はれたあの豊富な人間事の種々相に先づ驚歎する。貧乏と云つてよいか、圖太いと云つてよいか誠に強い魂で以てあらゆる現象を氣怯れせず捉へてゐる。あら

ゆる俗悪事にそれが現實である限りは眼をそらさず、むしろ悦んで汝入してゐる風が見える。と武田鱗太郎がいつてをるし、正宗白鳥も「少くも現代の文學意識のある作家は理想主義や詩的空想を脱却して、金そのものを、それがある如くに書くことは出來まい」と、町人物における西鶴の無感傷性を強調してゐる。「一代女」に傾倒した田山花袋でさへも、詩のない金を描いて眞に達してゐると驚歎してゐるくらゐであるから、まづ衆目は町人物にそそがれてゐるといつていい。ところがここに志賀直哉一人は初期の作品の一つである「本朝二十不孝」の無感傷性に感歎してゐる。餘人ならばしらず、大正、昭和の文壇を通じてもつとも冷徹なレアリストとされてゐる志賀直哉であるだけに、その感歎は見すごしがたいものとなつて、よく西鶴の無感傷性の證據として引用されてゐる。志賀直哉を感歎せしめた「二十不孝」の無感傷性、あきらかに晩年の町人物のそれとは性格をことにするはずの「二十不孝」の無感傷性を私は考へてみたいのである。

「本朝二十不孝」は、貞享三年六月刊の「一代女」につづく同年十一月刊の作品である。その序に、

雪中の笋八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり、世に天性の外祈らずとも先〳〵の家業をなし、祿を以て萬物を調へ、教を盡せる人常也、此常の人稀にして惡人多し。

とあるが、雪中の笋云々といふのは、いふまでもなく支那の二十四孝の中の物語で、天の感應によ

つて雪中に竹の子をえた孟宗と、鯉魚を與へられた姜詩の二孝子をいふのである。二十四孝は室町時代に和譯されて以來、ことに儒教を信奉することになつた德川時代に入ると、軌範的な存在となり、「孝行物語」（萬治三年）、「親子物語」（寛文三年）、「日本二十四孝」（同五年）などいふ西鶴以前の物語は、すべて二十四孝の飜譯ないし飜案物であつた。二十四孝をそのままに、相も變らず奇蹟を語りつづけてゐる傳統的物語類に對して、西鶴はすでに奇蹟の存在しなくなつた近世的な立場から批判を加へ、町人社會における孝行は親譲りの家業をはげんで儲けた金で親の望みをかなへてやればよいのだといふ、さらに奇蹟など頼む必要のない孝行の現實的營爲について語つてゐるのであるが、しかしここまでは西鶴の思考といふよりはむしろ、當代町人の思考を西鶴が代辯してゐるのだといつてよからう。「二十不孝」が文學であるためには、どうしても「此常の人稀にして惡人多し」といふ續く觀照の一句を必要とするのである。さうして、かういふ對象なり態度なりは、やはり先行の諸作品、なかんづく「一代女」との關聯において考へるべきであらう。

「一代男」の世之介は十九歳で勘當されてゐるし、「二代男」の中にも遊びすごして久離切られた若者が二三ならずあつた。また「五人女」の清十郎も勘當されてゐるし、吉三郎、源五兵衛、お夏、お七、おまんまで、その目で見ればみな勘當の有資格者である。だが、すくなくとも「五人女」の頃までは、さういふ愛慾の花さく世界こそ人間解放の場として肯定的に描いてきたのであるから、

とくに不孝の條件としてかへりみられることがなかつたが、みづからの信奉して來た本能主義の決定的な敗北、肉體的悅樂の限界を描いた「一代女」の境地をへてのち、あらためてかへりみれば、必然的に「此常の人稀にして惡人多し」といふ結論を持たざるをえなかつたであらう。

かく見てくると、「二十不孝」はいかにも他奇ない作品のやうに思はれてくるが、しかしやや距離をおいて眺めると、「一代男」以來精一ぱいうたひ續けて來た愛慾の世界と訣別し、はじめて不孝といふ人生の否定的な條件に立向つたといふ意味において劃期的な位置を占めてゐるし、これを文學史の上にうかべて見ても、親子の關係を肯定的な面において倫理的にしか描くことのできなかつた二十四孝的傳統に對して、たしかにエポック・メエーキングな存在である。だが、あまりにもあきらかに、劃期的であるから文學的に優れてゐるであらうとはいひえないのである。

彼は二三日前、お榮から日本の小說家では何んといふ人が偉いんですか、ときかれた時、西鶴といふ人ですと答へた。さういつたのは、丁度その前讀んだ二十不孝の最初の二つに彼は悉く感服して居たからであつた。それは餘りにと言ふ程徹底してゐた。病的といふ方が本統かも知れない。彼は若し自分が書くとすれば、あゝ無反省に慘酷な氣持を押し通して行く事は如何に作り物としても出來ないと考へた。親不孝の條件になる事を竝べ立てゝ書く事は出來るとしても、それをあの强い

リズムで一貫さす事は却々出來る事ではないと思つた。……で、實際西鶴には變な圖太さがある。

「暗夜行路」前篇の中の一節であるが、志賀直哉をして、このやうな言をなさしめた二十不孝の最初の短篇、卷一の一「今の都も世は借物」の話はかうである。

主人公篠六は、京室町三條の歴々の當主であつたが、若氣のいたりで七年このかたに讓りうけた金銀を遊蕩につかひ果たし、隱居の親仁の財産に手をつけることもならず、惡所金を借出す世話をする長崎屋傳九郎といふ男を賴み「死一倍」で千兩を借り出すことになつた。死一倍といふ借金の方法は、年々の利息は利息として「金子千兩かりて、其親相果つると三日がうちにても二千兩にてかへす」といふ親の壽命を賭當にした壯烈なものであるから、貸す方でも念を入れて親の壽命を目利する。それを何とか言ひくるめていよいよ借りる段になると、

手形は二千兩の預りにして、小判一兩月一匁の算用に、一年の利金ばかりかしらに取るなり。千兩の二百兩引て八百兩にて渡しける。此內借次の長崎屋世並にて百兩取てしめ、手代への禮とて二百兩とられ、相判に家屋敷の有る人賴みしに、此二人に判代とて利なしに二百兩かられ、此程此事に入用銀とてとられ、此座に居賃と云ふ人もあり、大分事首尾してお祝ともらはれ、はらりと切りほどきて千兩の物を手取は四百六十五兩。

といふことになり、それもその夜の中にたまつた色宿の借錢に拂つてしまひ、あとは親仁の死ぬの

を待つうちに、ある日親仁がめまひをおこして倒れたので、かねて用意の毒藥を氣付と稱し、口移しにしようとして覺えず嚙みくだき、忽ち毒にあたつて死んでしまふのである。

この短篇において注目すべきは、自分のしてゐる事の怖しさに死ぬまで氣付かぬ主人公の親不孝さ加減よりも、さういふ、いはば單純な金に詰つた金持の息子の弱味につけこむ「死一倍」といふ人倫を絶した元祿の社會惡の描寫の方が戰慄に價するといふことである。しかもさういふ戰慄に價する社會惡を平然と語り續ける西鶴の神經の太さに近代人の志賀氏が參つたのだと思ふが、その圖太さはまた死一倍を時にとつての便法として暗に許容してゐた元祿上方町人一般のものでもあつた。であるから一應志賀氏の驚歎は文學以前の、すなはち學習院出身と町人出身の宿命的なセンスの相違にもとづくものだといふ見解も決して間違つてゐないのである。しかし、もしそれだけのことだとすると、志賀氏自身もさう思つてゐたのだとすると、日本の小說家の中で一番偉い西鶴といふ志賀氏の言葉を素直に受取ることはできない。自分が意志的に戰ひとつたより以上のものを素質として無雜作に持合はしてゐることに對する、きはめてイロニッシュな言葉といふことになるのだが、志賀氏の作家的誠實さ、ことに「暗夜行路」のまつとうさから見てさうは思へないのである。

イロニッシュにでなくすなほに志賀氏は手をあげてゐるのだとして見ると、これは同じレアリストであるとはいひながら、私小說的レアリズムのきびしさの只中にあつた志賀氏が、私小說的精

神の闕如からくる「二十不孝」の無感傷性を、正直にも自分の立場に引寄せて感歎してゐるのだとしか思はれない。ああ、とうとう私は「二十不孝」におけるレアリズムの正體をつかむことができた。文學以前の町人的な圖太さを前提として、私小說的精神の闕如からくる無感傷性、それである。

「一代男」以下の愛慾小說「日本永代藏」以下の晩年の町人物は、樣式の上からいへば「二十不孝」と同樣に私小說ではないが、しかし西鶴はそこで作中の人間たちと歡びをわかち、またともに不如意なる人生を苦しんでゐるのである。いはば私小說的精神をもつて書かれた本格小說であつた。ところが「二十不孝」ではさうした態度を見ることができない。西鶴は彼の眼前にあふれてゐる不孝の條件を蒐集し、それを適宜に組合はせ、配置して、ひたすらに不孝といふテーマを强調してゐるのである。であるからそれはいかにも拔きさしならないものとして描かれ、主人公たちはまるで不孝を唯一の目的として生きてゐるかの如くである。すべての主人公に非業の最後を與へてゐるのは、もとよりさうした行爲を憎む心からであらうが、それにしても最後の瞬間まで誰一人として反省しようとせず、したがつて苦しんでゐないのは、要するに西鶴が讀者とともに物語の外にゐるからである。そこから來る冷淡さ、突つこみの足りなさが、志賀氏を驚歎せしめた强引さにもかかはらず、私をして二十不孝を高く買はしめないのである。

とはいふものの、「二十不孝」を一がいに拾て去ることも私にはできない。たしかに「一代女」

以前の諸作品には求められない新しい世界が開拓されてゐるからである。すでに例にあげた卷一の「今の都も世は借物」の章においても見られるが、不孝といふテーマを通じて町人社會における金錢のデモニッシュな在り方に肉迫してゐる例が多いのである。卷二の「旅行の暮の僧にも候」の一篇は、さり氣なく、しかし鋭く斬りこんだ適例であらう。

雪こん〳〵や霰こん〳〵と、里の小娘たちが松の木陰に集つて夕暮を惜んでゐる所へ、息も絶えだえになつた熊野參詣の旅僧がやつて來た。娘らが皆おそれて逃げ歸つた中に、小吟といふ九つの娘はおとなしく、出家をはげまして我が家へ案内した。兩親も小吟のやさしい志を思ひやつてもてなしたので、旅僧は間もなく元氣を取戻し、夜を籠めて立別れて行つた。そのあとで、「今の坊樣はふろ敷包みの中に小判のかさたかく革袋に入させ給ふを見付たり。おひとりなれば人のしる事にもあらす、殺して金を取給へ」といふ娘の言葉に思ひがけない欲心が起り、親仁は枕鑓をひつさげて跡を慕ひ、出家を殺して小判を奪ふのであるが、そこで西鶴は言つてゐる。

いまだ此むすめ九歳の分としてかゝる事を親にすゝめけるは惡人なり。殊更熊野の山家なれば、干鯛も木になる物やら、傘も何の爲になる物をもしらざる所に、小判といふ物見しりけるも不思議なり。

自分で書いておいて不思議なりもないものである。西鶴はあきらかに金錢を人の命よりも尊いも

のとする上昇期町人社會におけるバチルスの如き風潮の上に、この不孝物語を組立ててゐるのである。不孝といふ背德行爲をあへてなさしむる町人社會における金錢の暴威を、右のやうに暗示的にでなく眞正面から取上げた作品としては、同じく卷二の四「親子五人仍書置如ㇾ件」の一章をあげることができる。

駿河呉服町二丁目の分限者虎屋善左衞門は、臨終に際して惣領の善右衞門、二男の善助、三男の善吉、四男の善八四子をよび寄せ、この家は外見には五萬兩もあるやうに見えようが、あり金はやうやく二千兩にすぎぬ。家屋敷は善右衞門に讓るが、二千兩は四人に等分にわけて讓らう。それにつけて商人は世間の外聞が大事ゆゑ、ありもせぬ金ながら八千兩にして一人に二千兩づつと書置しておかうと遺言し、間もなく亡くなつた。ところが七日も經たぬうちに二男の善助が惡心を起し、あり金二千兩とは善右衞門が親仁に言はせたに違ひない、書置を證據に二千兩づつ受取れと善吉・善八を語らつて善右衞門に迫つた。善右衞門は萬策つき、親の惡名をあらはすよりはと亡父の墓前で腹を切つて死んだ。三人の弟は氣狂ひ沙汰といひなしてすまし、藏にかけつけて吟味したが二千兩よりほかにないのでそこら中を探しまはり、その夜は藏の中の金箱の前に臥した。その夜、善右衞門は女房の夢枕に立つて仔細を告げたので、女房は憤りをおさへかね、長刀をとつて藏にかけ込み三人を斬伏せ、二歳になる男子に止めをさせ、その身も自害して果てた。

三人の兄弟が亡父の志を無にし、その名をはづかしめたといふ點から見れば、不孝物語の名に背かないが、しかし作家の意圖とは別に、この作品のテーマは金錢に憑かれた町人社會の悲劇であるといつても差支へないのである。それといひこれといひ、今や私が指摘するまでもなく、西鶴が意識すると否とにかかはらず、人間としてまた作家として眞に生甲斐のある世界へ踏みこんだ「日本永代藏」以下の町人物の第一歩がここにはじまつてゐるといつてよからう。

しかしながら西鶴は二十不孝より三月目、翌貞享四年正月にはたぐひまれなる唯美の文學「男色大鑑」を、同年四月には武家社會の復讐を取扱つた「武道傳來記」を、さらに翌元祿元年二月には「武家義理物語」をと、まるでテーマも對象も異なる作品を發表してゐるのである。せつかく踏み出してをきながら、何が故の足ぶみであらうか。つまるところ私小說的精神の闕如にありと私は思ふのである。

二十不孝に散見する町人物的なるテーマなり題材なりは、あらかじめ用意された不孝といふテーマに從つて現實を模索してゐるうちに、やがては町人物を書くべき西鶴の作家的素質がそれと意識せずに把握したものであつた。であるからそれは悲しいことに不孝の條件として以上の意味を與へられてゐない。西鶴はけつして、そのやうに町人たちを惡へ驅り立てる金錢のデモニッシュな存在を憤ることもなく、また悲しんでもゐないのである。それはただ說話的契機によつて現象的に把握

されてゐるにすぎない。そこに西鶴が町人物へのよき志向を示しながら、足ぶみせざるをえなかつた所以のものがあるのである。

すくなくとも「一代男」以來「一代女」まで、嬉しいにつけ悲しいにつけ西鶴の心は作中の人物と通ふところがあつた。しかも「二十不孝」のテーマは「一代女」から心然的に導き出されたものであるにもかかはらず、打つて變つた冷淡な態度をとつたについては、そこにそれだけの理由がなくてはならない。それはこの作品がまへの年、貞享二年正月刊の典型的な說話文學「西鶴諸國ばなし」の血を引いてゐるからであると私は考へる。

「西鶴諸國ばなし」は、一名を「大下馬」ともいふ。「大下馬」とは江戸城大手門外の下馬所の義であるが、これをとつてまたの名としたのは、この作のスタイルが前年四月刊の「二代男」で借用した中世の說話文學「宇治拾遺物語」につながるものであるからである。「宇治拾遺物語」またの名「今昔物語」は、權大納言隆國が宇治の別莊で往來の旅人の足をとどめて聞いた話をまとめたものであるといふ傳說をともなつてゐる。西鶴は「二代男」に用ひたその說話文學のスタイルを再び用ひたので、さてこそ日本國中の人を下馬せしめて聞いた物語といふこころで「大下馬」と稱したのであつた。

「宇治拾遺物語」以來、說話文學は日本文學史上の一系譜となつてゐるが、とくに諸國間の交通の閉ざされてゐた中世の分權的封建社會から、近世の中央集權的封建社會に移行すると、商業の自由、ひいては諸國間の交通が開放された結果、未知なる國々に對する知的な興味が一世を支配し、たとへば「東海道名所記」(萬治)のやうな趣味と實用をかねた名所記を生む一方、傳統は再びよみがへつて「御伽物語」(萬治)「伽婢子」(寛文)「新御伽婢子」(天和)等の、諸國の怪異奇談を集めた說話文學が續出し、「西鶴諸國ばなし」の出た年にも「宗祇諸國物語」「長明寢覺物語」などが出てゐるほどである。

西鶴に諸國咄を書かしめたこの時代の力は、しかも一二の作品の上にとどまるものではなかつた。處女作「一代男」をはじめとして、絕筆「置土產」にいたるまで、思へば諸國咄的スタイルの上に成り立つてゐるのである。「一代男」のやうに、よしんば一代記のスタイルをとつてゐようとも、それは全國の商業都市を舞臺として展開せざるをえなかつた。全國を舞臺としていちはやく活動を開始した上方の上昇期資本經濟の要請に、その地の町人作家西鶴が身をもつて答へてゐるのである。

このやうに見てくると「西鶴諸國ばなし」は、彼の生涯を支配した宿命的なスタイルの生々しい露頭であるといふことになるのであるが、しかしながらこの素朴な題材主義の作品が、幅も深みもある「二代男」に續いてあらはれたについては、ただそのスタイルの上のつながりを指摘しただけ

では十分でない。なぜならば、この二作の間に西鶴は一晝夜二萬三千五百句獨吟といふ文學的暴行を敢行しておるからである。

一晝夜に二萬三千五百句といふと、假に飲み食ひもせずにその事に沒頭したとしても、一句に與へられた持時間は平均四秒たらずといふことになる。たとへそれが十四音と十七音を單位とする世界最短の詩型であらうとも、わづか四秒づつでは對象に沈潛し、燃燒しうるはずがない。もともと西鶴一派の俳諧は、餘情よりも題材の興味を主とする風俗詩なのであるから、さうした傾向がこの極端な時間的制約を課せられた結果は、いよいよ叙事的にならざるをえない。西鶴がこの時、諸國の人の集まる大阪で、または旅先で、あるひは文書によつて見聞した彼の記憶にとどまる一さいの興味ある世相、しくは說話を、ほとんど生のままで羅列したであらうことは察するに難くないのである。

これがその作品さへ殘つてをれば察したりしなくともよいのであるが、親しかつた其角なども當日江戸から來合はせて後見を賴まれ、「蹼の步み二萬句の蠅あふぎけり」といふ句を自撰句集の「五元集」に殘してゐたり、その他たしかな證據はいくらでもあげられるにもかかはらず、作品が殘つてゐない。速記術がなかつたとすると、餘りの速吟に執筆が句を書留めるひまがなく、ただ紙上に棒を引いて句數だけを記錄したといふ傳へ（五文臺）が實狀であり、したがつて作品も殘らないわ

けである。だがしかし、その作品は殘つてゐなくとも、四年前の延寶八年に一句平均二十一秒の持時間で行つた獨吟四千句（刊本・大矢數）の存在によつて、だいたいの想定が可能なのである。要するに二萬三千五百句獨吟といふ神を恐れざる文學的暴行の當然のむくひとして、西鶴の上に訪れた荒涼たる文學精神が母胎となつて、非情なる説話文學「西鶴諸國ばなし」が生れ出でたのであるといふ事實を知ればよいのである。なほその上に、時を同じくして、かねて大阪出版界に對抗して京都の出版界を牛耳つてゐた版元西村市郎右衛門方から、まつたく同じ企畫の「宗祇諸國物語」が出てゐるところから見て、西鶴自身の創作動機のほかに、出版ジャーナリズムの策動がはたらいてゐたこともみのがせない。

このやうに、どこから見ても好ましからざる動機によつて成立した「西鶴諸國ばなし」であるが、さすがに説話文學史上においては群を拔いてをり、西鶴的色彩はあざやかなものである。その序にいふ。

世間の廣き事國〳〵を見めぐりてはなしの種をもとめぬ。熊野の奥には湯の中にひれふる魚有、鈴前の國にはひとつをさし荷ひの大蕪有、豐後の大竹は手桶となり、わかさの國に二百餘歲のしろびくにのすめり。……都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり、是をおもふに人はばけもの、世にない物はなし。

西鶴はまた元祿元年刊の「好色盛衰記」卷一で、「黑衣を着すれば出家、烏帽子しらほり着すれば神主、長劍させば侍と成、世に人ほど化物はなし」といつてゐるが、この超自然的な怪異奇談を主として取扱つてゐる「諸國ばなし」においても、千變萬化する生きた人間に對する限りなき興味別な言葉でいへば現實主義的な態度を失つてゐないのである。

當然、超自然的題材に交つて、人間のかもし出す異常にして感動的な物語が取上げられてゐる。卷四「忍び扇の長歌」の女主人公が身をもつて語る反封建的な戀愛のモラルもそれであれば、眞山青果氏の戲曲「小判十一兩」(市川左團次一座所演)の原話となつた、貧しい武士たちのいさぎよい交りを描いて快適な卷一の「大晦日はあはぬ算用」の一篇もそれである。ところがそれらにくらべると、說話的興味ないしは構成において比較にならないが、卷四の「力なしの大佛」の一篇は、西鶴の人間觀が端的に語られてゐるといふ意味において注目に價しよう。

山城の國下鳥羽の車曳に、大佛の孫七といふ大男があつたが、すこしも力がなくて一斗の重さを片手で上げることがならず、世間の笑ひ物になつてゐた。無念に思つて暮すうちに、男の子が一人できたので、大人しくなるのを待兼ねて歩き出しの時分から六尺棒を持ちならはせ、三つの時にはもはや一斗の米を持上げるほどになつた。それから段々に仕込み、八つの春のころ飼牛が子を生んだのをあてがつたところが、何の苦もなくかついだので、それから毎日三度づつかつがせてゐる中に、

牛は成長して車を曳くほどになつたが、そもそもから扱ひつけてゐるので、九つの時にも捉へて中差しにしたといふのである。

單純な說話であるが、ここに人間の力を信じ、可能を信じて疑はない「代男」以來の西鶴のつらだましひを見てとることができるのであり、そしてそれはまた「晝夜に二萬三千五百句獨吟」といふ打算を越えた超人的な仕事をやつてのけた精神に通ずるものであらう。かうした態度で立向ふ以上、超自然的題材もしよせんは否定的に、人間の力の前に慣伏するものとしてユーモラスに扱はれざるをえなかつた。卷一「傘の御詫宣」などはその適例である。

紀州掛作の觀音には、昔から諸人のために無料の貸傘が二十本掛けてあつた。慶安二年の春、里人がこれを借りて和歌吹上にさしかかつた時、どつと吹き起つた神風に卷きあげられて、肥後の國の奥山の穴里といふ部落に舞ひ落ちた。ところがこの里ではかつて傘といふものを見たことがなかつたので、どこかの御神體であらうと恐れをなし、ほどなく宮居を造進してあがめるに從ひ、傘に性根が入つてある時社壇がしきりに鳴り出した。御詫宣を伺ふと、美しい娘を供へねば七日の間車軸を流して人種を絶やさんといふことであつた。里人は驚いて指折の娘を集めて見たがもちろん志願者はない。時に色よい未亡人がすすんで引きうけ、宮居に夜もすがら待つたが何の情もないので腹を立て、內陣にかけ上つてかの傘をにぎり、見かけによらぬいくじなし奴とさんざんに引き破つ

てすてたといふのである。

紀州掛作觀音の貸傘が、肥後の國まで吹きとばされたといふほどの珍事はあつたのであらう。それをこんな話に仕立てたのはもとより西鶴の作意にちがひない。非情の傘に性根を入れたのも人間の仕業なれば、それにあへない最後をとげさせたのも人間の力（未亡人の旺盛なる性慾）であるとする解決の前に、超自然的なるものは全然その神祕性を失ひ、逆に笑ひを提供する結果となつてゐるのである。

人間すなはち現實を肯定するところから生ずる「諸國ばなし」のこの樂天的なあかるい性格ならびに題材の興味を主とする說話文學的性格は、いふまでもなく二萬句獨吟によつて頂點に達した餘技的な談林俳諧の性格なのである。「本朝二十不孝」の無感傷性は、前作「一代女」の否定的精神を受けつぐ一方、ただ說話的契機によつて現象的に人間關係を追求するにとどまる「諸國ばなし」の說話文學的性格を受けついだ結果にほかならない。それはけつして晩年の町人物におけるが如く、または近代作家におけるが如く、自己とのたたかひのうちに結晶した無感傷性ではないのである。上昇期町人としての性格的な圖太さに加ふるに、元來非情なる說話文學的性格をもつてしたところに、志賀直哉を驚歎せしめた「二十不孝」の無感傷性が形成されたのである。（十七・十）

西鶴の唯美主義的傾向について

1

バルザックには何でもあるといはれてゐるが、それは現實を思想の糧として未知の世界を祈念してやまない作家についての言であらう。もしさう解してあやまりがないならば、私は日本のバルザックとして西鶴を推すにちうちよしない。

西鶴にいはゆる三變がある。初期の愛慾小說、中頃の武家物、晩年の町人物である。がそれは對象の變化を意味するのみであつて、あへて本質にかかはらない。もし本質的にあげつらふとすれば、自然主義の一語につきるのであらう。

中世的な佛教の彼岸思想、およびその斯岸的なる性格の故に近世社會の指導理念となつたが、それ故にまたあくまでも軌範的な儒教思想に馴致されながらも、貨幣の支持を受けて感性的な面に人間の開放を意慾した上方町人を讀者とし、また彼自身がそのやうな町人の一員である以上、その文

學は反宗教的な自然主義的傾向をたどらざるをえなかつた。

餘情を主體とする王朝中世の唯美主義的貴族文學に對して、卽物的な、時に猥雜・醜惡の中に人間の正體を見ようとする作家西鶴にむかつて、唯美主義よばはりはいささか事を構へすぎるかに見えよう。

けれども文學なるものがそもそも、その時代の文化の美的結晶であるといふことに間違ひがないならば、いかに自然主義的であるとはいへ、その文學が、その作家が、美なるものに對して無關心であり得るはずはないのである。まして西鶴は俳人であつた。餘情を愛することを知らない上方町人に支持されただけあつて、それは風俗をうたふ敍事詩であつたが、とにかく美への獻身を誓ふ詩人として出發した人なのである。

だからその處女作「一代男」を見給へ。いかに西鶴が美なるものを讃美し、醜なるものを指彈してゐることか。卷五の「後は樣つけて呼ぶ」の章における情姿教養に缺くるところのない太夫吉野への傾倒や、卷六「寢覺の菜好」における遊女の食好みに對する嘲笑などは單に一例にすぎない。「一代男」は西鶴のといふよりは、青春期の上方町人の潔癖な美意識によつて貫かれてゐるといつてよいのである。

しかしながら私のテーマは「一代男」にかかはるものではない。なぜならば、「一代男」の美意識

は理念として把握されたものではなく、西鶴を通じてあらはれた强烈な時代の要求、反映としてのものであるからである。たとへそれが鏡花的に終生の理念として把持されたものでなくとも、唯美主義といふ言葉を使用するからには、理念にまで昂揚された美意識によつて支へられた作品でなければならぬ。

ところが西鶴の艶美的傾向は、「一代男」から「二代男」「五人女」「一代女」と進むにつれて、徐々にではあるが減退の一途をたどつてゐるやうである。必ずしも醜を醜として指彈しない、それもまた避くべからざる人生の相として靜かに眺めようとしてゐるのである。さうしてそのやうな傾向は、西鶴の初期を劃する愛慾小說掉尾の作品「一女代」(貞享三年六月)に至つてきはまれりといふべきであらう。

それにもかかはらず私は、その愛慾に參ずる點において「一代女」に續き、その精神および題材において武家物に接する「本朝若風俗」(貞享四年正月)に西鶴の唯美主義的態度を見ようとするのである。

「本朝若風俗」正しくは「男色大鑑」といふ。前半四卷は武家に關し、後半四卷は町人社會に地盤を置く歌舞伎の世界を對象とする。この男性間の慕情をテーマとした比類のないユニークな文學の唯美主義的性格を評論するに際して、私はまづ男女間のノルマルな愛慾を對象として次第に散文

化しつつあつた西鶴が、何故に突如としてそのやうな題材を取上ぐるに至つたかについて一言すべきであらう。

2

兵馬倥偬の間における武士の寵童、婦女子との交りを斷たれた僧房の稚兒若衆、およそ中世における男色の存在意義はいはずしてあきらかである。

時代を接する以上、近世社會にその習俗が傳はつたこともまた當然で、支配權を確立した武家の嗜好にリードされて、若衆歌舞伎も新興の町人層に地盤を求めて繁榮した。

注意すべきことは德川時代に入つて減退した中世の實際的要求をカヴァーすべく、極度に美意識が高まつてゐるといふことである。西鶴が「一代男」で「浮世の介こざかしきこと十歳の翁と申すべきか。もと生れつき麗はしく、若道の嗜み、其頃下坂小八がかりとて、髮切して立懸に結ふ事時花りけるに、其面影情らしく、よきと譽むる人のあらば只は通らじと常々心を磨きつれども……」といつてゐるやうに、あへて媚を賣る若衆歌舞伎に限らず、武家の子弟はもとより一般町家の子弟まで、我と思はん程の者はすすんで裝ひをこらし、意氣地を琢いたのであつた。

それがノルマルなものでないことに間違ひはないとしても、德川時代、とくに前期における男性

間の慕情は、近代社會におけるが如きひんしゅくすべき個人的性癖としてのものではなく、普遍的な美意識によつて支へられた習俗としてのものであつたのである。

であるから西鶴が自分のぞくする新興町人階級の「生の歡喜」をテーマとした第一作「一代男」の冒頭で、「色道ふたつに、寢ても覺ても、夢介とかへ名よばれて」と、享樂の對象としてノルマルな男女間の愛慾とともに衆道を擧げたのは當然であつた。卷一「袖の時雨は懸るが幸ひ」においては、十歳の世之介の若衆氣取を描き、卷二「はにふの寢道具」および「出家にならねばならず」、卷五「命捨てゝの光物」の章においては、いづれも成人した世之介の小草履取や歌舞伎子を相手とした若衆狂ひを描いてゐる。

しかしこの題材を見ても知られる通り、「一代男」における衆道は、町人社會の享樂生活の一面として附隨的に導入されたものであつて、「色道ふたつ」とはいひながら西鶴の意はやはり男女間の愛慾の描寫にそそがれてゐるのである。

西鶴のこの態度は、つづく「二代男」「五人女」「一代女」においても變りはない。典型的な遊里文學としての「二代男」、女性を主人公とする「五人女」と「一代女」であつて見れば、題材的にも「一代男」にまして衆道の介在する餘地はありえないのである。それにもかかはらず、「五人女」の卷四と卷五において衆道を取扱つてゐるのは注目に價する。

清十郎、樽屋、茂右衛門、吉三郎、源五兵衛とならべて見ると、この五人女の戀人達の中で、衆道に結びつく必然性をそなへてゐるのは、何といつても寺小姓の吉三郎と薩摩男の源五兵衛であらう。であるから西鶴が卷四と卷五に衆道を介在せしめたのは、これまた「一代男」におけると同樣、題材にリードされたもので、衆道それ自體に對する積極的な企劃性は考へられないのである。

けれども結果から見ると、「一代男」において衆道を町人社會における愛慾の一面として以上に見なかつた西鶴が、「五人女」においては武家社會の習俗として描かざるをえず、とくに卷四においては、お七に先立たれた吉三郎が、兄分を持ちながらお七と契つたことを恥ぢて切腹せんとする扱ひの上に、武家的な衆道の義理と意氣地の精神をのぞかせてゐるのである。

それがはからざる結果であつたとはいへ、「五人女」によつて探りあてた衆道の新しい面に對する興味が、やがて前半四卷に武家社會の衆道を取扱つた翌年正月刊の「本朝若風俗」の執筆動機となつた、と考へることがゆるされるであらう。しかもかやうに考へてくると、貞享三年二月刊の「五人女」に引續いて、同年六月に刊行された愛慾小說掉尾の作品「一代女」の存在がきはめて意味深いものとなつてくるのである。

第一作の「一代男」において、一人の男性の生涯に託し解放された町人階級の青春の氣に滿ちた情意生活を描いた西鶴は、翌々年四月刊の第二作「二代男」においては、別名を「諸艶大鑑」と題

してゐるやうに、列傳の體をもつて遊里に凝集された上層町人の洗煉された情意生活を描いた。さうして一年おいた貞享三年二月刊の「五人女」では各個的に、六月刊の「一代女」では「一代男」におけると同樣集約的に、女性の立場から條件つきで解放された愛慾の歡喜と悲哀とその限界を描いてゐるのである。

初期の西鶴は小說に對してはつきりした自覺を持つてゐなかつた、つまり自分の仕事の將來に對する見通しなどつけずに、意慾のおもむくままに創作していつたと私は考へてゐるが、しかしかうして配列して見ると、そこにおのづからなる發展の法則、といふよりは企畫性を指摘せざるをえないのである。「一代男」と「二代男」に對する「五人女」と「一代女」の配置、とくに最後の作品である「一代女」が、對象・方法の上で第一作の「一代男」に照應してゐる點など、單なる偶然ではありえない。おそらく西鶴は「二代男」執筆の時分はともかく、「五人女」を完成する頃にはすでに「一代女」をもつてノルマルな愛慾小說の最後的作品とすることを豫定してゐたのであり、同時に「五人女」の創作途上において自覺した新しい武家社會の衆道に對する創作意慾を徐々にはぐくんでゐたものと思はれる。

さうした必然的な展開の結果取上げたテーマを形象化するにあたつて、西鶴は昨日までの自分を否定した。

惣じて女の心ざしを、たとへていはゞ、花は咲ながら、藤づるのねじれたるがごとし。若衆は針ありながら、初梅にひとしく、えならぬ匂ひふかし。爰をもつて、おもひわくれば、女を捨男にかたむくべし。……なんぞ好色一代男とで、多くの金銀諸〳〵の女についやしぬ。只遊興は男色ぞかし。

西鶴にして見れば、當面のテーマを強調する以外に他意なかつたのかも知れない。けれどもそれが單なるプロパガンダでなかつたことは、つまり昨日までの自分を否定せずにをられないほどに當面のテーマに傾倒してゐたことは、作品が證明してゐるのである。

＊「本朝若風俗」成立の外部的條件として、「浮世草子目錄」における大久保葩雪氏の「貞享三年好色本禁令說」がある。つまり禁令が出たので西鶴は武家社會の衆道を取上げたのだといふのであるが、かんじんの禁令が明示されてゐない上に、今なほ發見されないので、大久保說はそのままになつてゐるが、私はあらゆる角度から檢討して否定的結論に達した。否定する以上本論には直接關係がないわけであるから、ここでは割愛することにした。

3

「男色大鑑」の前半四卷二十章は、そのほとんどが武家社會の衆道を扱ひ、後半四卷二十章は町人

社會にそぐする歌舞伎子を對象としてゐる。しかも現實の世界においては武士階級と町人階級のほかに、寵童においてもつとも古い歴史を有する僧侶階級が存してゐたのである。今「大鑑」と稱し俯瞰的・總括的に衆道の種々相を描破しようと企圖した西鶴が、何故に僧房の寵童のみを除外したのであらうか。

中世にあつては、實際的にも文藝上においても、その時代の文化の擔當者であつた僧侶階級の手に寵童は專斷されてゐた。ところが德川時代に入ると僧侶階級に代つて政治的には武士階級が、經濟的には町人階級が文化の擔當者として登場した結果、衆道もまた當然この二階級を地盤として榮ゆることになつた。僧房の寵童は、いはば時代の波に取殘された古典的存在だつたわけであるから、常に時代の荒々しい息使ひの中に生きてゐた西鶴の文學的意慾とマッチしなかつたであらうことは察するに難くない。が、なほその上に西鶴が拒否した根本的な理由を、僧房の寵童の非文學性、精神美の闕如にあるものと考へる。

卷三の一「編笠は重ての恨み」の章において西鶴は、叡山根本中堂の阿闍梨の稚兒若衆蘭丸を主人公としてゐるが、しかし阿闍梨との關係において描かうとしたのではなかつた。近江の筑摩祭には、土地の女が關係した男の數だけ鍋をかぶつて參詣するならはしであつたが、その祭禮見物に叡山の若衆達が出かけての歸途、かねて蘭丸に思ひをかけてゐた同じ院内の掛り人井關貞助が、自分

の編笠を蘭丸の笠の上に重ねて、「男も念者の數をかづかす」とどよみをつくつて笑つた。

蘭丸が阿闍梨に寵愛されながら、京の白鷺の清八といふ伊達なる髪結の職人を念者に持つてゐたからである。その時蘭丸はほほゑんで、「それがし師坊の弄びとなる事、是は情の道にはあらず、明暮京より通ふ人こそ我に獨の念者」と、あとは泪に沈んだ。蘭丸はやがて貞助を討つて清八とともに立退くのであるが、要するに西鶴の描かうとしたものは僧房の男色ではなくて、僧房に見出した武士的なる衆道の美であつたのである。

卷二「傘持てもぬるゝ身」における若衆小輪が、命を捨つる、といふ主君の寵愛にこたへて、――御威勢にしたがふ事、衆道の誠にはあらず、やつがれもおそらくは心を琢き、誰人にても執心を懸なば、身に替て念比して、浮世のおもひでに、念者を持てかはゆがりて見たし――と臆せずいひ切つた強い心根と、それをまたせき心になりながら憎からず思ふ主君の心こそ、西鶴の庶幾する衆道の意氣地であり、僧房の蘭丸もその角度から取上げられたのである。

すなはち僧侶と稚兒若衆の關係を、西鶴が蘭丸の口をかりて「是は情の道にはあらず」とおとしめたのは、その世界に權力に屈せず眞の愛情に殉ずる節義がなかつたから、言葉をかへていへば僧房の寵童は嚴重な性的戒律の拔道としてのものに過ぎなかつたからにほかならない。卷六「情の大盃潰膽丸」において、僧侶が野郎の伊藤小太夫を女裝せる舞臺姿のまま呼んで遊ぶ話を書いてゐる

が、これなど僧侶の要求のいかなるものであつたかを端的に物語つてゐよう。であるから西鶴が僧房の寵童を取上げなかつたといふことは、單なる性愛としての衆道の拒否を意味するのであつて、ここに我々は「男色大鑑」における西鶴の文學的態度を見ることができるのである。

しからば西鶴は、本來アブノルマルな衆道のいかなる面を取上げたかといへば、すでに前述の蘭丸や小輪の上に見られる秋霜烈日の如き武士的・男性的節義によつて支へられた精神美であつた。愛慾に參じて愛慾に溺れず、意氣地と義理の强調せられるところに、血に彩られた悲壯なる美の饗宴の數々がくりひろげられてゐるのである。

卷四「待兼しは三年目の命」を見られよ。友人瀨川卯兵衞の若衆菊井松三郎の美しさに執心して無理所望の狀をつけた横山清藏といふ武士が、拒絶されて退かれぬ首尾となり、卯兵衞と和歌の松原で決鬪しようとする。時に清藏がいふには、――松三郎今年は十六歲、衆道の花とは今からする〳〵なり、いかにしても其方が詠めすて、行事ほいなかるべし。今三年待なば前髮もおろし、其時は世に心懸りもあるまじ。三年が間は是を待べし、武士のたがひに申合せし言葉かならず反古にはなさじ。三年過ての今月今日此胸晴すべし――とこころよく後日を約し、松三郎前髮の花散る元服の日を期して、今は親友となつた男二人はものの見事に刺違へて果てた。それと知つた松三郎もかけつけて同じ枯野を朱に染める。

この場合の決闘は、相手をなきものにして利己的な所有慾を滿たさんとする手段ではない。無理を承知で貰ひかけた淸藏も覺悟の上の行爲であれば、卯兵衞の拒絕ももとより死をけつしての上のものである。その時もはや二人は原因の如何にかかはらず、失はれた面目を當事者間において解決せねばならぬ嚴しい階級の習俗に支配されてゐるのである。さうして死によつて結ばれた二つの心がとけ合つて、美をまつたからしめんとする協調を生んだ。しかも豫定された死を前方に凝視しながら、きびしい意地氣と義理の精神はニヒルとデカダンスの跳梁もゆるさない。變態的な衆道はかくして世にも淸潔にして悲壯なる美を盛上げてゐるのである。

川端康成氏の小說に「白い滿月」といふのがある。その中に女一人を爭つて決闘する話がある。男達は海岸でピストルをドンドンと擊合ふと同時に、兩方から飛んで來て、男泣きにおいおいと泣きながら肩を組んで歸つて行つた。——いつたい、女一人を取合つて決闘までしようと思ふ男が、ピストルをたつた一發擊つただけで涙を流して握手するなんて、そんな馬鹿な話があるもんですかそれで向ふはいい氣持になつてるのかしれないけれど、女の身になればたまらないでせう。女性としては生きてゐられない侮辱だわ。——とばその女の姉が長兄に報告する言葉の一節である。

私は何も元祿の西鶴と現代の康成の優劣を論じようとしてゐるのではない。ただ私は「白い滿月」における女のみじめさ、といふよりは女の姉の憤りをもつともだと思ふにつけて、同じテーマに對

する西鶴の態度がいかに唯美主義的であるかをいはうとしてゐるのである。

だがそのやうな美をそのまま後半四卷に求めることはできない。主として町人階級に地盤を有する歌舞伎の世界は、西鶴も「品こそ違へ遊女に同じ」（卷七）といつてゐる通り、商品化された衆道であつたからである。もとよりそれが男性間の慕情である以上、よく雪中の梅花にたとへられてゐる凛然たる意氣地の美が描かれてはゐるが、生きるも死ぬるも金のついてまはる世界のことであつてみれば、しよせん武士的な衆道精神を望むことは無理なのである。

だから後半四卷において西鶴が强調してゐるものは「執心掛しする〳〵の者には人しれぬ情ふかく、數かさなりて世にあらはるゝをいとはず」（卷五）といふ、一身の利害をはなれ、貴賤貧富美醜をこえ、ただ眞情にふれて流露するおほらかな愛情の表現であつた。しかもそれはすでに西鶴が「一代男」や「二代男」において、三都の名妓に求めたところであり、なほ大觀すれば「伊勢」「源氏」以來の、とくに愛情の世界に局限された「物のあはれをしる心」にほかならない。

對象の相違によつて、おのづから求むるところも異なつたのであると一應の解釋はつけても、それですまないのは前半四卷にかつて見られない暴露的態度である。

いかに情なればとて、廿すぐるまで前髪おきて勤めはなるまじきに、野郎なればこそ、三十四五迄も若衆顏をして、人の懷の中へもはいる事ぞと、おかしきは色の道の思はれける。外へは

年をかくし節分の大豆も鯖讀にして、くらがりにて內證は濟せ共、物覺えのつよき見物目が、同じ時の若衆かたは敵役になり、若女かたは祖母方になりしを思ひあはせておどろきぬ。(卷五)

歌舞伎子のもつとも嫌がる年の穿鑿、さては勤のうき苦勞などに、態度の歎美的なるにもかかはらず筆を及ぼしてゐるのである。

かくの如く後半四卷において、西鶴が歎美的態度を徹底せしめえなかつた所以のものを、私は對象と西鶴の親近性にあると考へる。

すでに延寶末年、西鶴みづから筆をとつて大阪三芝居の野郎評判記「難波の貌は伊勢の白粉」を書いてゐるといふ事實から見ても、西鶴と演劇界の關係の深さが知られるが、しかもそれは單なる好劇家の手すさびの類ではなかつた。延寶七年八月には大阪の座元であり立役であつた大和屋甚兵衞(俳名生重)や、近松以前の上方作劇界の重鎭であつた歌舞伎脚本作者富永平兵衞(俳名辰壽)などと歌仙六卷を興行し、「句箱」と題して刊行してゐるし、また同年十一月には同じく平兵衞撰の俳書「花みち」に發句を與へたりしてゐる。つまり西鶴は俳諧をもつて生活的に上方劇壇と結びついてゐたのである。當然西鶴はその世界の裏まで知り拔いてゐた。そのことが、いかにその世界を町人の一人として愛してゐようとも、歎美的であらうとしても、「一代男」におけるが如く否定面に筆を及ぼさざるをえなかつた所以のものであらう。そしてもちろん歎美的であらうとする自分を裏切つ

て、それが經驗の世界なるが故に否定的條件に筆を及ぼさざるをえなかつた西鶴こそ、我々の庶幾する眞の西鶴の姿なのであらう。

ところが前半四卷の世界は、町人西鶴にとつて外より眺めるより仕方のない世界なのである。否定面は肯定面の彼方に霞んでゐる。よしんば眸をすゑてその形をとらへたにしても、もともと書かずにをられぬほどの肉親的な愛も憎しみもない世界なのである。西鶴が前半四卷において唯美的態度を守りおほせたのは、まさしくこの一點にかかつてゐると私は考へる。

しかも西鶴が、經驗の埒外にある武家社會の衆道を、義理と意氣地を基調とする精神美として把握するについては、說いて及ぼさざるをえない先行條件がそなはつてゐた。

4

中世のお伽草子の中に「秋の夜の長物語」「鳥部山物語」「松帆浦物語」「嵯峨物語」など、僧房の寵童を扱つた七八部の作品をあげることができるが、これ等はすべて實生活においてさうであつた如く、寵童を愛慾以上のものと見ず、煩惱卽菩提といふ類型的テーマに從つてをり、しかも西鶴がすでにそのやうな僧房の寵童を「情の道にあらず」と否定してゐる以上、お伽草子にまでさかのぼ

つて考へる必要はないわけである。でけつきよく、考察範圍は中央集權的封建社會の成立以後になるわけであるが、これを思想的にいへば、前代において指導的位置にあつた佛教の彼岸思想が一歩しりぞいて、現實主義的な儒教にその位置をゆづつた時代、すなはち武士階級が新たなる文化の擔當者として登場した時代なのである。

徳川初期に成立もしくは刊行された衆道關係書に、「犬たんか」「犬つれ〳〵」の如きものがあるが、それ等はもつぱら中世的な僧房公家の稚兒若衆の身嗜みを說いたもので、いささかも近世色は見出されない。これはおそらく建設期の秩序を要求する精神が、新しい現實に對處する餘裕や力量のないままに、とりあへず中世的なるものを動員した結果であると思はれる。

では新しい現實とはいかなるものであつたか。元和九年成立の噺本「醒睡笑」の中にその一端がうかがはれる。

武士たる人、若衆と知音せられけるを、殊外に嫉み妬み、ある時上臈堪兼ね、表へ駈出でいはるゝやう、やれそこな若衆めよ、もはや其儘これの家主になれ、明日からおだいかい（飯を盛る貝杓子）を渡さうぞと。

衆道の地盤が一般社會との、とくに女性との交渉を隔絶された僧房にあつた中世と違つて、家族制度の確立された武家社會に移行しては、そこに問題のおこらないはずがない。「醒睡笑」の作者は

實にその地盤の變化につれて新しく發生したトラブルを、もつともプリミティヴな形においてとらへたのであつた。

もちろん衆道がこのやうな一家庭内のトラブルですめば、たかだか笑話作者の題材となつて笑を提供するにとどまつたであらうが、それが一國の大小名の寵童といふことになるともはや一つの社會問題となつてくる。寛文年間刊と推定される「色物がたり」（大本一冊）に、大小名が小姓を尋ね求めて知行を與へ、譜代の臣を退け、小姓目附などといふものができて小姓の行狀を監視するので、そのために切腹を命ぜられたり追放されたりする者が出てくる。その上に小姓の親類緣者は奉公もないのに知行をかきね、代々の家老をも下目に見なす、などといふ衆道の否定的條件を列擧してゐるが、このやうな小にしては一家庭内のトラブル、大にしては一國の治亂の基となる衆道の否定的條件が、やがて「田夫物語」（寛永整版本）のやうな著作の刊行をうながすに至つたのである。「田夫物語」は武家社會における衆道流行の弊風を慨歎し、田夫者（女色黨）と華奢者（男色黨）との論爭に託して、衆道の不自然にして社會に有害なるを說いたものであるが、ひるがへつて思ふに、このやうな衆道否定の書があらはれねばならなかつたまでに衆道は新しい地盤に根をはり、强力に支持されてゐたわけであるから、否定が强ければ强いほど、一方において衆道擁護の氣運が高まつたのは當然のなりゆきであつた。

では本來アブノルマルな愛慾形式にすぎない衆道に、新時代的なレエゾン・デートルを與へるにはいかにすればよかつたか。いふまでもなくその新しい地盤、階級の思想（儒佛）によつて理念化するの一途あるのみであらう。

「田夫物語」に引續いて刊行された寛永二十年刊の「心友記」（寛文元年に「衆道物語」と改題）こそは、そのやうな武家社會の要求に應じて成つた最初の文章であつた。

著者はまづ上卷において少年を對象とし、「情」の人生的意義を說いてゐる。佛敎的立場から人生の無常的性格を「苦」として把握し、その苦の根本は煩惱にもとづく愛別離苦なる故に、煩惱の對象たる少年は情をむねとして衆生苦を救ふべきであると說き、しかも「情も人のためばかりにてなし、めぐりては皆我身へのなさけなり」と應報說をもつて裏づけ、その具體的なありかたとしては、

貴賤によらず、おもひよりたる人あらば、情の理非をきわめ、非なきやうになさけをかけたまふ心のたしなみこそしかるべからんや。

と結論してゐる。衆道における少年の立場は女性におけるよりもより受動的であるから、惑溺への警告が無視されてゐるのは當然であるが、能動的な念者（兄分）の立場については、下卷をさいてもつぱら男性道德を要請してゐるのである。

諸人ばうじやくぶじんにして、情のうけやうをしらざる時は、これいかゞあるべきや、情は光

陰のごとくなれば、道をおぼへてうくるも有、又しらずしてうくるも有、たゞ浮世の義理をちがはざるやうにたしなむにおいては、あまりおくふかき道をしらずしてもくるしからぬよしなり、去りながら又義理をしらざるものもあり、此しらぬと云は、まづ第一理非もわかず、或は少人の前にても卑詞拙談いたし、或は僞などをいひ、いふべき所にて口をとぢ、筋なき事に惡心をおこし、或は死すべき所にて死せず、むやくのことに人を恨み、或は人の異見をもちゐず、まんきをおこし、或は貪欲ふかくして人に間然をせられ、或はうき世のふしやうをもかんにんせず、とがなき人をそしり、或はぐちにても賢顏を見せ人にたのまれず、たしなみもなく、或はほうをんもしらず親をふかうにもちゐ、或はじひなさけの心もなく、大かたかくのごとくなる人もあり、これにては人間の義理とはいはれまじ、人間のぎりならば右をいちいちうらはらにおきかへてこそ、おとこの義理とはいふべけれ、この義理をちがはざるやうにたしなむにおいては、少人ほど道をしらずしてもくるしからぬよしなり。

ここに說かれてゐる意氣地と廉恥心によつて支へられた男性道德（義理）はいふまでもなく戰國時代の體驗が儒敎と結びついてでき上つた武家社會のモラルであつて、すでに寬永十一年十二月の條令にも「忠孝を勵まし、禮法を正し、常に文武を心掛、義理を專とし、風俗を亂るべからざる事」と布告されてゐるのである。

衆道の弊害は、寵童を個人的な愛慾以上のものと見なかつた中世的習俗を無批判に受ついだところに發生したものにほかならない。今「心友記」は、新時代の統率者としての武家階級の思想を動員して、人間共同態の秩序の中に理念を求めたのである。

かくして衆道は、近世武家社會におげる強力なるレエゾン・デートルを與へられ、中世的・僧房的なる男色の概念から近世的・武家的なる「衆道」の概念に飛躍したのであり、しかも中世的な稚兒若衆の身嗜みを說いた「犬たんか」や「犬つれ〳〵」に對して、武家の若衆の身嗜みを說いた「催情記」（明暦三年）の如き書があらはれるにおよんで、近世武家社會における衆道は名實ともに確立されたといつてよからう。

その後に續く衆道關係書にして、說いて義理におよばざるものはない。寛文五年刊の「よだれかけ」卷五・六は「男色二倫書」と題し、衆道の故事來歷を說いたものであるが、それさへも「ちぎりを金石のかたきになづらへ、交を水魚のおもひにならひて、其二こころなき旨をまもるは、さながら和のうちに義をもととするがゆへなり」と說いてゐるのである。

「男色大鑑」前半四卷を創作するについては、もちろん諸家の記錄をあさり、また人を介して事實の蒐集につとめたことであらう。そして蒐集した素朴な事實そのものから、意氣地と義理を基調と

する衆道の精神美を感受したであらうことは否めない。が同時にまた、さうした西鶴の直感を理念にまで昂揚せしめた外からの力として、以上のやうな「心友記」以來の傳統をかへりみなければならないのである。

しかももつとも大切なことは、「心友記」がモラルを說くに急なるあまり、美としての把握を忘れてゐるのに對して、西鶴ははじめから美的對象としてのそんでゐることである。「心友記」の說くモラルが西鶴においては美意識を中軸として廻轉する、そこに日本文學はいふに及ばず、世界文學の上に比肩すべきもののない悲壯にして淸潔なる衆道美の世界が創造せられたのである。

もちろん、西鶴文學の本質はそこにはない。けれども日本文學史上もつとも達成されたレアリストといはれる西鶴にも、かくの如き唯美主義的な一時期のあつたことを銘すべきである。

＊「寬文書籍目錄」にも改題本の「衆道物語」の名が記載されてゐる程であるから、「心友記」は西鶴のといふよりは當時の文人の讀書圈内にあつたわけで、西鶴が創作に際して參考したかどうかといふことは論議の餘地はないやうである。がなほ蛇足を加ふれば、次のやうな點から座右の書ではなかつたかとまで推せられるのである。すなはち「心友記」の上卷に「さてこそ源氏のかしはきの卷とやらんに、わりなきは情の道とあるよしを承る時は……」とあるが、西鶴は「二代男」卷七の第二章に「有時物覺のよはき人、わりなきは情の道と書しは、柏木の卷にはなきとあらそひ、去太夫殿へ、源氏物語を借に遣しけるに、云々」と書いてゐる。これなどは偶然の一致と見るわけにはいけなからう。(十六・一)

西鶴と推理小説

1

私は今まですすんで西鶴を論ずる場合、多くその高きについて語るのを常とした。なんとしても文學的情熱をかき立ててくれる西鶴でなければ、あへて筆をとる氣になれなかつたからである。しかしながら私は、文藝批評家であると同時に文藝史家であらうとする自分の目的なり立場なりを寸時も忘れたことはない。であるから私は、西鶴の中に精一ぱい自分を感じようとする一方において、感動する餘地のない作品に對しても、冷靜に研究をつづけてきたものである。

それが西鶴を全體的・發展的に把握するための必要にもとづくことはいふまでもないが、同時にまた、今の私達の感動に價しない作品であつても、それが確固たる歴史的存在である以上、そこには文學一般に關する樣々な問題を孕んでゐることを信ずるからにほかならない。

そんなわけでこの度はとくに西鶴の作品の中でもつとも低いと思はれる、それがためにかつて

伴大人にその眞僞の程を疑はれたことさへある「本朝櫻陰比事」を取上げて見たのである。

はじめ西鶴は、封建時代においてもつとも自由と富とに惠まれた彼のぞくする上方町人社會の享樂的・消費的な面の描寫に筆を起し、やがて異なる階級のモラルとその生活を取上げた武家物に轉じたが、最後には再びまた階級の罪惡と苦惱の溫床であるところの生產面（町人物）に筆を進めていつた。

五卷四十四章の短篇推理小說集であるところの「本朝櫻陰比事」は、町人物の第一作「日本永代藏」（元祿元年正月刊）に引續いて執筆し、翌二年正月に發表した作品なのである。

西鶴文學の末席をけがすこの「櫻陰比事」が、西鶴の藝術活動の上でどのやうな意味を有してゐるかを考へる前に、私は先づ推理小說集としてのこの作品の史的位置をあきらかにしてかからねばなるまい。なぜならば、この文章をここまで讀んで下すつた讀者諸君は、かならずや「西鶴と推理小說」といふ組合せにとうとつの感を抱かれたであらうからである。

無理もないことである。現在もつとも權威ある「日本文學大辭典」の「推理小說」の解說においてさへ、日本では德川末期の文久年間に、蘭學者神田孝平がオランダ語から譯した「楊牙兒奇談」と「青騎兵右家族共吟味一件」の二篇が、文獻に現はれた最初であると說かれてゐるのである。これなど推理小說の如きハイカラなもの——實はちつともハイカラでない——は、日本に發生するは

ずはないと頭からきめてかかつての解說であらうが、歐州の推理小說が日本で翻譯された最初、と訂正すべきであらう。

2

日本文學の上で推理趣味が明確な形をとつてあらはれたのは、「よんげる・きごく（柳田氏推定・一八六一年譯）より二百四十年ほど以前、德川初期の元和九年（一六二三年）に成立し、間もなく刊行された「醒睡笑」をもつてはじめとする。

市井の小犯罪など問題にしてをられなかつた群雄割據時代から、一轉して中央集權的德川幕府が成立し、奉行（又は所司代）、與力、同心、目明といつた組織的な警察制度が編制されたのであるから、それと相前後して推理趣味の發生を見たのも當然であらう。

もつとも「醒睡笑」八卷は小咄集であつて、推理的コントはそのうち卷四に十二話を收めてゐるのみであるが、これは右のやうな時代性を反映したものであると同時に、とくに作者の個人的な事情によつて取上げられたところが注目に價する。

「醒睡笑」の作者安樂庵策傳は、京都誓願寺の住職で、茶道をたしなみ、また小咄が上手だつたの

で諸侯の門に出入し、とくに豊臣秀吉の寵を受けた高等幇間であつた。徳川時代に入つてからは京都初代の所司代板倉伊賀守勝重およびその長子で二代所司代周防守重宗の眷顧を受けた。

「醒睡笑」がその重宗の求めによつて、一度御前で話した咄をまとめたものであることは、卷末の重宗奥書によつて知ることができる。ところがこの重宗といふ人が、父勝重にまさる溫情と名察の裁判官として一世に其名をうたはれた人であつたから、元來幇間的存在であつた策傳は、如才なく重宗父子の法廷逸話を收錄したのであつた。

「醒睡笑」の推理的コントは、そんな個人的な事情で取上げられたのであつたが、しかしそれでなくとも名判官として板倉父子の衆望がその種のものを要求したであらうことは、「醒睡笑」に次いで板倉父子の施政の概要や斷訟を編纂した寫本「板倉政要」が成立してゐる事實からも知られよう。

だが「板倉政要」は大衆文學として書かれたものではなかつたらしい。その敍述が極めて實際的・報告的であり、いささかもおもしろくしようといふ作爲のあとが見られないからである。八月初旬の東都新聞に、內務省警保局主催で東都日本一府十五縣の敏腕刑事座談會を開き、その推理搜査苦心談をまとめて刑事の實際的敎育資料にするといふ記事が揭載されてゐたが、「板倉政要」の編纂もそのやうな實用的な意圖の下になされたものであると思はれる。しかし意圖はどうであらうとも、結果から見れば德川初期に成立した「板倉政要」は、從來の日本文學に見られない推理趣味を

大衆に提供したことになるのであつて、寫本形式ながら廣く愛讀され、現在もなほ方々に古寫本が傳つてゐるのである。

しからばその内容はといへば、推理趣味のものであるには相違ないが、市井のトラブル・小犯罪を訴へによつて裁くといふ程度のもので、積極的な捜査の興味、あるひは殺人・怪奇等、事件そのもののスリルは盛られてゐない。「五器盗人の事」と題する一話を例にあげて見る。――五器は合器、蓋附の椀の事。――

京都七條道場の邊で、五器賣が荷物を門際におろしておどり念佛を見物してゐた。するとその荷物を平氣でかついで行く奴があるので、取戻さうとすると、却つて騙よばはりをされた。やむなく所司代に訴へると、周防守は賣物の五器を半分に分けて値段の上中下を見わけさせ、その遲速によつて强奪の犯人を指摘した。（西鶴はこの題材を「櫻陰比事」卷五「四つ五器かさねての御意」に翻案し、五器を白洲にまき散らして一時に片づけさせ、問題にならぬ遲速によつて犯人を指摘することに改めてゐる。この方が自然である。）

かやうに習俗や人情の機微に通じ、居ながらにして正邪を裁斷するといふ消極的なものであり、かつ又その推理趣味もほとんど素材によつて決せられてゐるのであつて、未だ一つのジャンルとして意識されるに至つてゐなかつたことはたしかである。が、「政要」によつてつちかはれた大衆の推

理趣味は、間もなく支那のその種の作品の翻譯をうながすに至つた。慶安二年（一六四九年）刊の「棠陰比事物語」がそれである。

この書は宋の四明桂編するところの疑獄談集「棠陰比事」の翻譯で、三版・四版と版を重ねてゐる。さすがに無警察狀態にひとしい國柄の疑獄談だけあつて、謀殺・强盜などの血なまぐさい題材が大部分をしめ、したがつて犯罪者と推理者の智能の對立が强調されてゐる。姦婦が夫を殺害し、家に火をかけて燒死を裝うたのを、その燒死體の口中に灰を含んでゐないところから、事前に殺害せるものと推理したが服罪しないので、死猪と生猪を火中に投じて實證し、以て罪に服せしめたといふやうな話が多い。しかし本書もまた「板倉政要」と同型の疑獄談集であるから、結果的に推理の方法を敍述するにとどまり、事件の經緯に筆をおよぼすことがすくないが、日本の大衆小說史上における推理趣味は、本書によつて決定的なものになつたといへるのである。

西鶴の「本朝櫻陰比事」が、これ等の先行作品と無關係であらうはずがない。まづその書名が支那の「棠陰比事」に對する命名であるばかりでなく、「棠陰比事」中の一話「丙吉驗子」を、卷一の「曇りは晴る影法師」に翻案してゐるのであるが、しかし「棠陰比事」に對して「本朝」と稱する以上、やはり「板倉政要」の形式をもつぱら攝取してゐるのは當然であらう。あらはにそれとは示さないが、每章「むかし都の町に」と起筆し、裁判官の名はただ「御前」とばかり敬稱を用ひてゐ

るのは、いはずと知れた京都所司代板倉であり、したがつて題材も「醒睡笑」によるもの一話、「板倉政要」によるもの四話を指摘することができる。

近世前期上方文學における推理趣味は、實用的な「板倉政要」と翻譯物の「棠陰比事物語」によつて大衆的嗜好となり、それ等の形式・題材をマスターした西鶴の「本朝櫻陰比事」におよんで近世的な大衆文學としての形質をそなへるに至つたのである。

3

西鶴以後の上方文學におけるその種の作品として「鎌倉比事」(寶永五年刊)と「日本桃陰比事」(寶永六年刊)「晝夜用心記」(寶永四年刊)と「儻偶用心記」(正德三年刊)等を擧げることができる。

前者はまつたく「櫻陰比事」の亞流で、事件に興味の中心を置き、推理裁斷は常識的・道德的なものになつてゐるから、推理小說としては退步である。その點むしろ「用心記」と題する二作品は先行諸作品のすべてが從つてゐる政談形式を避け、たとへば眞物の小判を自作の僞物と稱して贋造資金を詐取するといつた式の、騙術の興味を取上げてゐるところは新しい行き方といへるのであるが、實はこれも支那に「杜騙新書」とか「騙術奇談」とかいふ先蹤があるのである。

なほそのほかに「板倉政要後編」と題する十五卷の寫本が存在してゐる。「櫻陰比事」が「板倉政要」と密接な關係にあるのみならず、諸書に板倉氏末裔の撰かと解說してあるので、この寫本を無視するわけにはいかず、さる年の夏暑い盛りを上野圖書館に通つて十五卷を通讀したのはよいが、これにはまつたく一ぱい喰はされた。

德川時代の寫本は、大體たとへ潤色してあつても正體はルポルタージュなのであるが、この「板倉政要後編」は「昔都の町に」といふ起筆もそのまま、西鶴の「櫻陰比事」から二十二話を、中には文章までそつくり借用してをり、その他同じく西鶴の「新可笑話」から一話、「棠陰比事」に據るのはまだよいとして、後編と稱してゐるくせに「板倉政要」に材を仰ぐに至つては大膽不敵、啞然たるものであつた。

もつとも寫本イクオール實錄といふ先入感で見るから小癪にもさはるので、德川時代には却つて堂々と出版されたものの中に、舊作を改題・改竄して新作めかした例も多いのであるから、この寫本なども出版するつもりの草稿が、そのまま機をえずに傳はつたのかも知れない。何しろ板倉氏末裔の手に成るものでない、後人の僞作であることはあきらかである。

さて、以上のやうな上方小說における傳統が、後期江戸に繼承されてゐることはもちろんであるが、しかし他の文學のすべてがさうであるやうに、地盤の移動とともにこの系統のものもまつたく

形質が一變してしまつてゐる。

まづ第一に「板倉政要」が後退して、「大岡政談」が登場したことである。上方に文化の中心があつた時は、上方町人に畏敬された所司代板倉氏でなければならなかつたが、江戸に文化が移ると江戸町人に信仰された江戸町奉行大岡越前守忠相（享保二年就任）が引出されたのは、けだし人情の然らしむるところであらう。

「大岡政談」は「板倉政要」と違ひ、實錄と稱する「大岡仁政錄」を中心に、名判官大岡越前守の登場する講談・戲曲・小說を總稱するのであつて、その大部分は後期江戸に至つて興隆した世話講談の種本として講釋師の手になるものであつた。「天一坊」「村井長庵」「直助權兵衞」などいふ代表的な政談物をはじめとして、實に多數の大岡裁きが江戸以來の歌舞伎・講談によつて今日もなほ大衆に親まれてゐるのである。現に私は今筆を止めて、近代の上手神田伯龍子の連續ラヂオ講談、大岡政談「伊勢の初旅」の第二夜を傾聽してゐる次第である。ところがこの「伊勢の初旅」はつひに大岡樣が現はれないで終つた。それでも結構おもしろく話になるのである。そしてそこに大岡政談の性格があるといふべきである。

實用的・報告的な「板倉政要」に基礎をおく近世前期上方の推理小說は、すべて事件の經緯よりもその結果に對する推理・裁斷に興味の中心が置かれ、したがつて短篇形式に終始してゐるのに對

して、そもそもから講談・演劇と結んだ後期江戸の「大岡政談」は事件に興味の中心がおかれ、結末における越前守の登場も捜査・推理をもつぱらとする推理者としてよりは、勸善懲悪の立役者としてである場合が多いのである。そのやうな「大岡政談」の傳奇的傾向は、本來「勸懲」を主眼とする傾向小説「讀本」に合流して、馬琴の「青砥藤綱模稜案」(文化八・九年刊)、松亭金水の「大川仁政錄」(安政元・四年刊)の如き疑獄小説を生んでゐるのである。

かく見きたる時に、德川時代には積極的な捜査の興味を扱つた作品、つまり近代の推理小説におけるが如く、推理者の動きを主とした作品が皆無であるといふ事實をいかに解すべきであらうか。岡本綺堂の「半七捕物帳」における半七のごとく、實際には町奉行の配下に與力・同心・目明があり、とくに目明が今日の刑事に相當する働きをしてゐたのであるから、目明を主人公にした推理小説があつてもよいわけである。それにもかかはらず一作も現はれなかつたといふのは、もつぱら嵩にかかつた目明の非人情的存在によるものであつたと思はれる。

のがれがたきは目あかしが前　　滿平

すかぬ事あたりに近づく町人なし　　西鶴

と西鶴も「飛梅千句」(延寶七年)で、町人階級の目明に對する惡感情を披瀝してゐるが、後期江戸になるとこの傾向はいよいよ決定的なものになつてゐる。泥棒の方が利口で人間味があるといふこ

とになり、鼠小僧や鑄かけ松のやうな市井のやくざがもてはやされてゐるのであるから、萬事休すである。その素材に大衆文學の題材たる資格がなかつたからにほかならない。

4

「本櫻陰比事」について語るべきはずの私が、それをさしおいて我國の推理小說の發生と過程に筆を費したのは、從來の自國古典に對する蒙昧を打破し、あはせて「櫻陰比事」の史的位置をあきらかにしようがためであつた。そしてほぼその目的を達した。今や私は「櫻陰比事」が江戸時代のその種の作品の中で、いかに優位にあるかについて語るべきである。

たとへば卷四「大事を聞出す琵琶の音」の章は、手負ひの殺人犯が外科醫を駕籠に閉ぢこめて道筋をくらまし、隱家に迎へて治療を受けたが、その外科醫の斷片的な記憶を綜合推理して隱家を突きとめるといふ話であるが、これなど今日でも推理作家のよく用ひる手で、江戸時代の作品としてはもちろん傑出したものといへよう。がしかし「櫻陰比事」の優位は、構想の巧みさよりはむしろ創作態度の上にあるのである。

ここに幸ひ「板倉政要」と「櫻陰比事」と「大岡政談」が共通せる題材を取扱つてゐる、といふ

よりは「板倉政要」の提供せる素材を「櫻陰比事」が小說化し、さらに「大岡政談」がそれを改竄したといふ方が正しい。從つてこの三者を比較すれば、おのづから「櫻陰比事」の優位があきらかになるといふものである。「板倉政要」の原型は「聖人の公事」と題する。

洛外の貧しい町人が三條小町で金子三歩を拾つたが、「我いかに貧なればとて他人のうれへを以樂しむは道にあらず」と所司代に訴へ出た。伊賀守が辻々に右の旨を布告すると、其の日の中に落し主が名乘り出て來たが、これが素直に受取らない。拾つた者ももとより拒み、互に讓り合ふので、「我數年所司代を勤めて普く訴を聞といへども、終にかゝる訴へをきかず、末代にも稀ならんと思へば我も此訴への人數にくははるべし」と、手許の金を加へて雙方へ三歩づつ下された。「其比京わらべども傳聞て、むかしの田のくろを讓合し聖賢にひとしきとて、聖人公事と號しけるとかや」と結んでゐる。

この話が西鶴の手にかゝると、まつたく面目を一新する。「櫻陰比事」卷三「落し手有拾ひ手有」がそれである。

暮もおしつまつた或る日の夕暮、賀茂川傳ひに北山へ歸る老人が、小判三兩と書付のある紙包を拾ひ、彼方に行く柴賣らしい人に追付いて質すと、いかにも自分の落した金であるがそなたの手に入るからはそなたの物といふ。老人も、たとへ主の知れぬ金でも取つて歸れぬところと

互にいひ爭ひ、後には人だかりがした。そこで二人が所司代へ訴へ出ると、當番の役人は「是は都の今聖人なるべし」と感じて奥へ取次いだが、折ふし所司代は病中だつたので、名代の家老が捌くことになつた。家老は思案して、拾つた三兩の小判に手許の小判三兩を足して二兩づつ三所に置き、まづ落した者に二兩やつて一兩の損、拾つた者も二兩貰つて一兩の損、殘る御前の金も二兩殘つて一兩の損と見事に捌いた。

ところが病中の所司代はそれを聞いて同心せず、それはきつと二人の相談づくの仕業であらう。拾つた金の始末で論をする程の事はないし、それをわざわざ訴へ出たといふには一仔細なくてはならぬ。恐らくは所司代を利用して正直者の名を賣り、末々人を騙りの種にしようといふ巧みであらうと、二人を呼び戻して責め問はせたところが、推察通り落し主が何も知らぬ老人を使つての仕業であつた。

話は二段にわかれ、名代の家老の捌きはいふまでもなく「板倉政要」の「聖人の公事」の脫化でほとんど原型をとどめぬまでにコント化されてゐる。ここまででも話は十分おもしろくまとまつてゐるにもかかはらず、もう一足ふみこまざるを得なかつたのは、けつきよく西鶴がお話をしながらも現實から遊離できなかつたからにほかならない。

それもそのはずで、一方においてはすでに前年刊の「日本永代藏」の一篇によつて、上昇期商業

資本主義時代の、すなはち彼と血を分けた上方町人の恐るべき金錢への執着を描寫してゐたからである。病床のレアリスト所司代はほかならぬ西鶴なのである。

次に今日でもラヂオや何かで時々お目見得してゐる大岡政談の「三方一兩損」は、樣々に潤色して中篇に仕立てられてゐるが、その構想は西鶴のこの話の後半を切捨て、前半のみを大岡裁きに附會したものにほかならない。倫理的であるよりも、無慾で片意地な主人公の扱ひ方の上に、後期江戸の特色があらはれてゐるが、西鶴の作品後半の現實的解釋を切捨てたところに、まつたくの話のおもしろさだけをねらふ大衆娯樂としての構談の性格がある。

この三段階によつて知られる通り、「本朝櫻陰比事」の優位は、推理小說としての構想の巧みさにかてて加へて、現實的色彩をたたへてゐるところにある。特殊を扱ひながら、それを常に日常的なるものとの關聯において描かうとしてゐるところに、「櫻陰比事」の優位が考へられるのである。

5

いかに陳辯して見たところで、推理趣味は推理趣味にすぎない。人生のもろもろの惡の根源を追求するものではなく、結果としての惡の構成およびその摘發に興味の中心を置く以上、そこに初期

の好色本におけるが如き「生の解放」の歡喜もなければ、晩年の町人物におけるが如き「生活の苦惱」に徹した味ひもない。しよせん「本朝櫻陰比事」の存在は西鶴を高める所以のものではないのである。

では何故に西鶴ともあらう者が「櫻陰比事」の如き作品を書かなければならなかつたか。人あるひはいふであらう、我々でも純文學の牙城をまもる一方、生活のために大衆小說を書いてゐるではないかと。いかにも、わが國の小說は西鶴によつてはじめて商品價値が認められたのであるから、程度の差こそあれ經濟的理由もまんざら考へられないことはない。しかしたとへ作家が意識的に大衆小說を書いてゐるとしても、元來その作家が腹からの大衆作家でない以上、その作品はその作家の純粹なる藝術活動と無關係でありうるはずはないのである。ましてや西鶴においては純文學とか大衆文學とかの意識はなく、すべてが天禀にまかせた恣意的な藝術活動の結果なのであるから、その成立はもつぱら內部的必然として追求しなければならぬのである。

處女作の「一代男」に續く「二代男」「五人女」「一代女」など西鶴初期の作品が、德川時代に入つてはじめて最下位ながら社會的地位を與へられ、しかもやうやく經濟的に支配階級たる武家を壓倒するに至つた町人階級の「生の歡喜」を描いたものであることはいふまでもなかろう。それ等の作品が何故に優れたものとなりえたかといへば、西鶴の才能と對象がマッチしたからであるといひ

たい。すなはち町人階級の「生の歡喜」は、西鶴にとつて他種族のものではなく、生理的に感受しうる血族の歡喜であつたからである。

しかして「生の歡喜」が、知性よりも貨幣を尊重する町人において「愛慾の解放」とシノニムとなつたことは當然であつて、西鶴もまた「一代男」と「二代男」においては遊里中心に男性の立場から、「五人女」と「一代女」においては女性の立場から一般社會のノルマルな愛慾のあり方を描いてゐるのである。ところが德川時代における愛慾は、西鶴が「一代男」の冒頭で「色道ふたつに」といつてゐるやうに、アブノルマルないはゆる「衆道」が何の不思議もなくならび行はれてゐた。

西鶴はもとより「一代男」や「五人女」において衆道を副貳的に扱つてゐるのであるが、やはり何といつてもノルマルな愛慾の描寫に情熱を傾倒して來た。さうしてそのあげく、愛慾小說の最後的段階として衆道を正面から取扱つた「男色大鑑」を書いてゐるのである。

「男色大鑑」を書くに當つて、素材としての男色はどのやうな狀態にあつたかといふと、彼自身の階級を地盤とする歌舞伎子の世界と武家社會の男色、および中世以來の僧房のそれと三つの分野にわかれてゐた。ところが西鶴は、僧房の男色を「情の道にあらず」といつて取扱つてゐない。女性との交涉を斷たれた僧房の男色は、性愛として以外の意味を持たず、そのやうなものは文學たりえないからである。では男色のいかなる性格が取上げられたかといふと、「男色大鑑」の前半四卷をし

める武家の男色においては「義理」と「意氣地」の精神が强調され、後半四卷をしめる歌舞伎の世界においては、「意氣地」はもとよりとして精神的な「情」が主として强調されてゐるのである。

しかしここで忘れてはならぬことは、西鶴の强調し形象化してゐるそれ等の精神美が、西鶴の創造にかかはるものではなく、すでに實生活において論議され實行されてゐたといふことである。とくに武家社會においては、德川初期の寛永年間に、武家的イデオロギーによつて男色における義理の精神を主張した「心友記」の如き書が刊行されてをり、同じ寛永年間にあたかもその主張を裏書したかの如き血なまぐさい武家の衆道事件が「藻屑物語」と題し、寫本によつて傳へられてゐるのである。――西鶴ももとよりその事件を扱つてゐる。――

いづれにしても西鶴が、本來アブノルマルな愛慾形式であるところの男色に近世封建社會が賦與した武士的イデオロギーを見てとり、世界に比類のない「男色文學」を創造した光榮は沒することができないのであるが、しかし西鶴文學の大衆文學的なるものへの轉落の契機は、實にここに胚胎してゐるのである。

「男色大鑑」に續いて西鶴は、三十二の敵討を收めた「武道傳來記」を書いてゐる。「男色大鑑」において、義理と意地をもつぱらとするが故に血なまぐさい復讐行爲をともなふ武家の衆道を描いてゐる中に、意はおのづから復讐小說へと動いていつたのである。さすがに西鶴の目は原因の如何を

問はず正義化された武家社會の習俗の愚しさをつきえてゐるが、しかしここにはもつとも大切な、習俗の强制に對する人間としての武士の苦惱が描かれてゐない。その傾向は續く「武家義理物語」に至つて決定的なものになつてゐる。依然として義理をテーマとして、敵討といふ特殊相から一般相へ題材を求めていつたわけであるが、ここに至つてもはや、武士的モラルに從つて傀儡の如く行動する人間が描かれてゐるにすぎない。

しかも西鶴はなほあきたらず、「新可笑記」を書き「本朝櫻陰比事」を書いてゐるのである。「櫻陰比事」よりもわづか二ヶ月早く、元祿元年十一月刊の「新可笑記」は引續いて義理をテーマとするコントも扱はれてゐるが、それから派生した理非の辨別に關するコントが目立つてゐる。義理にもとづく行動が、人生における理非の判斷を前提としてゐる以上、西鶴がそこへテーマを求めたことは自然の成行きであらうし、しかもそのテーマが推理的興味を呼び起したのは當然であつた。かくて「新可笑記」にはすでに、「櫻陰比事」に編入さるべき推理趣味のコントが二三ならず介入してゐるのである。

「男色大鑑」を契機として西鶴は、異なる階級の習俗に食指を動かした結果、現象的にもしくは觀念的に題材をあさりつくして、つひに「本朝櫻陰比事」にまで轉落して行つた。つまるところそれは、西鶴の藝術活動が彼の體驗領域からはみ出したがためであつた。

ここに「體驗領域」とは、實際的な體驗の有無をいふのではなく、作家が體驗しなくとも體驗したと同樣に、生理的に感じうる領域をいふのである。敬虔なキリスト敎徒が十字架にかかつた基督の苦痛を思ふあまり、基督がその時傷を受けたと同じ場所に突然傷ができて出血をみる現象をスチグマチゼーションといふさうであるが、「體驗領域」といふもまた、文學的スチグマチゼーションにほかならない。

我々は文學の純粹度を、純文學・大衆文學といふ稱呼によつて區別してゐたことがある。かつてぜんぜん體驗に依據した私小說・心境小說が純文學と考へられてゐた時分には、この兩者のけぢめはいはずしてあきらかであつたが、プロレタリア文學以後、社會性の名の下に純文學の領域が擴大されてからといふもの、兩者のけぢめは混沌たるものとなつてしまつた。「芥川賞」と「直木賞」の混亂などは、そのもつとも端的なあらはれであつた。それについて大衆文學の純粹度が向上したのだ、いや純文學が大衆文學に接近したのだといふ嬉し悲しい論などは、けつきよく末梢的な水掛論で、要は社會性の名によつて純文學の領域が無責任に擴大された結果の越境にほかならない。優れた才能と高い知性（眞實追求の精神）と主我的な態度をもつてしても、自己の體驗領域を自覺することなしに生きた人間を描き文學の純粹を保つことは到し難いのである。もちろん「體驗領域」は都會出身と地方出身、里見弴と武田麟太郎といふ風に宿命的な制約を受けてゐるが、その制約の中

で能ふかぎり「體驗領域」を擴大する作業を、我々は文學修業といつてゐるのである。

その藝術活動が無意識であつたために、題材の興味にひきずられて體驗領域外へ逸脫し、燃え上る歡喜も身を嚙む苦惱もない知的な興味の世界へ轉落して行つた西鶴も、行きつく所まで行きつくと、やがてまた再び體驗領域内に立戻つて、世にも苛烈なる「金錢の文學」を創造してゐるのである。生れながらの作家だつたのだとすましてはをられまい。意識的であることを以て近代人と自負する我々は、無自覺なるが故に西鶴がたどつた轉落への過程をふたたびくりかへしたくないものである。（十五・十一）

西鶴と白石

1

江戸時代において最初の、そして後世に範をたれた意味において最大の經濟上の惡政は、元祿八年八月の金銀貨改鑄であらう。總量四、七三〇匁、純金四、〇五三匁の慶長金に對して、元祿金は總量四、三九六匁、純金二、六六八匁に落ちてゐるのであるから、まさしく惡鑄であるのみならず、良貨惡貨の存在は我國における最初のグレシャムの法則の發動ともなり、なかなか興味深い經濟問題なのである。

改鑄の動機はいふまでもなく德川幕府の財政窮乏にあるのであるが、幕府はその理由を次のやうに發表してゐる。

一、金銀極印古く成候付、可二吹直一旨被レ仰二出之一。且又近年山より出候金銀も多く無レ之、世間の金銀も次第に減じ可レ申に付、金銀之位を直し、世間之金銀多く成候ため此度被レ仰二付之一

候事。

元來かうした類の法令はきはめて形式的なものであるか、あるひは强ひて正當化したものであるべきはずであるが、そこに民衆をうなづかしめるだけの幾分かの眞實は存してゐるやうである。

第一の「極印古く成候付」とあるのは、いはゆる磨滅貨の類をいふのであるが、はじめて鑄造された慶長年間より正貨をのみ用ひて約百年、磨滅して市場價値を減じてゐるものが多い以上、爲政者にとつて改鑄の大きな理由となることは否めない。第二の「近年山より出候金銀も多く無之」とあるのは、鑛山事業の不振が當時の實情であるだけにもつともらしい言分ではあるが、しかし產金額の減少とすでに鑄造され流通してゐた正貨の減少といふ經濟現象との直接の關係はみとめられない。問題はさりげなく片付けられてゐる「世間の金銀も次第に減じ」といふ一句の中に存してゐるのである。

正貨減少といふ經濟現象について、當時達見をしめした二人の人物があつた。一人は民間にあつて世界最高の金錢の文學を創造した井原西鶴であり、一人は要路にあつた經濟學者新井白石であるが、ここに注意しておかねばならぬことは、元祿六年に沒して改鑄の事に遭遇せずに終つた西鶴の場合は、その透徹せる作家の眼を以て期せずして正貨減少の因をあばいたのであり、享保十年に沒した白石の場合はそのかんばしからざる結果について國家的な立場から論究してゐるといふこと

である。

2

正貨減少の因について白石の語るところは、「正貨の海外流出」である。資本が生産部面におよんでゐない手工業時代であつて見れば、貿易はもとより輸入貿易たらざるをえず、同時にそれは正貨の流出を意味するのであるから、白石の論據はまことに正しい。しかし白石の示した數字については疑問が存するのである。白石が「本朝寶貨通用事略」に示した慶長六年より寶永五年まで百八年間の海外流出金銀貨總額は、

金六百十九萬二千八百兩

銀百十二萬二千六百八十七貫

とあり、これに對して「大日本貨幣史」に示された慶長六年より元祿八年にいたる九十五年間に鑄造された金銀總額は

慶長金一千四百七十二萬七千五十五兩

慶長銀百二十萬貫

とある。白石の方には元祿八年以後の分も加算されてゐるのであるから、參酌の餘地があるとしても、數字の上から見ると金は約五十パーセント、銀はその大半が流出したことになつてゐるのである。

徳川初期におけるわが國の經濟社會は、商業資本經濟發生以前の幼稚な自然經濟時代であつたから、海外の生産品に對する庶民階級の需要ははなはだ僅少なものであつた。輸入品の多くは大名富豪等の一部上層階級を相手とする奢侈品、または内地に求めえない書籍藥種の類にすぎなかつた。また寛文から元祿にかけての商業資本經濟勃興期はと見ると、寛永十三年の天草の亂以後、鎖國政策が斷行され、わづかに基督教國にあらずと認められた和蘭と支那が貿易をゆるされたのみで、白石の示した流出額とは似てもつかない微微たる有樣であつた。この點に關しては瀧本氏も日本經濟史の中で言及されてゐるし、さらにまた竹越氏は慶長十八年より寶永七年に至る産金額を示して白石の推算が誇張であることを說いてをられる。

しかしながら正貨減少の因について、元祿前後の學者で白石の海外流出說以上に出るものは絕えてない。我々はかへつて文藝作家としての西鶴の作品に、正貨減少についてのもつとも現實的な記述を見出しうるのである。

「金銀昔に增り次第に澤山に成けるをどこへ取て置て見せぬ事ぞ、合點のゆかぬ事也」と、經濟生活を描いた第一作「日本永代藏」(元祿元年刊)の卷四に、正貨の減少に對する疑問が先づ發せられてゐる。つゞいで元祿五年刊の「世間胸算用」の卷四において、その因についてふるるところがあつた。

さても花の都ながら此金銀はどこへ行たる事ぞ、年々節分の鬼が取つて歸るもので御座ろ……世のすぼりたる物がたりして三條通りを歸れば、山がたに三星の紋ちやうちん六つとぼして車三輛に銀箱をつみ、手代らしきもの二人跡につきて咄して行くをきけば、世界にない〳〵といへども有ものは金銀じや、此銀子は隱居の祖母への寺參り銀とて親旦那が分け置かれ、明暦元年の四月に藏入して又取出すは今晩、此銀箱が世間を久しぶりに見て氣のつきを晴らすべし。……けふ此銀を出す次手に向ひ屋敷の内ぐらを見れば、寛永年中の書付の箱ばかりも由のごとし。一代にあのごとくたまるものかよ。

西鶴はまづ貧者の口をかりて正貨減少の事實にふれ、ついで寺參り銀に附添うた手代をして、一

代分限なる親方の倉入銀のおびたゞしさを語らしめてゐるのである。さらにまたこの正貨の死藏蓄積については、「永代藏」卷六にも「此津（堺）は長者のかくれ里、根のしれぬ大金持其數をしらず……寛永年中より年々取込金銀今に一度も出さぬ人も有」などといつてゐる。以上を要約すれば西鶴は西鶴の立場から、減少せる正貨は大商人の手に死藏蓄積されたりと觀察してゐるのである。

正貨の個人的蓄積は現代のやうに金融機關の發達せる時代から見ればまことに原始的な狀態である。しかし當時主として正貨保管の任に當つた兩替商の實情から推して、それもまた止むをえぬ處置であつた。このごろでも德川時代における上方の兩替商は一般の預金に對して利子を支拂はなかつたとする說もあるやうであるが、それは特殊な場合で、一般の保管利殖を目的とする預金に對しては、あきらかに利子を附してゐる。正德三年刊の「日本新永代藏」卷三に、「十年此かたに五貫目の銀をのばし、預所をさま〳〵吟味しける、堺の敦賀屋慥なるよし、いふ人の詞にかたられ、一年一步のやくそくに證文とりおき」とあり、また同書卷一にも、大津の人が一年一步の利息で銀二百七十匁預け、「貳拾七匁當年より銀の利を取そむ」とあるやうに、一年一步すなはち一割の利息を支拂つてゐるのである。

かうした好條件だけで考へると、當然一般商人はその商取引によつて得た利益金を兩替商に托したはずと思はれるが、それは兩替商の堅實性を前提として考へなければならない。當時大なる兩替

商の多くは、政商として諸侯の財政窮迫に乘じて大名貸を行ひ、巨利を博してゐたのであるが、石川自安、兩替屋善四郎、那波屋九郎右衞門のごとき一流の兩替商が相ついで倒産したのもまた大名貸で、政權の金權に對する非常手段であるところの「御斷り」にもとづくものであることは、三井高房の「町人考見錄」によつて知られるところである。金銀を生命とする町人が、かうした不安な兩替商の存在に對し、自家に銀倉を設けて正貨を蓄積したのは當然すぎるほど當然の手段であつた。しかも幕府ならびに諸大名總じて武家は典型的な消費者であつたのであり、とくに西鶴の時代は西鶴みづから「古代に替り銀が銀をもうけする世と成て、利發才覺ものよりは常體の者の資を持たる人の利德を得る時代にぞ成ける」（織留）といつてゐるやうに、資本が物をいふ時代であつて見れば、正貨は偏在せざるをえなかつたのである。

國家的な立場から考察した白石の海外流出說も數字の上の誇張はともかくとして正論たるを失はないし、同時にまた經濟の中心地大阪に生れ大阪で死んだ町人作家西鶴が指摘した正貨の偏在死藏も、封建經濟の核心をついてゐるのである。元祿八年の改鑄の因について、たとへば當時の將軍綱吉の豪奢にもとづく幕府の財政窮乏、收入の大部分を鑄造高に對する步合に仰いでゐた金銀座の建議幕府が法令でうたつた舊貨幣の磨滅、鑛山事業の不振など、大小樣々の理由をあげることができるが、しかしそれ等はいづれも派生的理由で、西鶴と白石の觀察こそより根本的なるものといふべ

きであらう。かつまた作家の眼が、とくに學者のくはだて及ばざる眞實への肉迫を示してゐるといふことも、銘すべき事實である。（十六・一）

西鶴晩年の生活と藝術

1

小說が、世界的教養と意識のもとに創作されはじめた明治以後の文壇の實踐的要求に應じえたわが國の古典作家は、王朝の紫式部でもなければ後期江戸の京傳・馬琴でもなく、じつに元祿の町人作家井原西鶴であつた。

表面にあらはれたところだけを見ても、淡島寒月にリードされた紅葉・露伴・一葉時代の形象模倣を第一期とし、抱月・花袋・白鳥・青果等に見られる自然主義時代の關心を第二期とし、大正以後の武者小路・志賀・菊池・武田・織田等々の作家に見られる關心を第三期とすることができる。けだしそれらは、直接的な影響とか攝取のみを意味するものでなく、各作家の文學觀が西鶴を復活せしめたといふ面もすくなくないのであるが、時代や世界觀をことにする作家たちの、それぞれのことなる要求に應じえたといふことは、西鶴文學の幅と深さを物語るものであらうし、そしてその

ことはけつきよく兩者の地盤としての社會機構の近似性をほかにして考へられないのである。で硯友社時代の形象模倣は問題外として、すくなくとも自然主義文學以後の西鶴への關心は、その現實主義的作風につながれ、しかもそのエスプリは、花袋・白鳥・鱗太郎氏等の言說に見られる如く、金錢と人間との鬪爭を描いた晩年の作品群「町人物」に求められてゐるのである。

四十一歳から五十二歳に至る十二年間の作家生活のうち、前半六年間の對象は第一に元祿町人の情意生活、第二に義理の觀念を主とする武家生活、第三に怪異・奇談・疑獄事件等の說話群で、態度・方法はいかにも現實主義的であるが、いはば人生の消費面を俳人的な餘裕と興味をもつて描いてゐるのであり、四十七歳以後亡くなるまでの晩年は、生產的な面、彼のぞくする階級の死活の問題を切迫した私小說的精神をもつて追求してゐるのであるから、西鶴文學のエスプリが晩年の「町人物」に求められるのは、まことに當然といはねばならない。

それにもかかはらず、いはゆる西鶴研究者達は何故に西鶴の晩年を問題にせず、初期の作品によつてのみ西鶴を語らうとするのであらうか。たまたま町人物の第一作「日本永代藏」その他の註釋書が二三ならず出てゐるとしても、その性質上、價値にふれることはもとより、文學精神に言及することのないのは當然といへば當然である。

樣々な理由が考へられるのであるが、しかしけつきよくは古典研究を文學實踐から隔絕すること

によつてその權威を保たうとする、悲しむべき國文學界の習俗のわざはひするところであらうか。だからといつて不遜にも私は、この評論をもつて實踐的要求にこたへようとするのではない。私にとつて古典に對する實踐的要求は外部にあるのではなしに、私自身の中に根ざしてゐるのであり、その意識をともなはない研究を考へることができないからである。つまり私は現代に生きてゐる私自身の要求を、みづからの手によつてみたさうとしてゐるのであつて、その結果が私以外の人々の要求に應じうるとすれば、それこそ望外の喜びといふべきである。

ここに西鶴の晩年とは、先にちよつとふれたやうに、町人物の第一作「日本永代藏」を發表した元祿元年の四十七歳から、「西鶴置土產」を殘して去つた同六年の五十二歳までをいふのであるが、その間に創作された注目すべき作品は、以上二作の他に「世間胸算用」(元祿五年)および遺稿として刊行された「西鶴織留」(同七年)「萬の文反古」(同九年)の三作がある。しかして西鶴晩年の文學を發展的に把握するためには、今までのやうに遺稿は遺稿として別に見てゐたのではらちがあかないにきまつてゐる。ともかく制作年代をきめてかからねばならないわけであるが、さいはひに「西鶴織留」の方は、「日本永代藏」にひきつづき、元祿元年から二年の春にかけて執筆した作品であることがわかつてゐるし、「萬の文反古」の方は直接的な手掛りはないが、思想的・題材的に見て「織留」以後「胸算用」以前、すなはち元祿三・四年ごろの作品であることが推定される。以上に

よつて西鶴晩年の創作は、「日本永代藏」「西鶴織留」「萬の文反古」「世間胸算用」「西鶴置土產」の配列となる。

2

西鶴が四十一歲にして「一代男」を發表するまでの約二十年間、いふまでもなく彼は俳人であつた。芭蕉によつて俳諧文學は人生の指導原理にまで向上せしめられたが、西鶴のぞくしたそれ以前の俳諧は、しだいに經濟的に生活權を確保しつつあつた新興町人階級の、餘裕ある享樂的な生活感情を地盤とする餘技的存在にすぎなかつた。寶永六年刊の「子孫大黑柱」といふ浮世草子の中に、こんな話がある。

當時の酒の產地伊丹は、俳諧の盛んな處であつたが、ある時京都から貞德門の宗匠雛屋立圃を招いて、油屋といふ小賣酒屋で俳諧を興行してゐる席上、その家の主人が付句を案じてゐる折から、門をたたいて酒買ひに來た者があつた。すると主人は靜かに席を立つて十三文の酒を賣り、引返してみごとな句を付けたので、一座の人々はもとより、宗匠の立圃も深く感動したといふのである。

よしんばこれが傳說であるとしても、芭蕉の雰圍氣からはけつしてこんな話は生れないであらう。

町人にとつてたとへ十三文の商ひでも、俳諧にかへられないといふ生活態度こそ、そのまま芭蕉以前の俳諧の位置を物語るものにほかならない。

西鶴が詩から散文へ移行したといふことは、彼のぞくしたグループの、とくに「おらんだ西鶴」の名をもつて保守派の詩人にひんしゅくされた彼の風俗詩的傾向が、みづからにふさはしい表現形式にたどりついたといふ意味にほかならないのであるが、だからといつてその俳諧におはされた享樂的・餘技的性格が、一朝にして止揚されるはずのものではない。もつとも享樂的・餘技的といつても、鑑賞者が同時に創作者でありうる俳諧のそれは、きはめて主我的なものであつたが故に、西鶴はとくに讀者の嗜好に媚びることなく創作を進めていけたのであつた。

それ故、町人物以前におけるその作品は、文章も清新であれば觀察も奇警で、人間および社會の眞實を傳へるにやぶさかでないにもかかはらず、そこには生活の苦惱に徹した味ひがない。「一代女」「本朝二十不孝」など、生活の深所にふれた隨分酷烈な相を描いてゐるにもかかはらずそれがないのは、けつきよく享樂的・餘技的性格がつきまとうてゐるからにほかならない。

作家生活十二年間の前半を、そのやうな作風・態度で過ごした西鶴も、やがて眞に誠實な作家のたどりつくべき生活の問題、とりわけ彼自身のぞくする封建第四階級の手にゆだねられた經濟生活に觀照の眼をむけるに至つた。しかしてわが國の經濟社會が近世的な體勢をとりはじめた萬治・寛

文のころ文學に身を投じ、元祿期にはすでに封建制度的限界内において一應の發達をとげた上昇期の商業資本主義時代を、その中心地大阪で、しかも町人出身の作家といふ惠まれた位置を擁して生活してきた西鶴が、最初の小說「日本永代藏」のテーマとして、すべての町人を狂奔せしめる「金」への意慾を取上げたのは當然であらう。

卷四の四「茶の十德も一度に皆」において西鶴は、一萬兩を目標に身一つでかせぎ出し、女房もむかへず茶の大問屋となつた男が、なほ惡心をおこして茶の煮殼を買ひ集め、呑茶にまぜて暴利をえたが、良心の呵責にたへかねて發狂し、寢床の廻りに金銀をならべ、人に渡ることを怨みつつ狂ひ死んだ話をしてゐるが、まことに意味深い一章といはねばならぬ。

この上昇期町人の金錢に對する地獄を恐れぬ執着が形象化されるところに、第一世上方町人の致富の權道が展開されるわけであるが、なほ西鶴はあはせて第二世が富を散じていく過程も描き、金を中心とする町人の人生を全的に把握しようとしてゐる。卷一の二「二代目は破る扇の風」など、その典型的な作品であらう。

第一世が非人間的な生活によつて築き上げた財產と遺志をついだ第二世が、一歩の金を封じ籠めた遊女あての文を拾ひ、遊里に屆けたばかりに遊びの味を覺え、四五年で財產を蕩盡してしまつた。親まさりの第二世はけつして文にまつはるロマンスを愛したのではなかつた。女に無心された

わづか一歩の金を作るのに拂つた貧しい男の苦心に同情したのである。金錢に對する親ゆづりの觀念が、强烈な現實に直面してもろくも潰えたのであつた。別ないひ方をすれば人間性の抑壓と解放、それが蓄積と散逸の過程なのである。しかして初期の「一代男」や「二代男」等において、肯定的に描かれた元祿町人の遊里における生の解放が、「永代藏」において町人生活崩壞の契機として否定的に扱はれてゐるといふことは、「永代藏」の有する敎訓的色彩によつて解すべきものではなく、西鶴の文學的意慾の、消費的・享樂的なる面より苦惱と罪惡の母胎であるところの生產的なる面への移行によるものと解すべきである。したがつて「永代藏」における西鶴の思想の展開は、その線にそうてゐるものと考へざるをえないのである。

どのやうに現實を尊重する作家であつても、作家が人間である以上、一應人生に對して理想を抱いてゐないといふことはない。西鶴もまたその例に洩れず、上昇期の人間らしく、致富の方法について潔癖で積極的な理想を示してゐるのである。

卷六の四「身代かたまる淀川のうるし」において、ある男が淀川の淵で上流からおし流されて來た漆の大塊を發見し、それを賣つてつくつた資金で成金になつた話をしたあげく、何といふかと思へば、

これは才覺の分限にはあらず、てんせいの仕合なり、おのづと金がかねまうけして其名を世上

にふれける。或は親よりのゆづりをうけ、又は博奕業にて勝を得たり、似せ物商ひ後家を見立て入聟、高野山の銀をまはし、人しらねばとてえた村へこしをかゞめ、手前のよろしきは嬉しからず、常にて分限になる人こそまことなれ。

と結んでゐる。すでに好運および親讓りの資本を拒否する以上、一切の不義・不正・卑屈なる方法を許容するはずがない。さうしてけつきよく西鶴の理想は、「才覺の分限」であり「常にて分限になる人」にあるわけであるが、換言すればそれは、まつたく正義觀に立脚した個人的能力による致富といふ、きはめて積極的・英雄的なものになるのである。

上昇期の町人社會には、もちろんそのやうな理想にかなふ町人も實在したであらうし、西鶴もまた進んでそれを取上げてゐる。卷五の四「朝の鹽籠夕の油桶」の話はまさしくその一つである。

常陸國で十萬兩の一代分限といはれたこの主人公は、無一文の青年時代から五十餘歳まで、鹽や油の荷ひ賣をして錢三十七貫、小判にして九兩餘を稼ぎためた。それに續けて西鶴は、「此男商賣に取り付いてこのかた一錢の損をしたる例なく、年々の利得を求めたれども、元少しの事なれば、金子百兩になること仲々むづかしく、やう〳〵百兩に積りて、それより次第に東長者となりぬ」といつてゐる。

たくましい勞働力と一錢も損をしたことのない商才、まさしく西鶴の理想にかなつた致富の方法

ではあるが、百兩の資を稼ぐのに三十年以上もかかつたのでは、それからさらに十萬兩にするといふことは奇蹟的でさへある。さればこそ西鶴も元少しのことなればと、自分の取上げた方法の困難さをかこつてゐるのである。

その他西鶴は、消費地である江戸の性格を洞察し、呉服の現金切賣を創始して富んだ三井の優れた商才、あるひはまた種々の發明・改良による致富を多分に正義的共感をもつて取上げたあげく、「これらは各別の一代分限、親よりゆづりなくてはすぐれてふうきになりがたし」（卷六の二）と結論してゐる。

親の讓りはもとより、好運まで拒否して、個人的才能による致富を主張してみたものの、現實に直面して見るとそれといひこれといひ、大衆の隔絶した特殊さの中に埋沒してゐるといふ事實を知り、自分で自分の抱く理想の非現實性を指摘修正せざるをえなかつたのである。

現實を尊重し、現實に對して素直なこの作家態度が、理想を裏切ることの多い現實の諸相を見逃すはずがない。たとへば卷三の三「世は拔取りの觀音の眼」においては、初瀬觀音を信心すると見せかけて、高價な時代渡りの戸帳を詐取した男の話をし、卷四の二「心を疊込む古筆屏風」においては、沒落して再起を志し、家を賣つてみたが資に足らぬので、わざくれ心になつて遊里に足を向けた男が、相手の遊女の所持する名物切はりまぜの枕屏風に目をつけ、通ひつめて女の心を盜み、

まんまとまき上げた屏風で資金をつくり、分限となつた話をしてゐる。

たまたま自分の理想にかなつた正道を歩いた男は、百兩の資金を得るために三十餘年を粉骨碎身してゐるのに、かうして不義なるが故に易々たる方法の存する現實を西鶴は正視してゐるのである。そしてそこにこそ正しいものを欲しつつも、より以上に現實を尊ぶ西鶴の作家としての苦惱があり、態度があるといふべきであらう。

さて、これまでにあげた例は、その正・不正にかかはらず、いづれも資金獲得を目ざしたものであることを忘れてはならない。いづれも致富の前提としての資金をめぐる努力なのである。西鶴ももとよりその點を意識してゐたのであつて、それ故にこそ致富の目的を達成するための最後的な方法としての資金の運用部面を、別個のテーマとして描いてゐるのである。

しかしながら、いふまでもなく町人の努力の大半は、無から有を生じねばならぬ資金獲得の過程にあるので、そこにこそ元祿町人社會の「罪惡と苦惱」および作家西鶴の「理想と現實」の相剋が集中されてゐるといふべきである。

しからば西鶴は「永代藏」によつていかなる新しい時代の眞實を把握したであらうか。「永代藏」に引續いて執筆し、やがて中絶した「織留」は、それとして語るべき多くのものを有してゐるのであるが、今ここにその點の解答のみを求めて取上げることにしたい。織留卷一に次のやうな一章が

ある。

大晦日の夜掛取りに來た手代が、受取つた銀八百目を置忘れて歸つたので、亭主は慾に迷つてそれを取隱し、後日訴訟になつても知らぬ存ぜぬで押通した。手代は主人への申譯に、とらぬ銀故に自殺して果てたので、さては、と世間よりいひ立て、次第に商賣が手薄くなるのみならず、生れた子供は手が無く、道頓堀の見世物となつて世に恥をさらし、其家は目前に絶えた。このやうな結末をつけたのは、もとより不德義を憎む心からであらうが、しかも西鶴は續けていふ。

無理なる欲はかならずせまじき事ぞかし、ならねばなるやうに世わたりはさま〳〵有、然れども望姓持たぬ商人は隨分才覺に取廻しても、利銀にかきあげ皆人奉公になりぬ。よき銀親の有人はおのづから自由にして、何にても見立の買置利得る事多し。

西鶴のこの反省によつて、先に隱匿した銀の意味があきらかになつた。それは消費を目的とするものではなくて、町人全體の夢をはらむところの致富の根本となる資金を意味する。それであつてこそわづか銀八百目のために其日の暮しにこまらぬ人が、人を寃罪に死なしめてまでもおし切らうとする切實さがあるのである。信仰に託した詐取も愛情を利用したそれも、すべて致富の前提となる資金獲得のために犯した罪惡であり不德義であつた。西鶴はそのすさまじい現實の諸相を觀照してゐるうちに、自分の理想などではどうすることもできない社會的眞實を發見したのである。

さうして同じく「織留」卷六において、「諸商賣は何によらず其道を覺えて渡世しけるは商人のつねなり。されども古代に替り銀が銀もうけする世と成て、利發才覺ものよりは常體の者の資を持たる人の利德を得る時代にぞ成ける。」と、みるべきものを見、語るべきことを語つてゐる。

3

西鶴の歿後七ヶ月めに、門人北條團水によつて刊行された「織留」の團水序に、本書の前半二卷をしめる「本朝町人鑑」と後半四卷をしめる「世の人心」は、「日本永代藏」とともに三部作とする豫定であつたとある。今、作品に卽して西鶴の意圖を推すと、「本朝町人鑑」こそ「永代藏」にきびすを接するものであつたと思はれる。それは「世の人心」が元祿町人の家庭生活の種々相を描かうとしてゐるのに對して、「町人鑑」が「永代藏」におけると同樣、積極的な經濟生活を取扱つてゐるからである。

されば「永代藏」において、西鶴が現實に喰ひ下つて把握した社會的眞實に對する作家としてまた元祿町人の一人としての解答は、先づもつて「町人鑑」に求むべきであらう。

西鶴が、資金の有無によつてのみ貧富が決定されるのだといふ無慙なる眞實の前にいさぎよく屈

服したといふことは、必ずしも町人大衆を騙つて惡德へおもむかしめる資金の惡魔的な威力をまで承認したことにはならない。しかし、正しく生きればけつきよく「資金」は得られない、致富の目的は達せられないといふのが動かしがたい現實の事態であるとすれば、「町人の生きる二つの道」すなはち惡德に生きて目的を達成するか、目的を放棄して正しく貧しく生きるか、そのいづれかをえらばねばならない。このやうな場合、もし西鶴が惡德を容認したとすれば、「町人鑑」はおそらくデカダンスとニヒルに彩られたことであらう。だが健全なる西鶴のモラルは、つひに惡德を峻拒せざるをえなかつた。「町人鑑」卷一「所は近江蚊屋女才覺」の一章は、まさしく惡德に對する悲痛なる西鶴の解答にほかならない。

一章の前半は、とくにすぐれた商才もない近江八幡の扇子屋といふ商人が、好運に惠まれて近江蚊屋の大商人となつた話で、後半はこれと對蹠的に、京育ちでしかも人なみすぐれて身過ぎに明るい萬屋甚平といふ男が、二十年このかた僅か銀二百目の資金を減らさぬかはりにのばすこともできなかつた。ところがある時在所へ養子を肝入つて銀六十目の禮を貰ひ、一代の仕合この度と喜んで歸る途中、手もなく追剝に奪はれてしまつた。かくて甚平は「我一生何程かせぎても銀三百目より內の身代に極る所を覺悟して世を渡りぬ」と西鶴は結んでゐる。

格別の商才もなく分限になつた近江蚊屋の商人と、すぐれた商才を持ちながらつひに何ほど稼い

でも銀三百目の身の程とあきらめた甚平、ここに悪徳を峻拒する心から貧富を宿命と觀じ、諦念した淋しい西鶴の姿がある。が、それは決してニヒルな「沒法子」ではない。モラリスト西鶴が敢て進んだ道である以上、讀者大衆を、より以上に自分自身を納得せしむるに足る理念が動員されねばならない。その時そのやうな西鶴を誘惑したものは、賤富清貧の思想を强調する儒教であり、また因果應報の理を說く佛教であつた。

卷二「鹽うりの樂すけ」の一章において西鶴は、取集める掛銀もなく拂ふべき借錢もない、清貧を樂しむ鹽賣の老人が小判百二十兩を拾つたが、落し主をさがして返し、禮をとらなかつたといふ話をしてゐる。「疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とす、樂も亦其の中に在り、不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。」といふ儒教の賤富思想が、ここに端的に語られてゐる。が西鶴は、さらに意味深き一つの場面を描き添へずにはをられなかつた。

その頃上京に有名な名醫があつた。ある日その名醫が、夕立の後下駄をはいて我が家の門に立つてゐると、彼の鹽賣がやつて來たので名醫はあわてて內へ逃げこんだ。人々が不思議に思つて譯をきくと、「あれは今の世の聖人なり、聖人にあじだはきながら對面するもおそれあり、又ちかづきならねば下駄ぬぐまでもなし、とかく御目にかゝらぬがよい」と言つたので、さらに問返すと、今の世に金を拾つて返す人間があるはずはない、是程の聖人は唐土にも見ぬことだといつたので、いづ

れも合點して彼の鹽賣をおそれたといふのである。

これはまた何といふ痛烈な諷刺であらうか。しかもその諷刺があまりにも安易に儒教と握手した自分自身に向つてなされたものであることに思ひを致す時、私は蕭然として襟を正さざるをえない。西鶴はまた卷二「當流のものすき」においても、正直な商人が天の惠みによつて榮えたといふ話の中で、佛教の彼岸思想が町人にとつていかに無益有害なるものであるかを、聲をはげまして說いてゐるが、これ等の矛盾・分裂こそ、觀念の世界へ韜晦せんとする自己をきびしく監視するレアリスト西鶴の魂の呻きであらねばならない。

このはげしい自己分裂、自虐の精神を、物慾の渦まく元祿の社會をすぐれた知性をもつて生き拔かうとする、一人の作家の苦悶とのみ考へてはならない。これはおよそ誠實なる作家の、一たびはへなければならぬ試錬なのである。

町人物以前の西鶴の目は、もつぱら自己の周圍にそそがれ、いはば風俗小說的傾向を示してゐた。その西鶴の目が、自己のぞくする町人社會の苦惱を通じて、今や自己に注がれはじめたのである。懷柔し切れぬ自己の發見、ここに西鶴における私小說的精神の誕生を指摘することができる。

4

「本朝町人鑑」と相前後して執筆された三部作の一「世の人心」四卷は、「永代藏」と「町人鑑」がともかくも金を目的に生きる町人の社會生活をテーマとしてゐるのに對し、ここではしばらく金への關心を離れ、中流以下の町人の家庭生活の苦惱をテーマとしてゐる。

なかんづく子を育てる親の苦勞を中心に、乳母その他の女奉公人、醫者質屋など家庭的な面に筆を及ぼしてゐるが、それ等は大方小說的構想を有せず、身邊雜記の域にとどまるものが多い。

西鶴文學の隨筆的性格については、すでに田山花袋が「西鶴小論」の中で指摘してをり、實際にまた西鶴は初期の愛慾小說時代から、主題に筆をつける前に地聲で世間話をしたり、小說の中に顏を突き出したりしてゐるのであるが、それがはげしく混亂せる文學的自意識として現はれたのは「世の人心」においてであり、そしてそれは前章で指摘した「本朝町人鑑」における自己凝視、私小說的精神の發展した形にほかならない。かく身邊雜記的性格を理解することによつて、「世の人心」は西鶴晚年の私生活と深く結びついた作品として、重要な面貌をあらはしてくるのである。

「世の人心」においてとくに異常の感を抱かざるをえないのは、「子を育てる苦勞」を敍せる箇處

か、四卷の中五ヶ所にも及んでゐることである。しかもそれ等は、「子のわづらふ程世に物うき事なし、人〳〵もたねばしらぬなり」、とか、「いきとせ生るもの子に迷はざるは一人もなし、何ほど愚かに生れ付きたる子息にても惡敷といふ事かならずなかれ」とか、あるひはまた「定なきは無常懷胎より身をなやみ、一子を形見に殘して世を去し妻女、其身はひと道なりしが、此男の身になりてのかなしさ世に又是より外に何かあるべし」などといふ思ひ入つた述懷をともなひつつ語られてゐるが、中でも注目されるのは、幼兒を殘して妻に死なれた貧しい男の、貰ひ乳の不自由さ悲しさを敍した卷六の一章と、卷四「諸國の人を見しるは伊勢」の一節である。

伊勢參宮者の生國や商賣をあてて手の內を乞ふ歌比丘尼に、十五より內の美少女に目をつけるといふ理由を傾城屋に見立てられた男が肝をつぶして、「我女郎屋にはあらず、よき娘の子に目の付事は我只一人娘を持ちけるに、いかなる前世の因果にや當年十三に成りけるが、今に足立ずして然も龜腹とか申して見ぐるしく、その上兩眼見えねば、緣に付べき沙汰絕えて明暮是をなげき、同じ年程の娘を見ては我子のあれならばと思ふからなり。」と、涙をこぼして語つたといふ話である。

「本朝町人鑑」に端を發する西鶴の私小說的・身邊雜記的傾向と、この內容を綜合して必然的にうかび上つて來るものは、

妻もはやく死し、一女あれども盲目、それも死せり。

といふ西鶴の身上に關する「見聞談叢」の記事である。すなはち私は以上によつて「世の人心」は、妻を早く失ひ、盲目の一女を男手一つで育ててゐた元祿初年當時の西鶴の生活記錄であることを信ずるものであり、しかもさらに進んで、「それも死せり」といふ一節を、「元祿五年三月廿四日歿」の「光含心照信女」に結びつけることの自然さを思ふのである。

西鶴の菩提所大阪上本町誓願寺の「日牌」には、これが「妻」となつてゐるが、しかしこの日牌は、寛政十二年七月、同寺相譽上人の編輯にかかはるものであるから、絶對の信は置き難いし、かつ「光含心照」といふ法名は、盲目の女子を暗示せるものと解せられるのである。なほこの點に關しては、「近世戲曲小說作家大觀」の著者鈴木行三氏および藤井博士も、すでに疑ひをはさんでをられる。かたがた私は、何か直接的な資料のあらはれるまで、西鶴は早く妻女を失ひ、男手一つで「盲目の一女」を育ててゐたが、それも元祿五年三月に先立ち、晩年はまつたく孤獨の中に死んでいつたことを信んずるものである。

以上によつて、元祿初年の三部作の意義を究明したわけであるが、しからばこの三部作の藝術的價値はといへば、「永代藏」は說得的でありすぎるし、「本朝町人鑑」は自己分裂の混亂を露呈し、「世の人心」は構想を失つて身邊雜記に近いものになつてゐるのであるから、いづれも形象化の度合のひくい未熟なる作品であるといはざるをえないのである。

それにもかかはらず、この三部作に我々が強く心ひかれるのは、日本文學の上で類例のない強烈な現實追求の精神をそこに見、また戯作的創作態度を止揚して、より高い私小說的境地へまでたどりついた西鶴のひたすらなる文學精神を見うるからにほかならない。

されば、三部作に示した西鶴の、そのやうに高貴なる文學精神の行方を尋ねるにあたつて、「町人鑑」と「世の人心」を中絶せしめたところの發病問題を解決しておきたい。

この問題は、一部專門家の間ではすでに定說となりつつあることと思はれるが、しかしまつたく一部に限られてゐるやうであるから、ここに一應の解說を試みることにする。

元祿元年末から同二年春にかけて執筆された「本朝町人鑑」と「世の人心」の中絶以後、同五年正月に「世間胸算用」を發表するまでの三年間に創作された小說らしい小說は、第一章であげた「萬の文反古」(遺稿・元祿九年刊)ただ一作である。おなじく元祿十二年刊の「西鶴名殘之友」もこの期間の作品であるが、これは西鶴が俳人仲間の逸話を輯錄したもので、小說として扱ふべきものではない。その他は俳諧の作法書や自作連句の自註や、發句・連句などもつぱら俳諧關係の仕事で、五冊ないし八冊物の小說を、毎年四五部づつ發表してゐた元祿元年までの西鶴の面影は見られない。

あきらかにここには、小說の如きエネルギッシュな仕事にたへない西鶴の姿がうかび上つて來るのであるが、あたかも元祿二年春時分の發病期と、同三年冬の健康狀態を物語る西鶴自身の文章が

ある。

すでにその身邊雜記的性格を指摘した「世の人心」卷四における醫者隨筆の一節に、次のやうな箇處がある。

されば世の人の付合日比のよしみは病中の時しるゝといへり。兼ては賴みにいたし置てもそれ〳〵の家業のさはりなれば、はじめの程こそ日夜に行見舞もすれ、月をかさねてのわづらひになればいつとなく他人のあらはれける。身をわけたる親子の中さへかんびやうにあぐみて、たがひにあいそをつかしさもしき心の見えすきける。

「世の人心」執筆中すでに病に冒され、それが昂じて筆を投ずるのやむなきに至つたものであることが推せられる。さらにまた元祿三年冬、西鵬（西鶴の別號）序の「俳諧團袋」は、その頃京都にあた門人團水を訪ねた折の兩吟半歌仙を卷頭に收めたものであるが、その序に、

ひと夜はなしまじりに兩吟せしに、中々老の浪のよつてもつかぬぞ、句毎にめさめて我又其心にうつして、あとよりおよぎつけども、とかく足のおもたく、やう〳〵歌仙の中ほど瀨を越所にして止ぬ。

と、わづか三十六句の歌仙さへ團水に追隨できぬ衰へを語り、また團水との兩吟半歌仙も、身の衰へをかこつ西鶴の歎聲にいろどられてゐるのである。

すゝどきは不動地藏のうつくしき　團水
蘇生して何はなすらん　西鵬
燃しきる燈をかきたてよ〳〵　團水

火影に青き人の貌はせ　團水
なげきても經帷子にきはまりて　西鵬
くゝる垣根によわる蕣　團水
老ぬればつるべの縄をたぐり捨　西鵬

この一聯の連句が我々に訴へるものは、やうやく恢復期に向つたものの、身の衰へを包むべくもない西鶴の肉體の呻きである。幸ひに再び立つて、「世間胸算用」「西鶴置土産」の二作を殘すことができたが、しかしその間に「盲目の一女」を失ひ、「置土産」は發表を見ずに再發した病のために歿した。餘裕派的創作態度を止揚して、やうやく高邁なる私小說的境地へたどりついた元祿二年以後、その肉體に加へられた重壓は、天がそのたくましい作家魂に與へた試錬なのであらうか。元祿五年正月に「世間胸算用」の一作をもつて大きなる成長を示した西鶴が、三年の病中を無爲に過したはずがない。私はその間における西鶴の生活を、文學精神を追求せずにはをられない。

5

發病以後、しばらく小說に熱中して遠ざかつてゐた俳壇へカムバックした西鶴の仕事はといふと、「俳諧式目傳書」を書いたり、自作の「獨吟百韻自註」をやつたり、いかにも後進をみちびくといふ態度が濃厚である。內容的にもたとへば「式目傳書」(元祿二年)に、

近年の俳諧に戀の言葉をうすくつかひ大かた夢なとを戀にいたす事是はよし、惣して戀の詞のつよくかゝれたるはさし合の人も見る事なれはよろしからす、噂斗にしていたすをとのみ申事也。

と、戀の附句の露骨なるをいましめてをり、

河野屋のみつが情を問寄りて
袖行水は太股だけか　(大矢數・延寶八年)

などいふ句を作つた、かつての「おらんだ西鶴」の放埒さは影もない。當然作品もしごく穩健なもので、蕉風に近い作風を示してゐる。

「渡し船」(元祿四年正月)

夕風に蚊の行花のうす曇り　萬海

生魚はこぶ里の藤の實　西鶴

負る碁のまだも止ぬは無分別　順水

牡丹わすれて戻る夕月　西鶴

このころ西鶴は、關西俳壇における蕉風興隆の先驅者たる來山・鬼貫・才麿などとよく一座してゐるので、その影響を考へないわけにはいかない。しかしながら、だからといつて西鶴晩年の文學精神をこの一筋によつて解釋し、ひいては「置土産」の枯淡をまで蕉風の閑寂に引きよせる考へ方には同意できない。

私はこの西鶴の穩健さを、一つにはこれまで卒先して奔放な生活をしてゐた西鶴が、漸次師宗因亡き後の大阪俳壇の指導者たる位置を自覺したためであると考へ、また一面には、それまで勢のおもむくままに談林の風俗詩より散文へ進み、文學的に無自覺なる狀態にあつたものが、詩と散文の區別を思惟的にではなく、體驗的に把握するに至つたがためと考へるのである。したがつて晩年の俳風の蕉風に近い穩健さをもつて小說精神をまで規定すべきではなく、それはやはり散文作品を通じて、すなはちこの期間唯一の完成された作品であるところの「萬の文反古」に求むべきである。

書翰體短扁小說集「萬の文反古」を取上げるにあたつて、何としても解決しておかねばならぬ問題がある。それはまづ第一に、なぜこのやうに完成され西鶴署名の序までともなつた作品が、生前出版のはこびに至らなかつたかといふことであり、第二には、西鶴の遺稿はすべて西鶴の亡後七年間その故庵を守つた門人團水の序文があるのに、本書にはなぜそれがないのか等々の疑問によつて、今なほこの作品を西鶴作とするにちうちよする人のあることである。この問題を解決することは、同時にまた西鶴病中の文學態度をあきらかにする所以でもあるので、推考をあへてすることにした。

以上の疑問の他に、そのレトリックが初期の作品に見られる古典を驅使した俳諧的手法をともなはないといふ理由で疑ふ人もあるが、それは「永代藏」以前と以後とでは、文學精神の飛躍とともに絢爛から質實へ文體が一變したといふ事實に氣が付かないからで、晩年の作品を熟讀した者の目から見れば、西鶴の文章とするにいささかの危惧も感じないのである。

次にまた二年から四年までの間の創作とすると、あきらかに西鶴と署名した序が問題になる。といふのは元祿元年から四年まで、西鶴は「鶴字法度」によつて「西鵬」と改稱してゐるからである。しかしながら現に、元祿二年十一月日附の「俳諧式目傳書」などにも「西鶴」と署名してゐるから必ずしも「西鵬」一本槍ではなかつたことが知られるのである。

それでけつきよく、最初の疑問がクローズアップされてくるわけであが、この疑問を解決するた

めに私は、これまで無定見に否定されてきた「都の錦」の「元祿大平記」（元祿十五年刊）における西鶴に關するゴシップを取上ることにしたい。

都の錦は播州の神主で、西鶴が歿した翌々年、二十一歳で上京し勉強してゐたが、自意識の強い封建インテリのおちいりがちなニヒルからデカダンスへとむかひ、生活に窮したあげく大阪の書肆兼作家であつた先輩西澤一風にすすめられて作家生活に入つた男である。そのゴシップは——西鶴が池野屋二郎右衞門といふ本屋に「好色浮世躍」といふ六冊物の好色本を賴まれ、前銀三百匁を借りたまま約を果さず、半年程して死んでしまつたといふのである。——半年後に死んだといふのは、「地獄に墮ちた西鶴」を描くための伏線であるから信用できないとしても、後援者西澤一風が大阪の本屋で出版界の事情に通じてゐたといふ事實とにらみ合せて、ここにすくなくとも晩年の西鶴が好色本を引受けて前借しながら、約を果さなかつたといふ事實が語られてゐると見てよからう。

これまでただ漠然と、稿料としての銀三百匁は高過ぎる、といふ理由で否定されてきたのであるが、すこし調べて見るとちよつとも高過ることはないのである。西鶴の好色本の値段は、「一代男」のやうな八冊本で銀五匁、「好色盛衰記」のやうな五冊本で四匁程度であるから、——町人物は二匁ないし三匁——いま六冊本四匁として銀三百匁の稿料は、七百五十部刷つて一割の印税に當るわけである。

西鶴が當時ほとんど唯一の作家であり、好色本が商品價値のひくい町人物とちがつて本屋の弗箱であつて見れば、これほどの謝禮はむしろ安過ぎるくらゐであらう。

で、問題はもはや西鶴がなぜ前借までしておきながら本屋の喜ぶ作品を書かず、商品價値の低い町人物ばかりを書いたかといふ點に移行する。

西鶴はもちろん、師宗因なき後の大阪俳壇の重鎭であつたから、點料が定收入のやうになつてゐたであらうが、それはしかし今の一流俳人の收入を考へてもわかるやうに、生活を支へる程度のものではなかつたであらう。それにしても「永代藏」以前のやうに、商品價値の高い好色本や武家物などを年に三・四部も書いてをれば、かれこれ生活も樂にやつて行けたであらうが、病氣で小說は書けなくなるし、ことに「本朝町人鑑」や「世の人心」において、町人大衆の苦惱を我が身の苦惱としてもだえる境地にたどりついたのでは、いくら生活が苦しくなつたからといつて、心にもない好色本は書きたくもないといふのが誠實な作家の悲劇であらう。

それでもふだん心掛けがよくて、かせげる時にかせいで貯金でもしておけばともかく、門人の團水が寶永三年に出した追善俳諧集「こゝろ葉」に、「下戶なれば飲酒の苦をのがれて美食を貯て人に喰せて樂む」といつたやうな豁達な生活をしてゐたのでは、病氣ともなれば本當に困つたであらうし、その困つた時に現金をおしつけて好色本を書いてくれとせがまれた場合、心ならずも引受けて

しまつたであらう氣持もおのづから理解されるといふものである。

しかし、引受けてしまつたものの好色本はどうしても書く氣になれない。といつて前借の責はふさがねばならない。さうして本屋に書いて渡したのが「萬の文反古」であつたと私は考へる。さうすると、歿後三年目に刊行されたこの遺稿のみが、りつぱな西鶴の序を持ちながら團水の手をへずに刊行された疑問も氷解するのである。すなはち、本屋の方では好色本の代りに賣れさうもない「萬の文反古」をあてがはれてしまひこんで置いたところ、西鶴の歿後に至つて前から關係の深い大阪の版元雁金屋や京の上村の手をへて出版のはこびとなつたものであらう。事情かくの如きものがあるとすると、そのスタイル・内容に關する種々なる疑惑もまたおのづから氷解するのである。

たとへ「織留」以來の高い文學精神が、好色本への妥協をいさぎよしとしなかつたとはいへ、前借をしてしまつた後では、本屋の要求する大衆性を何等かの形において考慮しないわけにはいかないといふのが人情であらう。さうしてみると、「萬の文反古」は何よりも先づそのユニークな書翰體といふスタイルの取上げ方に、混亂せる「織留」と對蹠的なユトリを感ぜざるをえないのである。

それより以前、寛永の「薄雪物語」において日本の書翰體小説の形式が治定し、しかも「薄雪」は艶書文範といふ實用的な面もあつて、元祿時代までに五六版を重ねてをり、その他寛文の「錦木」や「詞花懸露集」、貞享年間の「好色年八卦」等が出てをり、このスタイルは當時きはめて大衆的

なものであつた。西鶴自身も「一代男」卷七「諸分の日帳」や「男色大鑑」卷一「玉章は鱸に通はす」の章などで書翰體を用ひた經驗もあり、さして不自然でもなく、興味の動くままにこのスタイルを取上げたのであらう。

もつとも先行の作品がすべて艶書小說で、しかも往復形式の長篇であるのに對して、「萬の文反古」は一通一篇の短篇集で、ほとんど戀愛を取上げてゐないところ格段の相違があるが、しかし形式上のみならず內容的にも、大衆性を考慮したと思はれる節がある。

それは十七の短篇の大方が、「二代男」「武道傳來記」「懷硯」「日本永代藏」「織留」等、自分の舊作のテーマやプロットを流用してゐる點である。しかもそれが題材的興味を主としたものが多いといふことについて我々は、注文された大衆性へ歩み寄らねばならなかつたといふ心の翳を感ずると同時に、そこなはれた健康が新しい題材と取組むことを許さなかつたといふ事情を考へざるをえないのである。

しかしながら、だからといつて「織留」の心境をへた後の西鶴である以上、舊作を流用したといつもてそこに成長がないはずはない。一例として卷四「南部の人が見たも眞言」を取上げてみよう。

商用で奧州へ下つた京の商家の養子利平が、最上川の洪水で溺死した現場を見たといふ南部商人の話を信じ、家を立てるために嫌がる利平の女房を說伏せ、百ケ日も過ぎて後利平の弟を迎へて祝

言させると、それから二三日目に利平が無事に歸つて來た。譯がわかつてみても今更どうしようもない。誰を憎みようもない。何となくしづまり、兄弟は其夜ひそかに同道して高野熊野に參詣し、山中で刺違へて死に、女も行方知れずになつた。「最前の南部商人まざ〳〵と見たも僞りはなきよしを申祟」と結んでゐる。

この題材は舊作「懷硯」（眞享四年刊）卷一「案內しつてむかしの寢所」ですでに扱つたものであるが、その時西鶴は、漁に出て行方不明になつた男と、一年後その女房が再婚した男を、人も多い中にことさら以前から憎みあつてゐた同士としてゐる。

おなじ題材を扱つたこの二つの作品を讀んで、「懷硯」の方は珍らしい世間話といふ程度の感銘しか與へられないのに、「鶴の文反古」の方は何か寒々とした救はれがたい氣分におそはれる。それは封建時代の人間が、死をもつて解決する以外に方法のない運命の惡戲に對して、前者は人間的な憎惡を介入せしめたために、宿命の酷薄さがぼやけ、後者は善意と愛情に滿ちみちた人間關係を配したが故に拔きさしならぬ宿命を肯定せしめ、殺し合ふ人々をさへぎる餘地を我々に與へないからである。

これはもはや單なる技法の問題ではない。ここにはあきらかに一つの思想がある。人生には人間がみづからを滅すことによつて解決せねばならぬ悲痛なる瞬間があるといふ嚴肅なる事實を認めよ

うとする思想がある。それはたしかに封建的といへばいへる種類の思想ではあるが、しかし白い歯をむいていどみかかつてきた宿命に對する命をかけた人間のをたけびと、その勝利の歌聲に耳をかたむけざるをえないのである。そしてこの二つの作品の距離は、「織留」における西鶴の境地を理解することによつてのみ、發展的に把握することができるのである。

それにしても、この作品をはじめ十七の短篇の大方が舊作を流用してゐるといふ打消しがたい事實によつて、我々はとかく「萬の文反古」を輕視しがちなのであるが、しかしそのために西鶴が二三の作品に示したはげしい追求の精神を見落してはならない。

卷一「百三十里の所を拾匁の無心」において西鶴は、暮しかねて一人の兄にも相談せずに江戸へかせぎに下つた大阪の町人が、江戸でいよいよ生活に窮し、せめて大阪の土になりたいと懷郷の心しきりに、歸省の旅費十匁を兄に無心する手紙を書いてゐるが、そこでいかに如實に轉落の過程を語り、いかにみじめに誠實を誓つてゐることか。江戸で迎へた妻も子供とともに離緣し、あまつさへ「なを〳〵爰元にて持申候女房、わたくし浮氣にて持申さず候證據には我等より十二三も年寄にて御座候」と結んでゐる。他郷で生活に追ひつめられた人間が、故郷へ最後の希望をつないで妻子への愛情も義理もふりすて、わづか十匁の旅費を得るためにさらけ出すみじめさを、いささかの感傷もなく凝視してゐるのである。

ここにはまだしかし一筋の藁をつかまうとするあがきがある。が、そのあがきさへも失つた人間の姿を西鶴は追求せずにはをられなかつた。巻二「京にも思ふやう成事なし」において、それを描いてゐる。

この手紙は、都會の雰圍氣と成功にあこがれ、養家を拔出して仙臺から京都へ出奔した男が、幾度も離緣狀を送つたにもかかはらず、十八年間も男の歸鄉を待ち佗びてゐる妻をあきらめさせるために發した最後の便りである。もともと嫉妬深いのが嫌で出奔したのだといふ愛想づかしにはじまり、上京後生活の便宜上幾人もの妻を迎へたが、もとより利害だけで結びついた寄合世帶なので次から次へ持ちかへ、そのつどいささかの貯へも失ひ、遂に身一つのどん底へおちこんだ過程を報告し、「かさねては書中にて申上まじく候、我等死んだ者分になされ御たづね御無用に候」と筆を止めてゐる。

ここにも前作と同樣に、告白せざるをえないまでに追詰められた人間の心理が日常的な題材に高度な劇的效果を與へてゐるのを見る。しかしこの作品には前作の悲鳴がない。あるものは虛無へ通ずる絕望のみである。すべてを失つた今になつては、十八年もの間變らぬ妻への愛情さへ背負ひ切れぬ重荷なのである。そのすべてを棄て切つた心が、我が身の上を他人事のやうに殘酷に書立てたのである。感傷も無ければ自棄もない、虛しいまでに冷かな心で現實を凝視する主人公の心こそ、

「萬の文反古」にびまんせる妥協的性格を救うてあまりあるレアリスト西鶴の文學精神であらねばならない。さうしてこの二篇に示された境地が、健康の一時的恢復とともに結實したものが元祿五年正月刊の「世間胸算用」であつた。

なほ「萬の文反古」十七の短篇には、一々「此文の子細を考見るに」と短評が加へられてゐる。これを從來門人園水のさかしらではないかと見るむきが多かつたが、私はその文品より見て、また同じ頃俳諧の作法書や自作連句の自註を試みた西鶴の心境から推して、西鶴がみづからスタイルによつて强化された自作の簡潔性をおぎなつたものであると考へる。

6

「世間胸算用」において我々がまづ注目すべきことは、收められた二十の短篇の上に、「大晦日」といふ時間的限定が課せられてゐることである。

大晦日さだめなき世の定哉
世に住まば開けと師走の碪哉

と西鶴が發句でうたつてゐるやうに、町人の生活は富める者も貧しき者も大晦日に至つて最高潮に

達し、この日の決算を切拔けなくては新しくはじまる明日の生活に支障を來たすのだ。西鶴はそこにピントを合せて町人大衆の悲喜劇を描いてゐるのである。

この一定の「時の强調」といふ方法の下に描かれたものであるから、「胸算用」二十の短篇は事件としては無關係な人生の斷片でありながら、全體として見る時我々はそこに渾然たる人生の縮圖を見ることができる。しかも對象は窮迫せる下層町人生活であり、舞臺は上方商業都市である。すなはち西鶴は、一定の時、一定の舞臺において、一定の層の生活を描くといふ、きはめて近代的な方法をもつて二十の短篇を統制してゐるのである。

もちろんこのやうに完成された方法が、大衆性への接近によつて外から動員された「萬の文反古」のスタイルの場合とことなり、あの「京にも思ふやう成事なし」の一篇に集中された西鶴の、逞しい文學精神を母胎として新しく此世に送り出されたものであることはいふまでもない。「織留」の分裂が强靱なる現實主義的精神によつて綜合統一されたところに生れた方法である。さうして我々は、個々の作品を點檢することによつて、より具體的に「胸算用」の精神と價値を理解することができるであらう。

卷一「長刀はむかしの鞘」において、都會の一隅の長屋六七軒を對象とし、そこの住人たちがどのやうにして年の瀨を越すかを描くにあたつて、貧民街唯一の金融機關であるところの質屋にカメ

うをするゐてゐる。古い傘一本に綿繰一つ茶釜一つで銀一匁を借りてすます家があるかと思へば、女房が不斷帶を觀世こよりにしかへて持込む家もある。あるひはまた似せ梨地の長刀の鞘を持込んでねだる浪人の女房もあれば、質屋の厄介にもならず樂々と年を越すえたいの知れぬ獨り暮しの年增もゐるといふ風である。ここにはもはや、武士とか町人とかいふ階級的な對立もなければ、富める者と貧しき者の對立もない。ただあるものは貧にたゞよふ救ひなき人々のはかない生の努力のみである。

同樣な方法を、我々は卷五の「平太郎殿」についても見ることができる。平太郎といふのは親鸞上人が常陸に居た時の在俗の弟子で、色々な奇特のあつた人である。德川時代は通じて一向宗の寺で節分の夜、その平太郎殿讃談が行はれ、參詣が群集したものであつた。

ところがある年、節分と大晦日がかち合つた。いくら何でも參詣者のあらうはずがない。ある寺では初夜までに三人しか參詣者がなかつたので、坊主が言葉巧みに歸さうとすると、中でもつとも感じやすい老婆が泪とともに告白をはじめた。節分の夜なのをさいはひ、老母を寺へ參らせて行方不明と騷ぎ立て、借金取を撃退しようとする悖の苦しい智惠であつた。また一人は後家に入聟した法華宗の男で、大晦日を仕舞ひかねて追出され、今宵一夜の明し處がなく宗旨違ひの門徒寺へ參詣したのであつた。借錢がつもつて家に居れば方々より生けておかぬ身といふ第三の男が大笑ひして

語るところによれば、錢は無く身は寒く酒は飲みたく、平太郎殿讃談參りの群集を目當に履物を盜んで酒代にしようと來たのであつた。坊主も身にしみて感じてゐると、姪の安產の知らせ、掛乞と爭つて縊死した男の葬禮の依賴等々、浮世に住むからは師走坊主も隙のない事ぞかし、と結んでゐる。いふまでもなく、この二つの短篇は、「胸算用」全體に課せられた前記の方法の、もつとも典型的なあらはれなのであるが、この二作品が我々に想起せしめるものは、「鶯」や「燕」等の作品によつて伊藤永之介が提唱した方法、いはゆる「集約的レアリズム」である。

對象が農民と町人、舞臺が地方と都會の相違こそあれ、兩者には貧窮にあえぐ一定の層を、一定の時、一定の舞臺（警察署と停車場・質屋と寺院）において描かうとする共通の方法がある。元祿の作家と昭和の新進作家が、何故に期せずして同一の方法を持つに至つたか。それはこの二つの文學が、個人の性格や運命を對象とせず、貧窮の世界にただよふ自我を喪失せる大衆の運命を對象としたからにほかならない。

もつともこの場合注意せねばならぬことは、伊藤氏における對象が意識的なるものであるのに對して、西鶴のそれは自然發生的であるといふことである。

西鶴が個性的人間を對象とせず、類型的・社會的人間を對象としてゐるといふことは、「胸算用」に限らず彼の作品の總てについて言ひうることであり、さらにそれは階級制度によつて人間の類型

化を意圖せる封建社會の作家全體の上に課せられた宿命なのであるが、しかし「胸算用」的なる對象が取上られる時は、對象の運命が作家にとつて自己の運命として把握された時に限るのであり、その點伊藤氏における東北農民と、西鶴における商業都市大衆とはおなじ意味のものであらねばならない。

このやうに共通せる對象・方法を持ちながら、何故に伊藤氏の文學は甘く哀しく、西鶴の「胸算用」はをかしく冷いのであるか。私はそれが作家と對象の距離によつて決定されてゐると考へる。伊藤氏は對象への愛情をあへて掩はうとしない。對象によりそふその態度が、やがて行間にほのぼのとした抒情性を漂はし、具體的にそれは作爲的な救ひとなつてあらはれてゐる。

そのやうな伊藤氏の態度にくらべると、「胸算用」における西鶴は決して救ひを與へない。對象により添はないで、あくまでも觀照の冷たさを持してゐる。さうして餘りにも的確によそよそしくうらぶれた人間のみじめさが描き出されてゐるので、我々は時におかしくさへ感ずるのである。

しかしながら「織留」において、自己を欺きおほせなかつた西鶴を知つてゐる我々は、それが西鶴の身にそなはる冷酷さによつて生じたものではなく、いかなる現實に直面してもたじろくことのない逞しい文學態度によるものであることを指摘せざるをえない。この餘りにも逞しい文學態度に壓倒されて、今まで我々は西鶴の心のあたたかさにふれる餘裕を持たなかつたやうに思はれる。

だが卷四「小判は寢姿の夢」の一章を見給へ。年の暮、乳呑兒を抱へた夫婦が飢の一歩手前まで追ひつめられた。萬策つきて女房が子供のために乳母奉公に出た後、男は乳を離れて泣く子をあやしかね、こし方行末を思ひわづらひ、いらだつてゐると、見舞ひに來た近所の女房が慰める。——お亳さまはいとしやお内儀樣は果報、さきの旦那殿がきれいなる女房をつかふ事がすきじや、ことに此中おはてなされた奥樣に似た所がある、ほんにうしろつきのしほらしき所が其まま——といふと、男はそれを聞きもあへず、まだ使はずにあつた女房の前借を握つてかけ出し、それを聞いてからはたとへ命がはて次第と女房を取返し、「汨で年を取ける」と西鶴は結んでゐる。

一見つきはなしたやうなこの「汨で年を取ける」といふ態度を、ただ西鶴は一人や二人を救つてみてもどうにもならない多くの不仕合な町人たちの運命を見拔いてゐたからだとのみ解してはならない。この結語の中に我々は、命をかけて人間として與へられた最後の幸福を守り拔かうとする男の生き方を肯定したヒューマニスト西鶴の心を讀みとるべきである。

なまじひな救ひを與へられないだけに、「胸算用」における西鶴の表情は暗く悲痛なるものがあり、對象への愛情は深く切なるものであつた。しかも「胸算用」出版の翌々月、元祿五年三月には、彼の唯一の肉親であつた「盲目の一女」(光含心照信女)も世を去つた上に、一時小康をえた健康もまた再びくづれはじめた。

「西鶴置土産」こそは、そのやうな悲痛な心境と、暗澹たる境涯において創作された最後の作品である。

「浮世の月見過しにけり末二年」の辭世句を卷頭に掲げた「置土産」は、その歿後二三月目に、門人團水の手によつて出版されてゐる。それが、迫つた死の豫感と闘ひつつ創作されたものであることが知られる。

この最後の作品について、何よりも心をひかれるのは、收められた十五の短篇の主人公が、すべて遊蕩のあげく救はれるすべのないどん底におちた上層町人であるといふことである。それはかつての「一代男」や「二代男」の世界の住人であり、また「日本永代藏」において町人の本分を忘れた人間として否定的に扱はれた人間達である。

人あるひは、西鶴がかかる對象を取上げたことを、最後の近づいた作家の懷古的感情といふかも知れない。が、西鶴が求めたものはかつての華かさではなかつた。

自序に「去程に女郎買、さんごじゆの緒じめさげながら此里やめたるは獨もなし。手が見えて是非なく身を隱せる人其かぎりなき中にも凡萬人のし連る色道のうはもり、なれる行末あつめて此外になし」といつてゐる。西鶴が求めたものは、まさにその「なれる行末」であつた。

一旦の歡樂に巨萬の富を傾けたあげく、「一胸算用」の世界にまぎれこんだかつての寛濶なる上層町

人を拾ひ上げたのは、みじめさに求めたのではない。「胸算用」で見屑けたどん底の生活の中にあつてなほ失はれることのない人間性を求めたのであつた。

巻二「あたこ貳の袖さむし」の章は、舌を食切りたくなる程落魄しても女狂ひが止まず、「こりて此身になつてもやまぬものは好色」と、我と呆れて逢ふ人毎に語つた男を描いてゐるが、これも一つの金によつて損はれぬ人間性であらう。

次にまた、巻三「算用して見れば一年二百貫目づかひ」においては、いかにも逞しい生活力を描いてゐる。奈良の遊里で産を傾けた男が、愛人の遊女と共稼ぎの暮しの中に産婆も呼べず一子を儲けた。初の宮參りに産着もないので、ありあはせた紙細工の具足を着せ、肩車にのせて參詣した。昔を知る神官達が憐んで聲をかけると、男は平然として、おもわく女郎の胎内より出生の若君と、具足の草摺を上げて息子であることを知らせて歸つて行つた。

これはもはや本能的なものではなく、環境に順應して生き拔かうとする旺盛なる生命力であるけれども、しかし何か溺ち足りぬものが感ぜられる。知的な條件よりプリミティヴな條件が勝つてゐるからであらう。さうして最後に西鶴が到達した境地として、巻二「人には棒振むし同前におもはれ」の一章をあげることができる。

かつて吉原で盛名をうたはれた江戸伊勢町の利左衞門は、身請した愛人をつれて人々の前から姿

を消して數年、今はおなじ江戸の一隅に蟄居し、金魚の餌の棒振蟲を一日仕事二十五文に賣つて妻子を養つてゐた。ある日ふと上野の金魚屋で昔に變らぬ友人三人に出あつた利左衛門は、三人を附近の茶屋へさそひ、握つたばかりの二十五文で茶碗酒をふるまつた。なほ家まで送つて行つた三人が、利左衛門の意氣に氣兼ねしてひそかに置いて行つた金も後追ひかけて投返し、間もなく三人の好意をこばむが如く行方をくらましてしまつた。ここには明白に人間の意志と酷薄なる運命との抗爭が描かれてゐる。みづから招いたものであるとはいへ、社會的には決定的に敗北し、再起の希望の見出されない境涯にありながら、その本質において破壞されず征服されないとみづから信じ、凌辱にたへ憐憫をこばむ元祿町人の意志のたくましさ、けなげさがある。

西鶴は八年以前、大阪の豪商椀屋久右衛門の生涯を材に取つた「椀久一世の物語」において、豪奢をきはめて沒落し、つひに發狂して袖乞ひとなつたが、人の情に生きながらその身になつてもかつての習俗を失はず、大盡の心で寬潤にふるまふ椀久の末路を描いてゐるが、それはデカダンスとニヒルの錯綜せる敗北の美であつた。が、今ここに西鶴が描いた同型の人物は、敗北を承知の上で鬪ひ拔かうとする意志的人間である。精神的自我の壯麗なる啓示によつて運命を超越する人間の勝利であり、まつたく「椀久」の美と對蹠的な、哀感的悲劇美といはうか。

「置土產」における西鶴のテーマは、いかなる窮迫や苦難もこれをほろぼしえない人間性の探求で

あつた。さうして追求しえたものは、本能的なるものであり、強靱なる生活力であり、いかなる運命の暴力も破壊することのできない意志的人間の存在であつた。貧窮と孤獨と死と闘ひつつ西鶴が最後にかちえたものは、人間性に對する信頼と確信であつたのである。

「日本永代藏」から「置土產」に至る西鶴晩年の足取は、モラリスト西鶴とヒューマニスト西鶴の誠實にして悲痛なる人生記錄にほかならない。しかして小我や既成概念にとらはれないで、常に現實をふみしめ、虛無とたたかひ自己分裂の苦惱をのりこえ、高次なる統一と綜合にむかふそのたくましい現實主義的精神こそ、現代の我々にもつとも要求されて然るべき精神ではないだらうか。そして私はひそかに思ふのである。フローベルやモウパツサンやバルザックについて語ることの多い日本の知識階級の人々に、作家的良心などは問題にならなかつた十七世紀の封建社會を、かくも高邁なる精神をもつて生き拔いた作家のあることを知つてもらはねばならぬと、ひそかに思ふのである。（十五・十）

あとがき

西鶴研究をはじめてからもう十四五年になり、西鶴に關する評論を書きはじめてからかれこれ十年ほどになる。文學研究は文學史家としての機能と評論家としての機能が最高度に調和した狀態がのぞましいと考へてゐるので、私は非情な基礎的研究をつづけるとともに、おまばずながら評論をつづけてきた。ここに「西鶴の世界」と題してをさめた九べんの評論は、さんど新しく書きおろした卷頭の「西鶴の人と生涯」をのぞいて、すべて一度は發表したものである。終戰後に發表したものは「新文學」に書いた「西鶴の愛慾小說」の一べんのみで、その他は昭和十二年から昭和十七年まで、ちやうど支那事變がはじまつたころから大平洋戰爭がはじまる直前までに書いたものである。それ以後のものは一兵卒として支那戰線にもつていかれたのだからあるべきはずはないし、また內地にゐたとしても西鶴は封鎖されてゐたはずである。それだけに復員後はじめてのびのびと「西鶴の愛慾小說」を書いた時のうれしさは忘れられない。

私はいま全體的・發展的な西鶴研究の計畫をすすめてゐる。そこへ今まで書いたものをまとめて

みてはどうかといふ話がきた。いはれてみれば私はまだ西鶴の名でまとめた單行本を一冊ももたない。それにいま計畫してゐる綜合的な西鶴研究とちがつて、これまでに書いたものはすべてその時時のテーマをもつたもので、評論的性格の强いものである。それだけに元氣もいいし思い出もふかい。もちろんこのほかにもずいぶん書いてゐる。その中からこれだけをえらんだのは、「西鶴の世界」を構成する必要にもとづいたのであるが、またその一つ一つがすてがたいものであつたからである。

このごろ私が好意をよせないために、私をファッショよばはりする一部の人々があるやうである。私がそんなものであるかないか、事變がはじまつていらい戰爭にかり出されるまでの間に書いたこの一冊をよんでいただけばはつきりするだらう。人を傷けることによつて自分の正しさを證明しようとするやうなあさましい心を、おたがひに一刻もはやく清算したいものである。

昭和二十二年十一月初旬　　著者